

城山

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

— 本 文 編 —

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター



城山その2調査区全景（北から、D・E・Fトレンチ）



弥生後期遺構面Ⅱ SB1001（西から）



弥生後期遺構面Ⅰ SB0901（南から）

卷頭PL. 3



弥生後期遺構面Ⅱ S B 1004 (北から)



古墳時代遺構面 S X 0743 (北から)



S B1001 出土土器



S B0901 出土土器

序 文

城山遺跡は、龜井、加美、久宝寺、山賀、瓜生堂遺跡等と共に弥生時代以来の河内の「クニ」の歩みを解明する上で不可欠の重要な遺跡であり、立地的にも羽曳野丘陵から北に派生した河内台地の縁辺、長原台地部に所在する等、河内平野中央部より穏やかな自然環境的位置を占め、旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代はもとより、中、近世まで連綿と明確にその足跡がたどれる複合遺跡である。又、河内平野中央部との比較の上でも大いに注目を集めている遺跡もある。

本書は、近畿自動車道天理・吹田線（松原～東大阪間）が府道中央環状線中央分離帯部分を縦走する計画が施工されるに及んで確認された15遺跡の内の1つで昭和58年3月以来、発掘調査を実施してきたものの調査概要を収録した。

今回の調査によって、特に40基もの弥生時代の方形周溝墓を検出すると共に、周辺調査結果を勘案すれば南北500m、東西100mの間に数百基もの方形周溝墓の存在を推測させる等の大きな成果を得た。かくも累々と連続して構築された方形周溝墓群の意味するところを解明することは真に、河内の「クニ」の歩みを明らかにする上で、寄与するところ大なるものであろう。今後の研究に大いに期待したい。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財團法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和61年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 吉房康幸

序 文

難波津と呼ばれ、住吉大社、生玉神社に代表される海神の社を持つ大阪は、古代より海上交通を発達させ、瀬戸内海航路の終点として西日本各地との交易はもとより、大陸や朝鮮半島との門戸としても確固たる地盤を築いた我国の先進文化の窓口であった。

この難波津へもたらされた異国の文化が、やがて我国の先進文化として根ざし、伝統の文化と同化しながら独自の河内あるいは畿内文化を形成していった。その意味で河内平野の歴史の解明は、我国の文化のルーツを探る重要な位置を占めていると云えよう。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる15遺跡の発掘調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的にその実施を依頼され、既に長原遺跡をはじめ14遺跡の調査が完了し、亀井北遺跡の調査を実施している。

本書は、昭和60年10月に調査が完了した大阪市平野区長吉出戸3丁目地内に所在する城山遺跡の発掘調査の概要を記したものである。検出された弥生時代の方形周溝墓群は、盛土の高さが2mにもおよぶもので、全体数が數100基を超すと考えられており、当時の墓制を究明する重要な成果であると自負している。

最後に、立派な調査成果を挙げられた調査関係者各位の努力に敬意を表するとともに、調査を御指導いただいた大阪府教育委員会、調査の円滑な進行に多大の援助をおしまれなかった日本道路公団の関係各位に厚くお礼申し上げる次第です。

昭和61年3月

財団法人大阪文化財センター
理事長 加藤三之雄

例　　言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査の内
　　大阪市平野区長吉出戸～長吉長原に所在する城山遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 城山遺跡の発掘調査は、その1（A～C地区）、その2（D～F地区）、その3（G～J地区）
　　に別れて行なったが、本書で報告するのは、その2調査区の調査結果である。
3. 本調査は大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の
　　委託を受けて実施した。
4. 本調査に要した費用638,201,000円はすべて日本道路公団が負担した。
5. 本調査は昭和58年2月1日から昭和60年10月31日までの間実施した。
6. 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが
　　実施した。調査及び本書作成に関係した者は以下の表のとおりである。

調査関係者組織表

〈事務局〉	理事兼事務局長	小林廣喜（60年1月まで、以後理事専任）
	専務理事	住羽地米治（60年3月まで）
	事務局長	畔 謙造（60年3月まで）
	専務理事兼事務局長	村田和三郎（60年4月から）
	事務局次長兼総務課長	大塚恭朗（58年4月まで）
	同	尾田勝之（60年4月まで、以後次長専任）
	総務課長兼庶務係長	阪上允子（60年4月まで主幹兼庶務係長）
		主査 田中喜代子 主事 秋山芳廣、灰本明子
		千野和之、田口宗義、鎌山洋子、宮本哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 杉本直子 主事 小島容子
〈調査総括責任者〉	業務課長	石神 怡（59年3月まで）
	同	泉本知秀（60年4月まで）
	業務課長兼業務第2係長	中西靖人（60年4月まで主幹兼業務第1係長）
	業務課主幹	椋尾孝彦（58年5月まで）
	同	吉村信男（58年5月から）
〈長田分室〉	業務第1係	技師 山口誠治 片山彰一
〈長吉分室〉	業務第2係	係長 赤木克視 技師 平井貞子
	業務第3係	係長 広瀬和雄 技師一石神幸子、藤沢真依、 杉本二郎、辻本 武、藤永正明、上林史 郎、入江正則、阿部幸一、岩瀬 透、西 村尋文

7. 調査に際しては、日本道路公団大阪工事事務所、大阪市土木局東南工営所、平野警察署等に格別の配慮を受けた。また、調査及び遺物・図面の整理においては、三宮昌宏、清水 篤、両君の他、以下の学生諸君の協力を得た。

石田浩幸、石野みゆき、井上 淳、片平雅己、大川真樹夫、大松克守、岡村昭美、表原 隆文、笠井 勉、春日 裕、桂 政枝、川口博也、清崎かおり、国分政子、小林直之、小林辰生、小山昇三、柴田裕子、柴口圭司、下良 敦、高橋和美、高原由紀子、竹谷菜穂子、谷口文子、筒井弘一、徳弘美佐、十時ひとみ、西野真司、西浦秀起、長谷川喜也、幡野亜津子、法連利男、松井貞弓、松川徳子、丸岡陸代、溝口治子、溝添健次、宮本佳代子、森田容子、山口浩次、山脇道子、吉井久晶、李 初子

8. 馬骨の鑑定は奈良国立文化財研究所の松井 章氏、土器の胎土の砂礫観察は、八尾市立刑部小学校の奥田 尚氏、竪穴住居の焼失材のC14は大阪府立放射線研究所の柴田せつ子、川野瑛子、中林武重氏に依頼した。

9. 調査・整理中、石野博信氏、入江文敏氏、大阪市消防局、財団法人大阪市文化財協会の諸氏から多面にわたって多くの有益な御教示を得た。

10. 本書の遺構実測図の方位はすべて国土座標の北を示す。

11. 調査の際の使用した絶対高はすべてT.P.+値である。

12. 本書の記述は、奥田 尚、松井 章、柴田せつ子、川野瑛子、中林武重、赤木克己、上林史郎、藤沢真依が行ない、編集は赤木が中心となって行った。

13. 本調査にあたっては、写真・実測図等の他、カラースライドや16mm映画を作成した。これらはすべて財団法人大阪文化財センターで整理・保管している。広く利用されることを希望する。

城 山 (その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目 次

例 言

第1章	調査に至る経過	赤木克視	1
第2章	城山遺跡周辺の環境	上林史郎	2
第3章	調査の目的	藤沢真依	5
第4章	調査の方法	藤 沢	6
第5章	Dトレンチの調査	上 林	7
第6章	Eトレンチの調査	藤 沢	163
第7章	Fトレンチの調査	藤 沢	195
第8章	土器胎土の砂礫観察	奥田 尚	217
第9章	城山遺跡における堅穴住居焼失材の C-14年代測定について	柴田せつ子・川野英子・中林武重	223
第10章	城山遺跡出土の動物遺存体	松井 章	227
第11章	調査のまとめ	藤 沢	233

挿 図 目 次

fig. 1	城山遺跡周辺の遺跡分布図	3
fig. 2	Dトレンチ基本土層図、(東壁断面)	9・10
fig. 3	近・現代遺構面 S X0001.平面図及び側面図 (1/50)	11
fig. 4	近・現代遺構面 S X0001.東壁断面図 (1/50)	12
fig. 5	近・現代の主要遺構 (1/200)	13・14
fig. 6	中世水田面 I (1/200)	17
fig. 7	中世水田面 I S X0202足跡群 (矢印は歩行方向) S=1/50	18
fig. 8	中世水田面 II① (1/200)	19
fig. 9	中世水田面 II② (1/200)	20

fig.10	中世水田面II③ (1/200)	21
fig.11	中世水田面II④ (1/200)	22
fig.12	中世遺構面II、旧東除川埋砂内出土土器 S=1/4	23
fig.13	古代末～中世遺構面N R0401堰内杭列平面図及び北側断面図 (1/40)	26
fig.14	古代末～中世遺構面 (1/200)	27
fig.15	古代末～中世遺構面N R0401堰平面図及び断面図 (1/40)	28
fig.16	古代末～中世遺構面N R0401 土師器小皿出土状況平面図及び断面図 (1/20)	29・30
fig.17	古代末～中世遺構面N R0401出土遺物 S=1/4	31
fig.18	奈良～平安時代遺構面S D0502 馬骨等出土状況平面図 (1/10)	34
fig.19	奈良～平安時代遺構面 (1/200)	35・36
fig.20	奈良～平安時代遺構面S D0502出土遺物① S=1/4	37
fig.21	奈良～平安時代遺構面S D0502出土遺物② S=1/4	38
fig.22	古墳時代遺構面① (1/200)	41
fig.23	古墳時代遺構面② (1/200)	42
fig.24	古墳時代遺構面③ (1/200)	43
fig.25	古墳時代遺構面④ (1/200)	44
fig.26	古墳時代遺構面S D0702遺物出土状況平面図及び断面図	46
fig.27	古墳時代遺構面S D0702、0704出土遺物 S=1/4	47
fig.28	古墳時代遺構面S X0743遺物出土状況平面図 (1/20)	49
fig.29	古墳時代遺構面S X0743断面図 (1/20)	50
fig.30	古墳時代遺構面S X0743出土遺物① S=1/4	51
fig.31	古墳時代遺構面S X0743出土遺物② S=1/4	52
fig.32	古墳時代遺構面S X0743出土遺物③ S=1/4	53
fig.33	古墳時代遺構面S X0743出土遺物④ S=1/4	54
fig.34	古墳時代遺構面S X0744遺物出土状況平面図及び断面図	55
fig.35	弥生後期遺構面I① (1/200)	57
fig.36	弥生後期遺構面I② (1/200)	58
fig.37	弥生後期遺構面I S K0901遺物出土状況平面図及び断面図	59
fig.38	弥生後期遺構面I S K0901出土土器 1/4	59
fig.39	弥生後期遺構面I S K0901出土石器 1/2	60
fig.40	弥生後期遺構面I S X0902遺物出土状況平面図及び断面図	61
fig.41	弥生後期遺構面I S X0902出土土器 1/4	62

fig.42 弥生後期遺構面 I S B 0901上層	
及び S D0917他遺物出土状況平面図及び断面図 (1/40)	63・64
fig.43 弥生後期遺構面 I S D0917出土土器 S =1/4	65
fig.44 弥生後期遺構面 I S B 0901	
土器・炭化材等出土状況平面図及び断面図 (1/20)	67
fig.45 弥生後期遺構面 I S B 0901出土遺物① S =1/4.....	68
fig.46 弥生後期遺構面 I S B 0901出土遺物② S =1/3.....	69
fig.47 弥生後期遺構面 I S B 0901遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	70
fig.48 弥生後期遺構面 II① (1/200)	73
fig.49 弥生後期遺構面 II② (1/200)	74
fig.50 弥生後期遺構面 II③ (1/200)	75
fig.51 弥生後期遺構面 II④ (1/200)	76
fig.52 弥生後期遺構面 II S B 1001上層遺物出土状況平面図及び断面図 (1/40)	77
fig.53 弥生後期遺構面 II S B 1001土器・炭化材等出土状況平面図 (1/20)	78
fig.54 弥生後期遺構面 II S B 1001掘り上り平面図及び断面図 (S =1/40)	79・80
fig.55 弥生後期遺構面 II S B 1001出土遺物① 1/4.....	81
fig.56 弥生後期遺構面 II S B 1001出土遺物② 1/4.....	82
fig.57 弥生後期遺構面 II S B 1001出土遺物③ 1/4.....	83
fig.58 弥生後期遺構面 II S B 1001出土遺物④ 1/4.....	84
fig.59 弥生後期遺構面 II S B 1001出土遺物⑤ 1/4.....	85
fig.60 弥生後期遺構面 II S B 1001出土遺物⑥ S =1/2.....	85
fig.61 弥生後期遺構面 II S B 1001出土遺物⑦ S =1/3.....	86
fig.62 弥生後期遺構面 II S B 1002遺物出土状況平面図	
及び断面図 (1/20) 出土土器実測図 (1/4)	89・90
fig.63 弥生後期遺構面 II S B 1002掘り上り平面図及び断面図 (1/40)	91
fig.64 弥生後期遺構面 II S B 1003出土土器 S =1/4.....	92
fig.65 弥生後期遺構面 II S B 1003平面図及び断面図 (1/40)	93・94
fig.66 弥生後期遺構面 II S B 1004出土土器①.....	96
fig.67 弥生後期遺構面 II S B 1004土器・炭化材等出土状況平面図 (1/20)	97
fig.68 弥生後期遺構面 II S B 1004土器・炭化材等出土状況断面図 (1/20)	98
fig.69 弥生後期遺構面 II S B 1004掘り上り平面図・断面図 (1/40)	99・100
fig.70 弥生後期遺構面 II S B 1004出土土器②.....	101
fig.71 弥生後期遺構面 II S B 1004出土土器③.....	102
fig.72 弥生後期遺構面 II S D1016南北断面図 (1/40) 及び出土土器 (1/4)	105・106

fig.73	弥生後期遺構面II S D1018 1区遺物出土状況平面図 S=1/50.....	107
fig.74	弥生後期遺構面II S D1018 1区出土遺物① S=1/4.....	108
fig.75	弥生後期遺構面II S D1018 2区遺物出土状況平面図及び南壁断面図 S=1/50...	109
fig.76	弥生後期遺構面II S D1018 2区出土遺物② S=1/4.....	110
fig.77	弥生後期遺構面II S D1018 3区遺物出土状況平面図及び南壁断面図 S=1/50...	111
fig.78	弥生後期遺構面II S D1018 4区遺物出土状況平面図及び南壁断面図 S=1/50...	112
fig.79	弥生後期遺構面II S D1018 3・4区出土遺物③ 1/4.....	113
fig.80	弥生後期遺構面II S D1018 5区遺物出土状況平面図及び南壁断面図 S=1/50...	114
fig.81	弥生後期遺構面II S D1018 5・6区出土遺物④ 1/4.....	115
fig.82	弥生後期遺構面II S K1001 遺物出土状況平面図及び断面図 S=1/20.....	116
fig.83	弥生後期遺構面II S K1002 遺物出土状況平面図及び断面図 S=1/20.....	117
fig.84	弥生後期遺構面II S K1003 遺物出土状況平面図及び断面図 S=1/20.....	117
fig.85	弥生後期遺構面II S K1001～S K1003出土遺物 S=1/4.....	118
fig.86	弥生後期遺構面II S X1007 出土遺物 S=1/4.....	119
fig.87	弥生後期遺構面II S X1008 出土遺物 (1/4)	120
fig.88	弥生後期遺構面II S X1008 遺物出土状況平面図及び断面図 1/20.....	121・122
fig.89	弥生後期遺構面II S X1011 遺物出土状況平面図及び断面図 1/20.....	123
fig.90	弥生後期遺構面II S X1011 出土遺物 S=1/4.....	124
fig.91	弥生中期遺構面S E1103 遺物出土状況平面図及び断面図	126
fig.92	弥生中期遺構面① 1/200	127
fig.93	弥生中期遺構面② 1/200	128
fig.94	弥生中期遺構面③ 1/200	129
fig.95	弥生中期遺構面④ 1/200	130
fig.96	弥生中期遺構面S B1101周辺平面図及び断面図 (1/50)	131
fig.97	弥生中期遺構面S B1102周辺平面図及び断面図 (1/50)	132
fig.98	弥生中期遺構面S K1103遺物出土状況平面図及び断面図 (1/10)	133
fig.99	弥生中期遺構面S K1103出土土器 S=1/4.....	134
fig.100	弥生中期遺構面S K1104遺物出土状況平面図及び断面図 (1/20)	135
fig.101	弥生中期遺構面S K1104出土遺物① S=1/4.....	136
fig.102	弥生中期遺構面S K1104出土遺物② S=1/4.....	137
fig.103	弥生中期遺構面S K1106遺物出土状況平面図及び東西断面図.....	139
fig.104	弥生中期遺構面S K1106出土遺物 S=1/4	140
fig.105	弥生中期以前の自然河川① (1/200)	141
fig.106	弥生中期以前の自然河川② (1/200)	142

fig.107	弥生中期以前の自然河川N R1205東西断面216付近 (1/40)	143・144
fig.108	Eトレーナー 土層断面模式図.....	163
fig.109	Eトレーナー 第3面(近世遺構面)	165
fig.110	Eトレーナー 第6-4面(中世遺構面)	166
fig.111	Eトレーナー 第8面(古墳時代遺構面)	171・172
fig.112	Eトレーナー 第6層最下層・E S D0804・0805・E S B0901出土遺物.....	175
fig.113	Eトレーナー E S D0804出土遺物	176
fig.114	Eトレーナー 第9面(弥生時代中・後期遺構面)	179
fig.115	Eトレーナー E S B0902遺物出土状況	180
fig.116	Eトレーナー E S B0902遺物出土状況	181
fig.117	Eトレーナー E S B0902柱穴掘削状況、最終断面・出土遺物	182
fig.118	Eトレーナー E S B0902出土遺物	183
fig.119	Eトレーナー E S D0906出土遺物	186
fig.120	Eトレーナー E S K0905・0906・0907・0908埋土断面・出土遺物	188
fig.121	Eトレーナー E S K0912~16平面・断面、E S K0916暗青灰色微砂出土遺物	189
fig.122	Eトレーナー 第10面(縄文時代晚期・弥生時代前期遺構面)	191・192
fig.123	Fトレーナー 土層断面模式図	195
fig.124	Fトレーナー 第3-2面(近世遺構面)	197
fig.125	Fトレーナー 第5面(中世遺構面)	198
fig.126	Fトレーナー 第7面(古代遺構面)	203
fig.127	Fトレーナー 第8面(古墳時代遺構面)	204
fig.128	Fトレーナー F S D0802・0803出土遺物	206
fig.129	Fトレーナー 第9面(弥生時代中・後期遺構面)	207・208
fig.130	Fトレーナー F S B0901・0902・0903、F S D0903、 F S K0902・0904平面及び埋土断面図	211
fig.131	Fトレーナー F S D0902木材・木製品出土状況、埋土断面、 F S K0901埋土断面	212
fig.132	Fトレーナー F S D0902出土遺物、F S K0904遺物出土状況・出土遺物	213
fig.133	Fトレーナー 第10面(縄文時代晚期・弥生時代前期遺構面)	214

第1章 調査にいたる経過

城山遺跡は、大阪市平野区長吉出戸から長吉長原にかけて所在する。遺跡は、地下鉄谷町線建設に先立つ試掘調査によって発見されたもので、北で亀井遺跡、南で長原遺跡と接する。今回の調査は、日本道路公団が進めている近畿自動車道天理～吹田線の建設に伴うもので、府道中央環状線内の中央分離帯の高速道路用地を対象としている。調査は、日本道路公団の委託を受けて大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪文化財センターが実施している。

近畿自動車道天理～吹田線の内、既に天理～松原間、及び吹田～東大阪間は供用を開始しているが、遺跡の存在する東大阪～松原間については、昭和51年以来長原遺跡を最初にして遺跡調査を先行実施してきた。当初計画では、調査範囲を橋脚基礎部に限定して、長原遺跡から城山遺跡、亀井遺跡と順次北へ調査を進める予定であった。ところが、長原遺跡の調査過程において、保存措置を講ずる必要のある古墳等の遺構が次々と検出され、その都度大阪府教育委員会と日本道路公団との間で協議が繰り返された。その度に橋脚位置が変更され、未調査部分を対象にした調査が追加された。そのため調査期間、経費等が大幅に増加することになった。その他、大規模調査の初期にありがちな種々の問題が生じたため、その調整整理にも多くの時間が費やされた。

長原遺跡の調査終了後、その反省から調査方法、調査工程等の全面的な見直しが図られることとなった。そこで、調査方法は、遺構保存と調査の促進を両立させるために「トレンチ調査方式」が採用された。遺跡の調査順位も、長原遺跡の後は既に弥生時代の大集落として評価の定まった瓜生堂遺跡に着手することにし、新方式の成否を問うことになった。

瓜生堂遺跡の調査は、若干の問題はあったものの一応順調に推移したため、以後、この方式にのっとって調査を進めることになった。

天理～吹田線の調査期限は、瓜生堂遺跡着手時点では昭和58年末に設定されていた。しかし、調査を進めると、これまで無遺物層と考えられていたところからも遺構、遺物が多数検出されて、調査量が大幅に増大することが明かとなった。そのため、瓜生堂遺跡以後、大阪府から多くの出向職員の派遣を受けて複数遺跡を同時並行に調査し、調査の促進が図られた。ところが、なおそれ以上に遺構、遺物が続出し、調査工程は遅れを見せ、城山遺跡については昭和58年3月から着手することとなった。

城山遺跡の当初範囲は、道路公団の測量測点でSTA137+80から148+11までの約1031mであった。後に、亀井遺跡との間にあった遺跡の空白地域約140mが、城山遺跡の範囲として追加されている。調査はそれを3分割し、北よりその1、その2、その3調査区とした。その2調査区はSTA140+52から144+57までの間約405mである。調査区は、出戸交差点と地下鉄谷町線によって分断され、北よりD、E、Fの3本のトレンチが設定された。

調査は、途中工期を延長し、昭和60年9月現地調査を終了した。

(赤木)

第2章 城山遺跡周辺の環境

城山遺跡は、大阪市平野区長吉出戸・長吉長原を中心とする南北1kmに所在する縄文時代から近代にかけての種々の遺構が重複する複合遺跡である。本遺跡は、昭和48年大阪市営地下鉄谷町線建設に伴う調査によって発見され、その後の度重なる調査で、北接する亀井遺跡、南方の長原遺跡と有機的関連をもつことが明らかにされている。

城山遺跡の所在する大阪市東南部は、大和川南方に存在する羽曳野丘陵から伸びる河内台地の北端部に位置する。この台地については、開析谷によって西方の瓜破台地と東方の長原台地に大別される。本遺跡は、長原台地の北東縁辺部から、旧大和川が形成した沖積地上に立地している。本遺跡では、弥生後期の集落を除くと、亀井・長原の両遺跡と共に通した内容を有しているが、さらに、本遺跡周辺には、数多くの遺跡が立地している。以下各時代毎に周辺の遺跡を概観する。

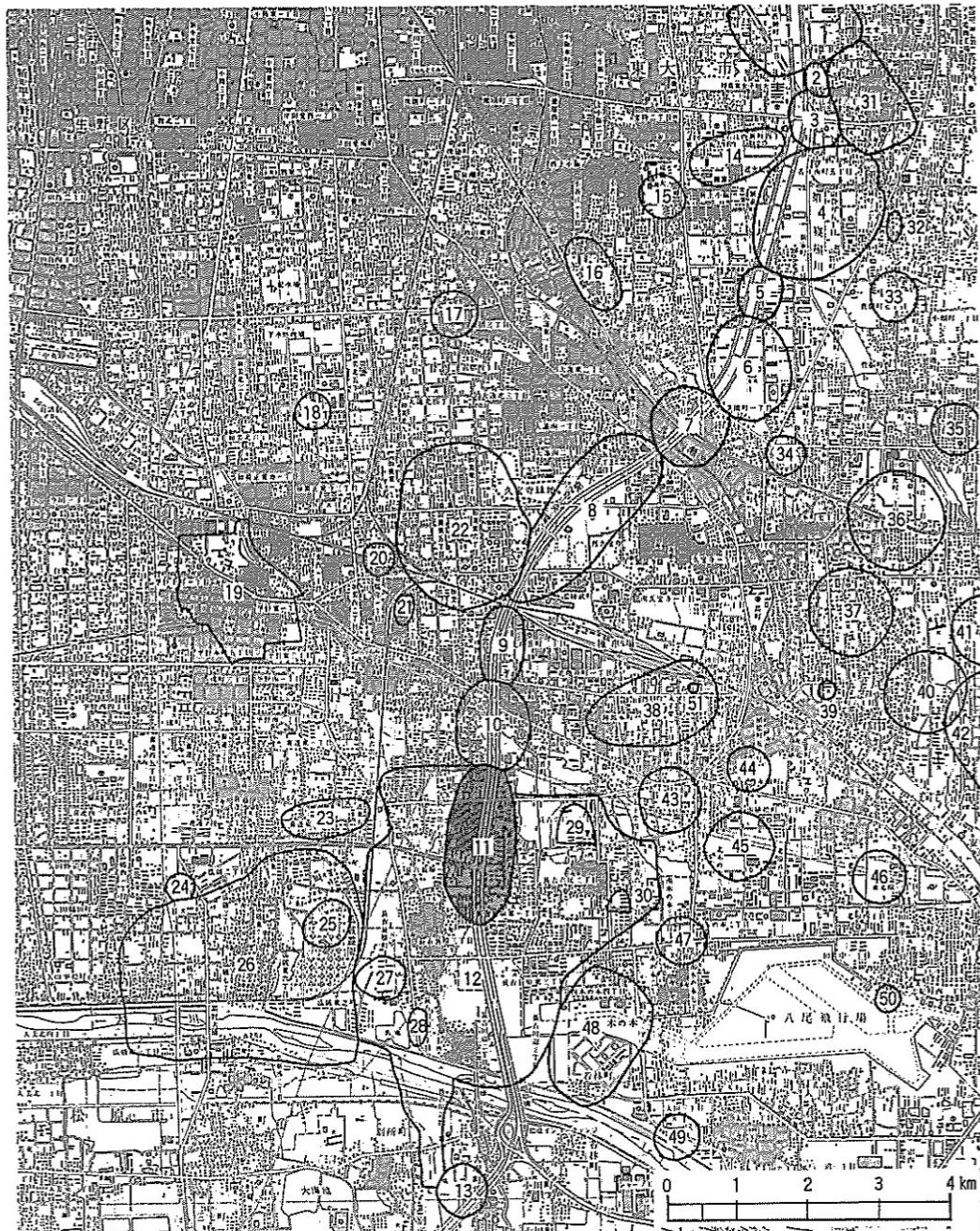
旧石器時代

羽曳野丘陵から派生する国府遺跡は、戦後の調査で出土した横長の剝片を連続して剥ぎとる瀬戸内技法によって作られる、国府型ナイフ形石器の標式遺跡としてついに有名である。同様な国府型ナイフは、長原・瓜破の両遺跡からも出土しているが、特に長原遺跡では、いわゆる長原地山層から、国府型ナイフ・有舌尖頭器・石核・縦長剝片が出土しており、注目されよう。また、最近の調査によって、藤井寺市はさみ山遺跡では、多量の国府型ナイフと共に、旧石器時代の竪穴住居が検出されている。このことは、旧石器時代の生活様式を考えるうえで貴重な資料を提供したといえよう。

縄文時代

縄文時代は、海退現象の活発化によって自然環境が一変した。人々の生活も河内湖周辺へと移ってくる。生駒山地西麓の扇状地上には恩智・馬場川・縄手遺跡、上町台地東縁部には森ノ宮遺跡が所在する。森ノ宮遺跡では、近畿最大の規模を有する貝塚が形成され、縄文から弥生時代にわたる人骨が16体検出されている。この貝塚は、2層に大別され、下層はマガキから成り、縄文後期の遺物が検出されている。上層は、シジミを主体とし、縄文晩期から弥生前期の遺物を含んでいる。このことから、縄文海退以後、河内湾が淡水化していく過程を知ることができる。大和川と石川の合流地点に所在する船橋遺跡は、その出土する「船橋式土器」の縄文晩期の標式遺跡としてよく知られている。船橋遺跡を見下す台地上には、国府遺跡が所在し、そこからは縄文・弥生両時代にわたる人骨80体が検出されている。長原遺跡では、近畿地方晩期最終段階の土器として「長原式土器」が知られている。この土器の使用と共に、住居・石器製作跡・土器棺墓・土坑が検出され、また、石棒・土偶・弓・稻穂の圧痕が見られる土器・少量の弥生土器が出土している。長原遺跡は、縄文時代から弥生時代にかけての過渡期の集落構造を如実に現わしている。

弥生時代



- | | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|----------|
| 1. 瓜生堂遺跡 | 9. 亀井北遺跡 | 17. 衣摺遺跡 | 25. 瓜破廃寺遺跡 | 33. 蓬坂A遺跡 | 41. 小阪合遺跡 | 49. 太田遺跡 |
| 2. 巨摩庭寺遺跡 | 10. 亀井遺跡 | 18. 加美北遺跡 | 26. 瓜破遺跡 | 34. 宮町遺跡 | 42. 中田遺跡 | 50. 弓削遺跡 |
| 3. 若江北遺跡 | 11. 城山遺跡 | 19. 平野環濠跡 | 27. 長吉野山遺跡 | 35. 蓬坂B遺跡 | 43. 太子堂遺跡 | 51. 池川遺跡 |
| 4. 山賀遺跡 | 12. 長原遺跡 | 20. 長榮寺廃寺 | 28. 長吉川迎遺跡 | 36. 東郷遺跡 | 44. 植松遺跡 | |
| 5. 友井東遺跡 | 13. 大堀遺跡 | 21. 鞍作廃寺 | 29. 城山古墳跡 | 37. 成法寺遺跡 | 45. 植松南遺跡 | |
| 6. 美園遺跡 | 14. 上小阪遺跡 | 22. 加美遺跡 | 30. 六反古墳跡 | 38. 跡部遺跡 | 46. 老原遺跡 | |
| 7. 佐堂遺跡 | 15. 小若江遺跡 | 23. 喜連東遺跡 | 31. 若江遺跡 | 39. 龍華寺跡 | 47. 木の本遺跡 | |
| 8. 久宝寺遺跡 | 16. 弥刀遺跡 | 24. 瓜破北遺跡 | 32. 西郡廃寺 | 40. 矢作遺跡 | 48. 八尾南遺跡 | |

fig. 1 城山遺跡周辺の遺跡分布図

弥生時代には、いわゆる低湿地内の微高地上に営まれる集落が増加してくる。瓜生堂・巨摩・恩智・山賀遺跡等の集落が出現する。瓜生堂・巨摩遺跡からは、多数の方形周溝墓・竪穴住居が検出されており、遺物としては大阪湾型銅弋や有孔銅釧の出土が注目される。また、瓜破遺跡からは貨泉が出土している。長原・友井東・山賀の各遺跡からは、前期末の水田が検出されており、河内平野の広範囲で水稻耕作が行なわれていたことが推察できる。

中期に入ると、上町台地東南縁に桑津遺跡が出現する。旧東除川、平野川流域には、久宝寺・加美遺跡がみられる。加美遺跡での最近の調査によって、南北22m、東西11mの巨大な中期の方形周溝墓が検出されている。亀井遺跡では、膨大な量の土器とともに、多数の中前期の方形周溝墓群や後期に属すると考えられる銅鏡・貨泉・銅鐸片が出土しており、それらの内容から城山遺跡周辺の中核的集落と考えられよう。

後期になると、加美・久宝寺両遺跡では、弥生後期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓群が検出されている。加美的方形周溝墓の1つには、舶載鏡（蝙蝠座鈕内行花文鏡）と碧玉製管玉が副葬されていた。また、長原遺跡では、弥生後期の火災にあった竪穴住居が三棟検出されており、本遺跡との関連が注目されよう。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、台地上においては弥生時代の集落を継承しているが、平野部においては旧大和川の度重なる氾濫や河道の変化によって、消長を繰り返しながらも小範囲に分布している。

古墳時代初頭の遺跡としては、西岩田・上田町・小若江の各遺跡があり、共に古式土師器を出土する標式遺跡である。また、久宝寺遺跡では、準構造船の部材を再利用した庄内期の用水施設が検出され、瓜破北遺跡では多数の方形周溝墓群と包含層出土の方格規矩鏡・内行花文鏡片がみられる。従来、河内平野には、古墳は存在しないと考えられていたが、近年の調査によって埋没した古墳群が確認されるようになった。美園1号墳の周溝からは、内部にベット状施設をもつ家形埴輪が出土している。中期になると、台地部には大形前方後円墳を中心する古市・百舌鳥両古墳群が形成される。長原遺跡では、4世紀末の塚ノ本古墳を始め、100基以上の5・6世紀の小形方墳が造営される。城山(その1)でも初期須恵器や韓式系土器を供献した小形方墳が検出されている。また、最近調査された長原七ノ坪古墳は、横穴式石室を内部主体にもつ小形の帆立貝式古墳であり、石室内より馬具が一括出土している。当時の馬装を復元するのに貴重な資料といえよう。

後期になれば、生駒山西麓の高安・平尾山に大型群集墳が爆発的に造営されるようになる。

古墳時代の集落は、八尾南遺跡で前期の住居や水田が検出されており、長原古墳群造営主体との関連が注目されよう。

飛鳥時代以降

長原遺跡では、条里にのった大溝をともなう平安～鎌倉期の集落が検出されている。城山(その3)より、7～8世紀の水田址が検出され、「富官家」と墨書きされた土師器が一点出土している。

大規模な開発は、この頃より顕在化してくると考えられよう。

(上林)

第3章 調査の目的

城山遺跡は北の亀井遺跡と南の長原遺跡に挟まれている。両遺跡は共に近畿自動車道の関係で、すでに昭和49年に長原遺跡が、そして昭和57年には亀井遺跡が、調査されている。その他にも亀井遺跡は当財団で昭和57年に平野川の改修工事に先立つ調査を、また、昭和55年に長吉ポンプ場用地内の調査がおこなわれた。

亀井遺跡では、各時代の平野川、漆塗りの短甲を出土した方墳、や平行する大溝と共に弥生時代の集落跡、7基の木棺を主体部とする方形周溝墓等が確認されている。集落は出土の土器から弥生時代前期の中頃に始まり後期の中頃まで続いていたようであるが、住居はあまり確認されなかった。遺跡の南端では近畿自動車道の用地内で川跡の他に埴輪をもつ方墳、方形周溝墓等が確認されており、更に南へ続くようである。他に城山遺跡範囲内で下水の豊孔部分の調査を行ない、ここでも弥生時代中期の方形周溝墓を確認している。

また、長原遺跡では昭和47年に地下鉄谷町線の延長工事に伴って城山遺跡と長原遺跡の調査をおこなっている。大阪市は、城山遺跡を、長原遺跡の範囲内に含めており、長原遺跡として報告している。城山遺跡部分は今回の調査地のEトレソチとFトレソチの間を西から南へカーブして横断している。ここでは弥生時代後期の住居を4棟検出しており、集落の存在が確認されている。この内1棟の住居は火災に合ったため多数の土器が出土した。この遺物は弥生時代後期の良好な一括資料である。また、縄文時代晩期の土器が川跡から多数出土し、長原式と名付けられた。長原遺跡では大型の前方後円墳の円丘部及び多数の小型の方墳と古墳よりも新しい時期の水田跡が一面に確認された。この水田跡は長原遺跡北端でも確認されており、さらに北の城山遺跡へも続くものと考えられる。

そこで、今回の調査ではいくつかの目的をもって調査を行なうこととした。まず、縄文時代晩期の遺構の確認をすることによって、縄文時代から弥生時代への移行期の問題を解く鍵を捜す。弥生時代の集落が亀井遺跡とどういう関係のもとに存在していたのかを明らかにする。長原古墳群の在り方とその背景を探る。長原遺跡の水田とその経営について明らかにする。古代から中世の集落とその生活基盤について明らかにする。また、亀井遺跡は沖積平野に、そして、長原遺跡は洪積段丘上に位置している。そのため段丘崖の検出や沖積状況の確認等の地形的なことや旧の東除川の流路の確認等を行う。

とかなんとか適当なことを考えながら調査を行なうこととした。実際にはそれぞれの時代に住んでいた人間の生活の一端でも明らかになることがあれば、それだけで十分であると思っているのである。どんなに珍しい遺物よりも過去の人間の生活の雰囲気が少しでもわかるほうが良いし、それを明らかにすることを第一の目的として調査を行なうこととした。そのために調査の方法も考えに考えた結果、できるだけ基本に忠実に行なうこととした。

(藤沢)

第4章 調査の方法

近畿自動車道関連の発掘調査は、最初の長原遺跡が日本道路公団の設計した橋脚位置の調査を行ない、その調査結果を基に橋脚位置を決定していった。しかし、2番目の瓜生堂遺跡以降は道路用地の中央に幅10mのトレンチを設定して調査を行なって橋脚位置を決定し、決定された橋脚位置のみを調査することになった。そのため、調査は、一遺跡で確実に二期に分けて行なわれることとなり、幅10mのトレンチの両側に約10m角のグリッドが取り付くという、いかにも魚の骨の様な形をしている。城山遺跡においても同様の方法で、トレンチとグリッドの二期の調査を行なうことになっていた。

発掘調査を始めるにあたって、調査用の割付を行なうことにした。南・北の両遺跡に共通する割付がないことから、独自に行なうこととした。亀井遺跡は国土座標を利用しているので、当遺跡でも国土座標を用いることにした。その割付は以下のようなものである。とりあえずは近畿自動車道の範囲だけをカバーできるものとし、調査用の地区呼称が国土座標にいつでも置き換えられるようにした。まず、国土座標値 $X = -39.000$ $Y = -153.000$ の地点をO点とした。この地点から東へ100mずつに区切り、1・2・・とし、さらにその中を5mごとに細分し、A・B・・とし、1A・1B・・で南北ラインを表わすことにした。東西ラインはO点から5mごとに001・002・003・・とした。両ラインの交点が示す地区名は西北5m角の範囲を指すことにした。当調査区は西・東を1T・2Qラインで、南・北を191・271ラインで囲まれている。例えば、1T191の地点は国土座標で表わすと $X = -38.900$, $Y = -154.455$ となり、2Q271は $X = -38.815$, $Y = -154.855$ となる。しかし、1T191地区は先程述べたように当調査地区外となる。

実際の調査の方法については、当遺跡が沖積層を約5m掘下げていくことから、基本的に各層位毎に掘下げていくことにし、一層毎に写真と図面をとるようにした。しかし、各層が常に一定の厚さと広がりを持っている訳ではなく、途中で切れる層や新たにでてくる層等は、その質や色調やつながり等で同一層と考えられる場合は同一層として扱うこととした。

トレンチ調査は、東に幅約1mの土層断面観察用の畔を残して行なうこととした。畔は、危険のないかぎり、途中で余程の遺構が検出された場合を除いて極力残すこととした。これは、今迄の調査から見て、特に、沖積地では層位を確実に掘めば、堆積土層が実際に多くのことを教えてくれると感じたからである。同じことはそれぞれの遺構においてもできるかぎり行なうこととした。又、一度掘ったサブ・トレンチ等は埋めることなく写真撮影や実測を行なうことにした。

グリッドの調査は、土層断面観察用の畔の位置が異なる程度で、基本的にはトレンチと同じ方法で行なうこととした。ただし、各層毎に調査は行なうが、トレンチ部分での調査で遺跡の基本ラインが明らかになってくればグリッド部分の調査は期間の問題をにらみながら行なうことになるであろう。こういった組織が行なう調査の宿命であろう。

(藤沢)

第5章 Dトレンチの調査

第1節 基本層序及び遺構面の概略

本調査区では、深掘り部分も含めて現地表面下5.6m (T.P.+10.5~4.9m)までの発掘調査を実施した。この間の土層は、種々の砂、砂質土、粘質土、シルト、粘土などよりなるが、形成過程がほぼ同一と考えられるものを一括して基本土層としてまとめた。(fig. 4)

- 第1層—耕土
- 第2層—灰黄色系粘土
- 第3層—黄褐色系砂
- 第4層—灰白色系砂（旧東除川堆積砂）
- 第5層—青灰色粘土（中世遺構面II）
- 第6層—緑灰色粘土（中世遺構面II）
- 第7層—暗青灰色粘土（古代末～中世遺構面）
- 第8層—暗緑灰色粘土（奈良時代遺構面）
- 第9層—暗黒色粘土（古墳時代包含層）
- 第10層—黒色粘土（弥生中・後期包含層）
- 第11層—緑灰色シルト（弥生後期遺構面）
- 第12層—青灰色粘質シルト（弥生中期遺構面）
- 第13層—灰色粘土
- 第14層—第2黒色粘土
- 第15層—灰白色粘土（長原地山）
- 第16層—青灰色粘土系
- 第17層—青灰色細砂

第2層の灰黄色系粘土は、トレンチ北端部にのみ見られる堆積である。堆積層の厚さは、0.3~0.6mである。層内からは、近世に属すると思われる陶磁器片等が出土している。

第3層の黄褐色系砂は、トレンチのほぼ全域に見られるが、北端部では見られない。旧東除川によって運ばれた堆積である。堆積層の厚さは、0.2~0.5mである。層内からは、瓦質の土釜片や陶磁器等が出土している。

第4層の灰白色系砂は、粗砂や細砂が互層になって堆積し、最下層には微砂が堆積している。堆積層の厚さは、0.3~1.4mである。特にトレンチ南半は、約1.3mほど堆積している。

旧東除川の氾濫によって運ばれた土砂であろう。層内からは、瓦器・土師質土釜・陶磁器等が出土している。この第4層を除去すれば、中世遺構面IIになる。中世遺構面IIは、あぜや水路が

検出された水田面である。中世遺構面IIは、高いところで、T.P.+8.8m、トレンチ南端の低いところでT.P.+8.3mの高さとなる。

第5層の青灰色粘土は、トレンチのほぼ全域に堆積している。堆積層の厚さは、0.2~0.4mである。この層の上面は、中世遺構面IIになり、上層の粗砂を除去すれば、あぜや足跡等が検出された。水田面のベースになる層である。層内からは、ほとんど遺物が検出されていないが、第4層の所見からすれば、13世紀頃までの堆積と考えられる。

第6層の緑灰色粘土は、トレンチ全域に堆積している。堆積層の厚さは、0.2~0.4mである。トレンチ南端部において、中世遺構面IIになっている。層内からは、ほとんど遺物が検出されていない。

第7層の暗青灰色粘土は、トレンチ全域に堆積している。堆積層の厚さは、0.2~0.5mである。この層の上面は、古代末~中世遺構面になる。N R0401は、この層を切りこんで形成されている。層内からは、ほとんど遺物が検出されていないが、N R0401内出土の遺物によって少なくとも12世紀頃までの堆積と考えられる。

第8層の暗緑灰色系粘土は、トレンチのほぼ全域に堆積している。堆積層の厚さは、0.2~0.4mである。この層の上面は、奈良時代遺構面になる。S D0502は、この層から切り込まれている。

第9層の青黒色粘土は、須恵器等を含む古墳時代中・後期の包含層である。堆積層の厚さは、0.05~0.2mである。この第9層を除去すれば、古墳時代の遺構面になる。No.214付近には、小区画のあぜが見られた。

第10層の黒色粘土は、トレンチ全域に堆積している。堆積層の厚さは、0.1~0.2mである。この層の上面は、古墳時代遺構面になる。層内には、弥生時代中~後期の遺物を包含している。この層を除去すれば、弥生時代後期の遺構面になる。弥生時代後期の遺構面の高さは、北端でT.P.+6.55m、南端でT.P.+7.05mである。240mのトレンチ内で約0.5mの傾斜がみられる。

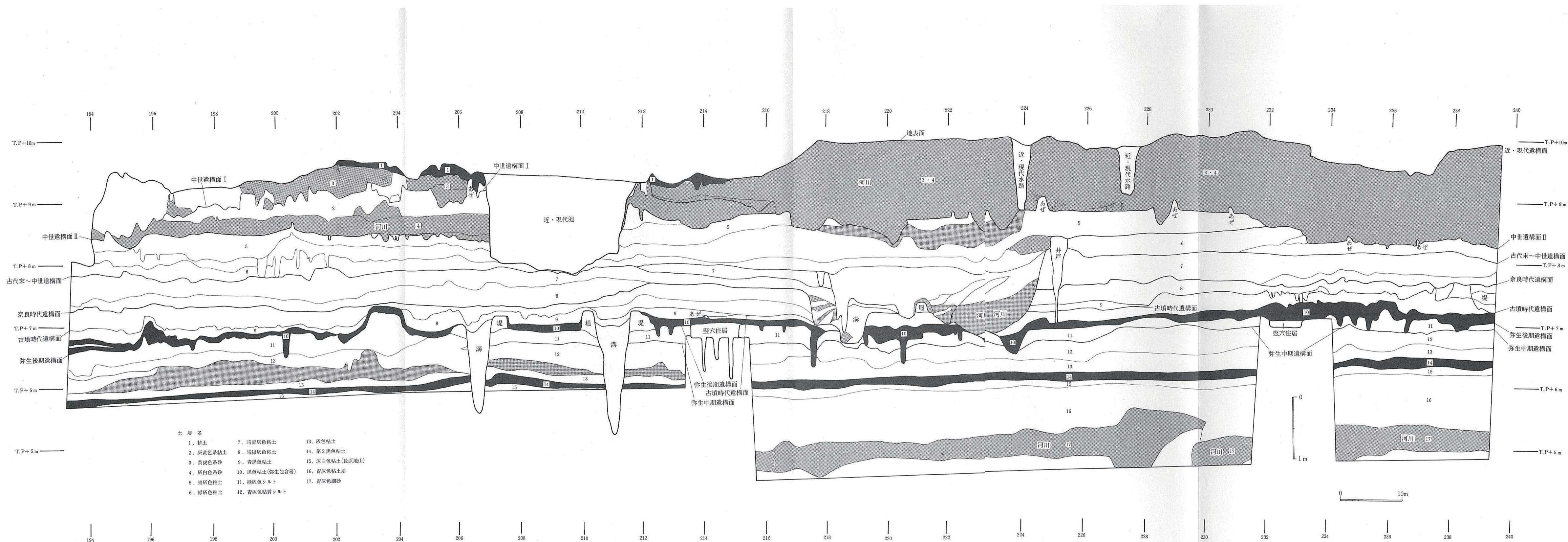
第11層の緑灰色シルトは、トレンチ全域に堆積している。堆積層の厚さは、0.15~0.2mである。この層の上面が、弥生後期の遺構面になる。

第12層の青灰色粘質シルトは、トレンチのほぼ全域において堆積している。堆積層の厚さは0.15~0.3mである。この層の上部には、黒い縞状の汚れがあり、汚れの上面が遺構面になっている。この層の上面が弥生中期~後期初頭の遺構面になる。高さは南端部で、T.P.+6.95mである。

第13層の灰色粘土は、トレンチ全域に堆積している。堆積層の厚さは約0.3mである。

第14層の第2黒色粘土は、トレンチ全域に堆積している。堆積層の厚さは、0.1~0.15mをはかる。土色は黒色のものとあづき色に近いものがあり、土質については“コールタール”状に粘いものとパサパサとした乾いたものがある。No.231付近では、第2黒色粘土内から、約20cm大の軽石が出土している。火山の噴火による軽石と考えられるが、明確ではない。また、第2黒色粘土自体が火山灰であるという可能性もあるが判然としない。

第15層の灰白色粘土は長原地山である。T.P.+6.3~+9.7mの堆積で無遺物層である。



ンチ 基本土層図（東壁断面）

第2節 近代～現代遺構面

本調査区における最も新しい遺構面で、第3層（黄褐色系砂）上面である。検出面の高さはT.P.+10m前後を測る。検出された遺構面は明治時代以後現代に及ぶが、大半は明治時代頃の遺構である。

A. 暗渠

S X 0001 No.224付近で検出された。トレントに直交する形で、東西に延びる。長10m以上、幅3.1m、深さ1.3mの坑を上部からV字形に穿ち、その底に断面正方形に板材を組合せて箱状にして一直線に並べたものである。

底材は幅約23cm、厚さ約2cm、長さ120cm～440cmの板を一直線に敷き並べる。そして側板は底板と同じ規模の板材を使用して底板をはさみこむ形で据えられる。底板と側板は鉄くぎによって固定されている。

側板には蓋板がおかれて、鉄くぎによって同様に固定される。蓋板の規模は様々であるが、長辺35cm、短辺25cm、厚さ2～3cmのものが多い。

板材の数については底板が4枚、両側板が4枚づつ、蓋板が30枚以上見られる。板材の合せ目は、きっちりと為されている。箱状の板材の周りに青色粘質土がつめられ、その上部に砂質土が入れられる。そして坑は埋め戻されていた。

この精巧な木製の暗渠はおそらく用水に使用されたものであろう。ただ単に農業用水路ならば、このような木製の装置

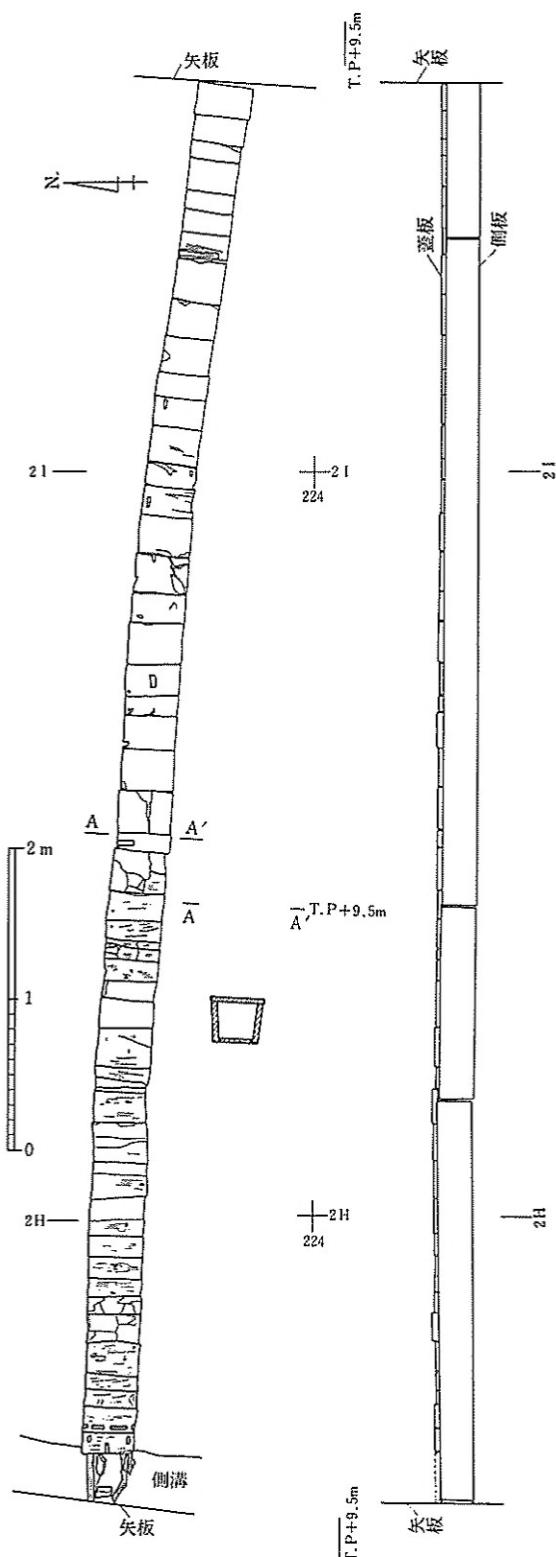


fig. 3 近現代遺構面 S X 0001, 平面図及び側面図 (1/50)

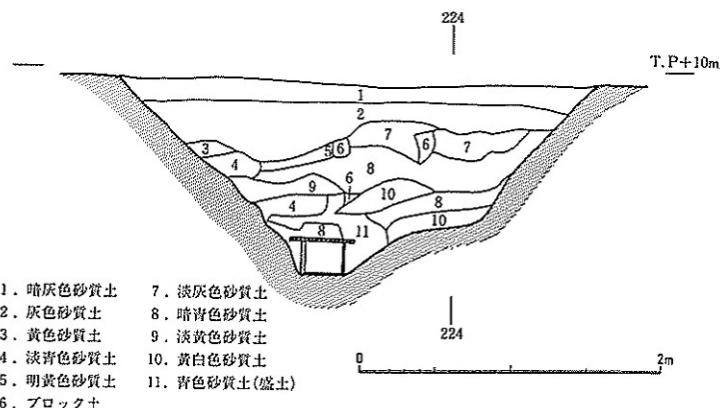


fig. 4 近・現代遺構面 S X0001東壁断面図 (1/50)

は必要ではなく、素掘りのもので充分であろう。外部に触れられない特別な液体が運ばれたのではないだろうか。下水か用水か明確ではないが……。

B. 池

S G0001 №.207～211付近に位置する。長辺約20m、短辺5m以上、深さ約1.5mを測る。

埋土は、灰褐色土系であり、木くずや瓦等が出土した。

また、現代のガラス瓶と思われるものも出土している。現代になって埋めたてられたものであろう。

C. 井 戸

S E0001 №.236付近で検出された。掘り方の規模は長辺2.4m、短辺1.8mの長方形である。

井筒は径約0.7mの桶をすえたものであり、又井筒内から平瓦が多量に出土した。これは井筒の上段に積まれていたものであろう。

S E0002 2 F 238に位置する。掘り方の規模は上径3.0m、深さ2.5mを測る。井筒の直径は0.8mを測り、S E0001と同様、多量の平瓦が井筒内に転落していた。

出土した平瓦からS E0001と同様な時期と考えられる。その時期としては、明治時代頃と考えられる。

D. 小 結

本遺構面は主に水田遺構からなり、ほぼ調査区全域が江戸時代以降、農耕地であったことがわかる。明確なあぜ等は検出していないが、水田域に伴う井戸は灌漑用と考えられる。

また、木製の暗渠は他に例を見ない珍しいものであるが、かなり大規模なものになるであろう。これから検出例を待ちたい。

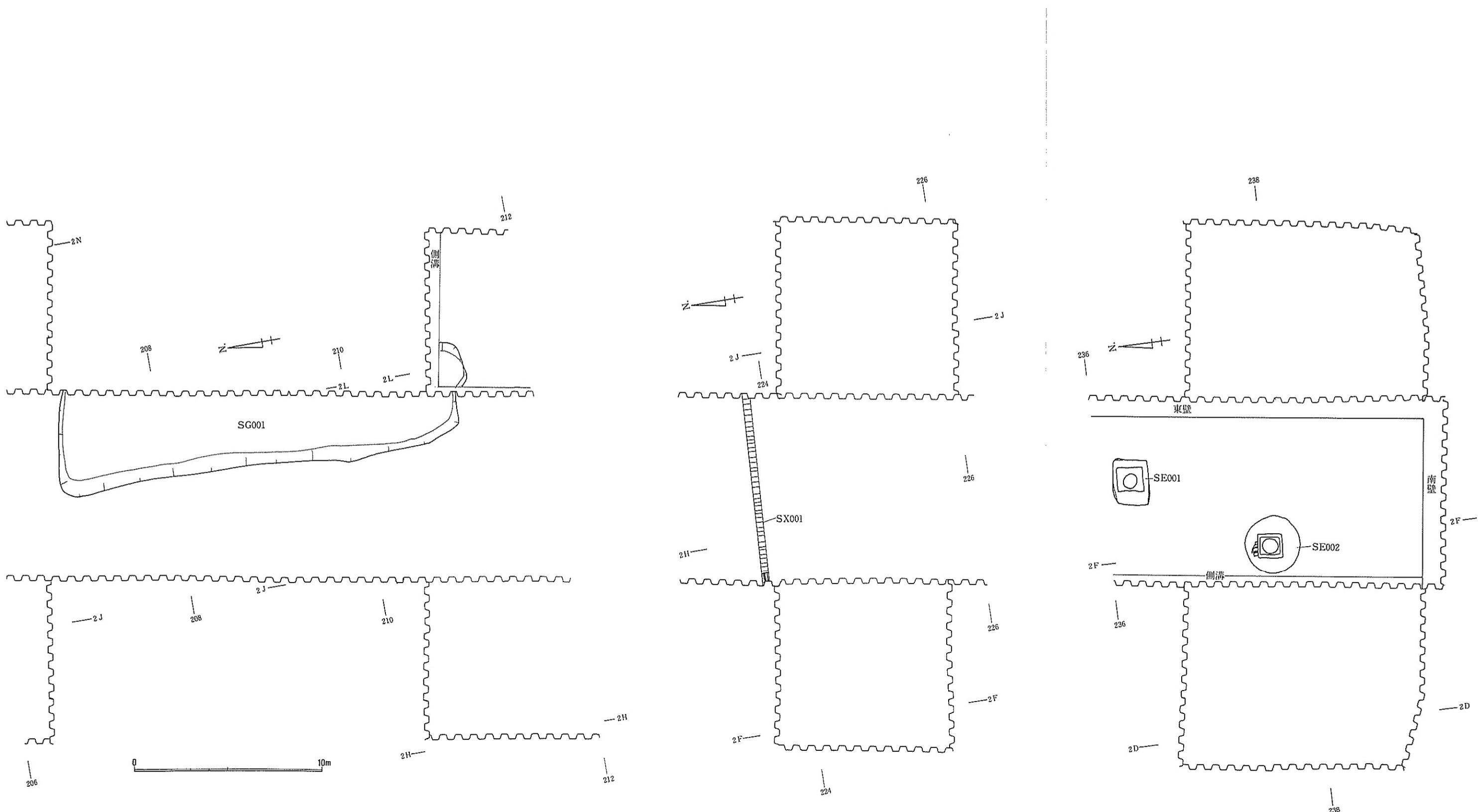


fig. 5 近・現代の主要遺構 (1/200)

第3節 中世遺構面 I

第2層（灰色・黄色系粘土）上面を遺構面とする。No.196～207にかけて存在する遺構面であり、トレント南半には存在しない。T.P.+8.8～9.1mの高さを測る。あぜ・水路・足跡群など、主に水田に関連した遺構が検出される。時期は室町時代を中心とするが、その前後の遺構も含む。

A. あぜと溝

本遺構面で検出される溝は、全て、あぜと関連して造営されたものであろう。

S D0201・S X0201

どちらもトレントに直交する形で、No.201付近で検出された。東側の一部は、中環の水路によって削られている。S D0201は幅0.8m、長10m以上、深さ0.2mで断面U字形を呈する。埋土は砂層が混った青灰色系粘土である。S X0201は幅0.7m、長10m以上、高さ0.1mのあぜである。

S D0203

トレントに直交する形で、No.205～206で検出された。幅約4.0m、長28m以上、深さ約0.4mでゆるやかな断面U字形を呈する。埋土は微砂まじりの青灰色系粘土である。

本溝の北と南には、濃密な足跡群が検出されている。

S X0209 2 I 211で検出された。S D0206と直交する形である。幅は上面で0.3m、下面で0.6m、長2.5m以上、高さ0.1mのあぜである。

S D0206 No.212付近で検出された。幅0.4m、長25m以上、深さ0.2mで断面U字形を呈する。S D0203と平行している。埋土は微砂まじりの青灰色系粘土である。本溝の北と南には、濃密な足跡群が検出されている。

S X0210 2 L 213で検出された。S D0206と平行している。幅は上面で0.2m、下面で0.6m、長9.5m、高さ約0.15mのあぜである。

B. 足跡群

本遺構面では、水田面に伴うものとして何ヶ所かで足跡群が検出されている。かなり良好に痕跡を残す足跡群としてS X0202をとりあげてみたい。

S X0202 No.201～203付近で検出された。東西10m以上、南北8.5mの範囲に人間や牛等の足跡が残されていた。足跡が検出される面は緑灰色の粘質土で、その高さは、T.P.+8.8m前後を測る。足跡は粘土面に刻まれて、その上部が細砂でおおわれて残ったものである。

足跡の歩行方向はあぜと平行する形ではば東西に伸びている。西から東へ延びる足跡群が4ヶ所、東から西へ延びる足跡が1ヶ所見られる。東側の一部は中央環状線の水路によって削られている。足跡面の埋砂から若干の遺物が出土している。瓦質の土釜が出土していることから、15世紀前半頃の水田面と考えられよう。

第4節 中世遺構面II

第5（青灰色粘土）第6（緑灰色粘土）層上面を遺構面とする。T.P.+8.2~8.8mを測る。南端部30mはやや低いが、他はほぼ平坦である。あぜ・溝・足跡群・堤など、主に水田に関係した遺構が検出される。時期は鎌倉時代を中心とするが、その前後の遺構も含んでいる。

A. 水田 (fig.10~14)

Dトレンチのほぼ全域で検出された。水田面は旧東除川の氾濫による土砂によって覆われている。水田面を覆う土砂は厚いところで約1.5m、薄いところで約0.3m堆積している。

水田耕土は青灰色粘土・緑灰色粘土である。

畦畔は幅2m、高さ0.2m以上の堤状のものと、幅1m、高さ0.2m以下の小畦畔に分かれる。小畦畔の方向については東西方向と南北方向に大別される。

東西方向の小畦畔は計14条検出した。南北方向の小畦畔は計13条検出した。また、堤については1条検出した。

S X 0301~S X 0303、S X 0305、S X 0307、S X 0309、S X 0313、S X 0315、S X 0318 東西方向の小畦畔である。

No.196から、No.212付近で検出された。小畦畔間の間隔は約10.5~11.5mと揃っている。また幅0.5~0.6m、高さ0.1~0.2mを測る。最もよく遺存していたS X 0302、S X 0303では、長28m以上に及ぶ一直線の畦畔がみられる。畦畔の上には足跡等も遺存していた。

S X 0304、S X 0306、0308、0310 南北方向の小畦畔である。

No.198からNo.207にかけて検出された。小畦畔間の間隔についてはS X 0306とS X 0304間では約15.5mになる。幅0.5~0.6m、高さ0.1~0.2mである。

S X 0333、0339、0342、0344、0346、0351 東西方向の小畦畔である。

No.229からNo.239にかけて検出された。小畦畔間の間隔は約10.5~11.5mと揃っている。また幅0.6~0.7m、高さ0.1~0.2mである。畦畔の上には足跡群も遺存していた。

S X 0334、0335、0338、0343、0345、0349、0350、0352 南北方向の小畦畔である。

No.229からNo.239にかけて検出された。

S A 0301 東西方向の堤である。No.224付近で検出された。幅下面で2.1m、上面で1.5m、長11m、高さ0.3mを測る。青灰色粘土の盛土である。S A 0301は2J付近でS X 0329になり小畦畔に変化する。

溝

S D 0302 No.212付近で検出された。幅1.1m、深さ0.3mの東西に伸びる溝である。畦畔S X 0318に関連するものであろう。S D 0301に続く可能性が強い。

S D 0308 No.229付近で検出された。幅2.2m、長10m以上、深さ0.3m東西に伸びる溝である。

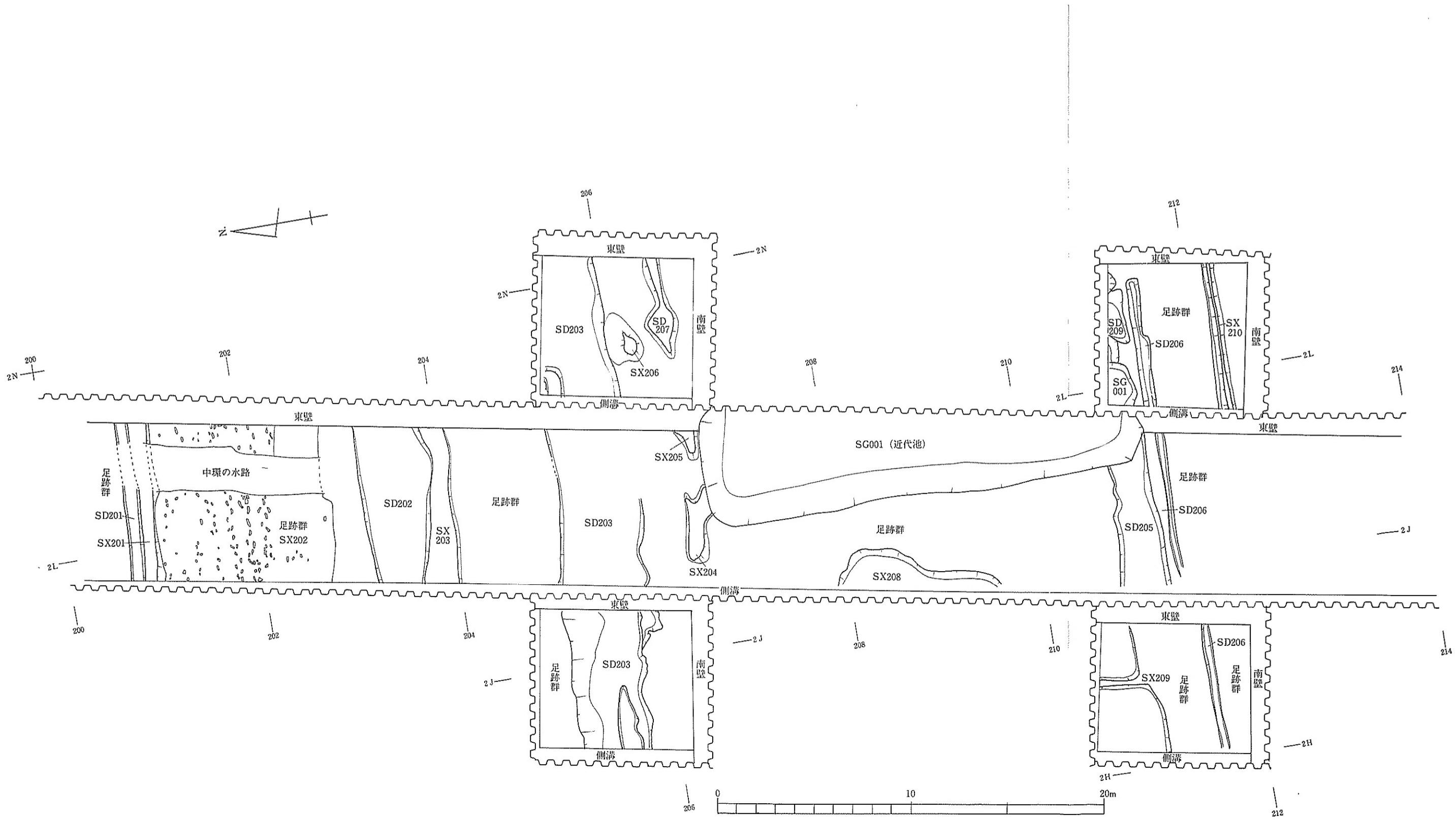


fig. 6 中世水田面 I (1/200)



fig. 7 中世水田面 I S X0202足跡群 (矢印は歩行方向) S = 1/50

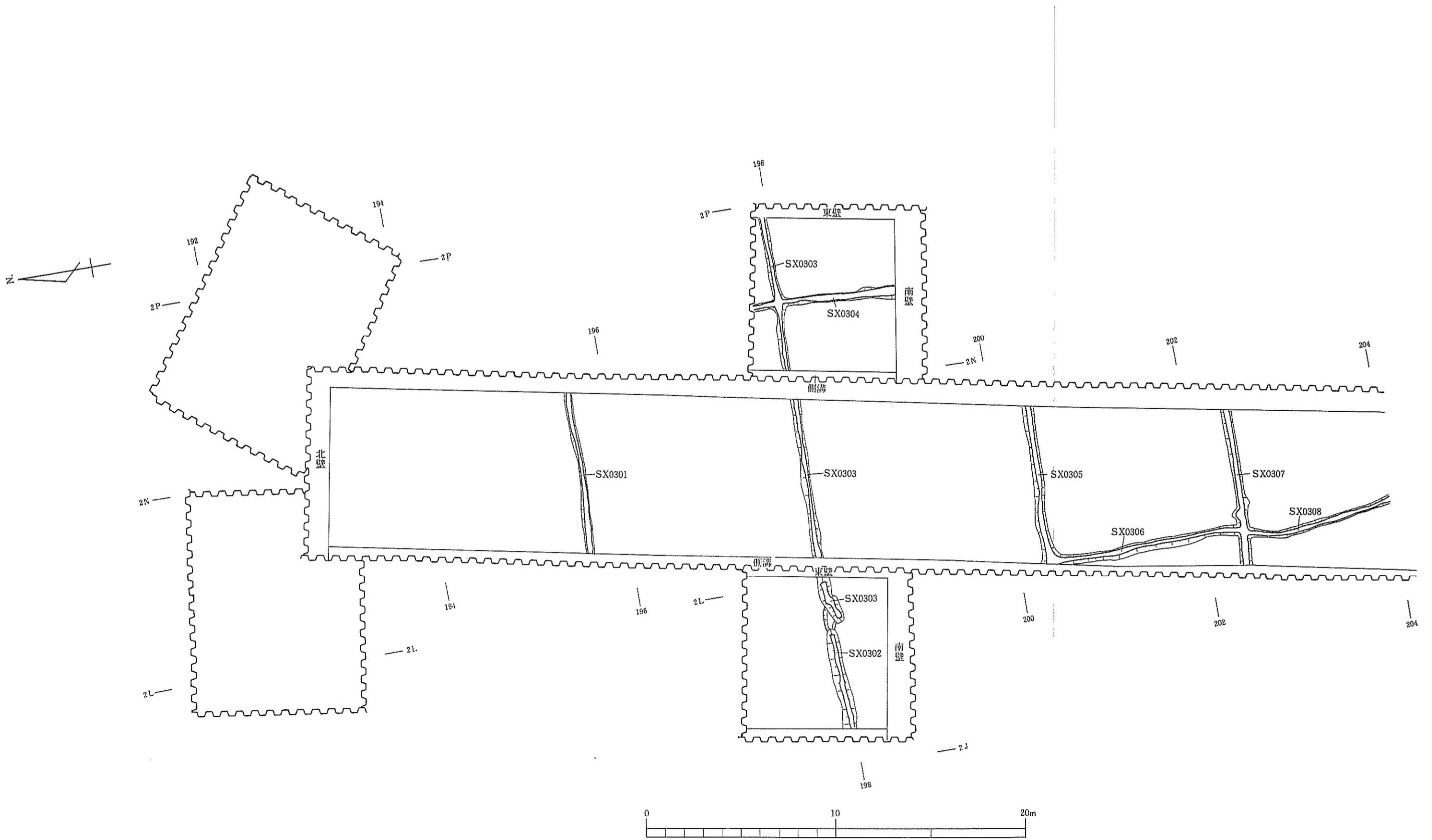


fig. 8 中世水田面II① (1/200)

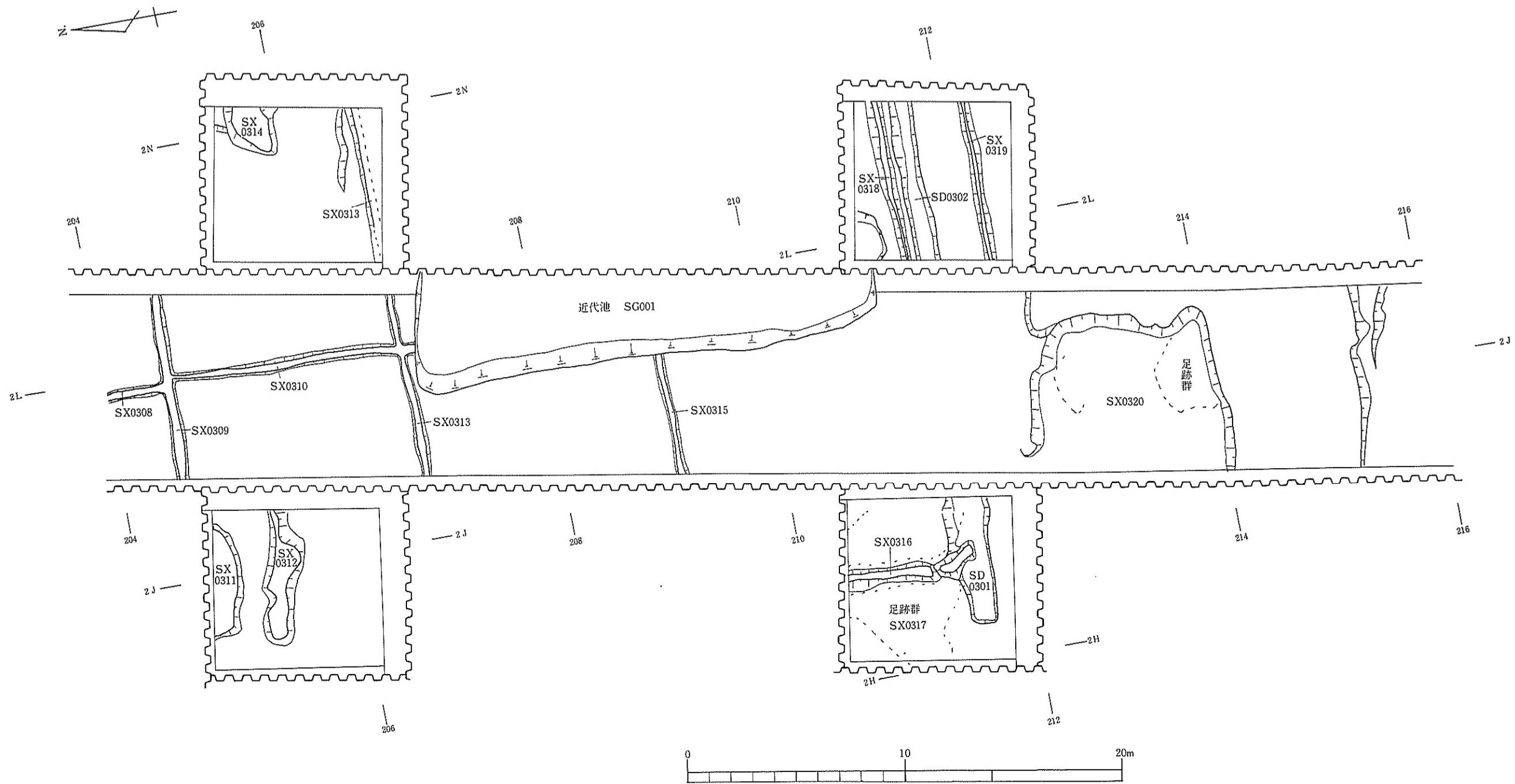


fig. 9 中世水田面II② (1/200)

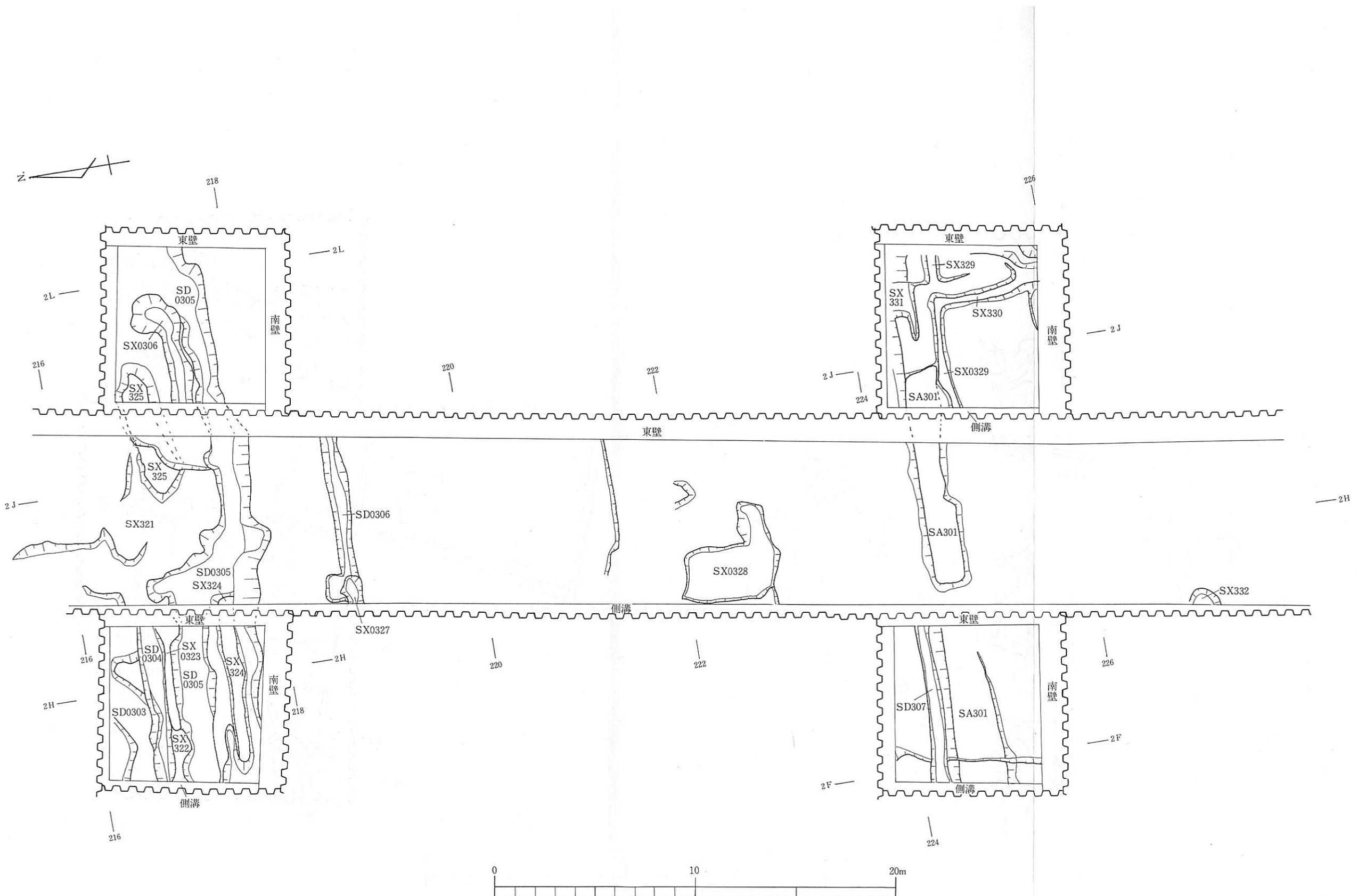


fig.10 中世水田面II③ (1/200)

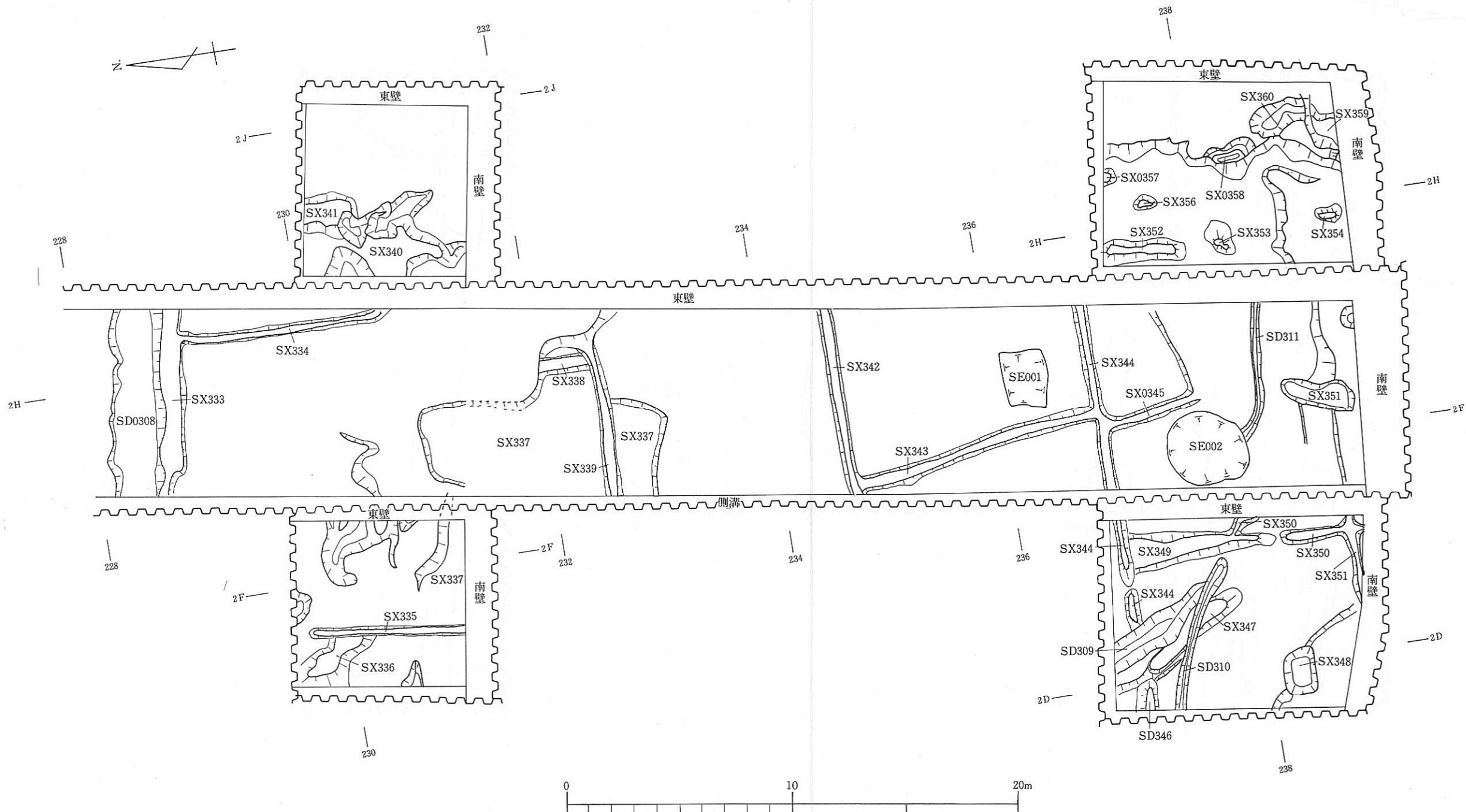
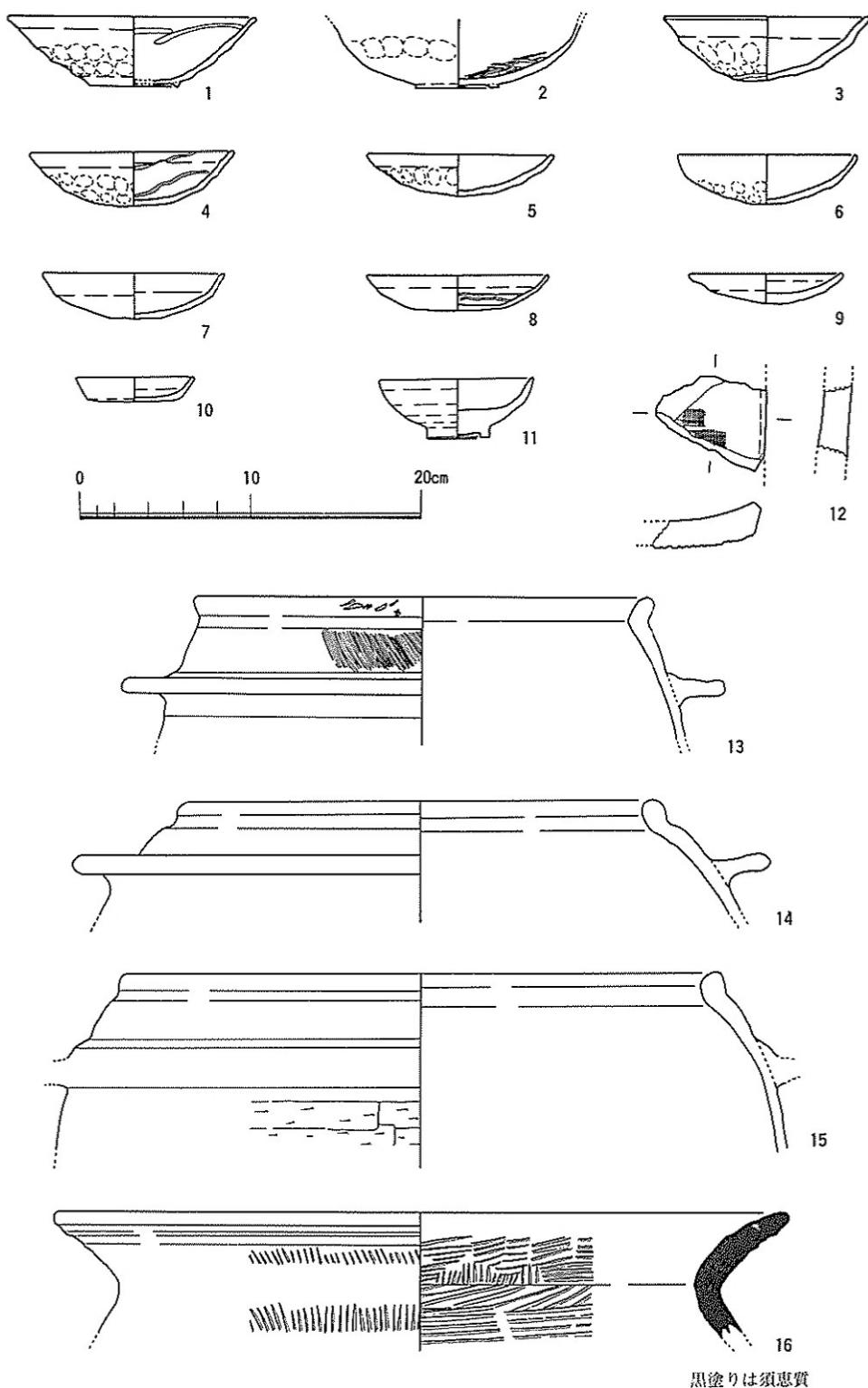


fig.11 中世水田面II④ (1/200)



黒塗りは須恵質

fig.12 中世遺構面II、旧東除川埋砂内出土土器 S=1/4

畦畔S X0333と平行して北側に掘られている。埋土は微砂まじりの青灰色粘土である。

足跡群

S X0317 2 I 211付近にみられる。南北畦畔S X0316の両側にみられる。その範囲は7×7mに見られる。足跡は不規則で青灰色粘土面に灰白色微砂が埋まっていた。

S X0320 No.212～214付近で検出された。8m×7mの方形の落ち込みに足跡が見られた。

足跡は不規則でS X0317と同様の埋砂であった。

B. 出土遺物 (fig.12)

遺構面を覆って堆積する3・4層からは土器や木くづが出土している。

瓦器1～9、土師器10、陶器11、瓦12、土師質土釜13～15、須恵器甕16である。

瓦器碗1は断面三角形の高台をつけ、口縁部は外上方にのびる。瓦器碗2は断面台形の高台をつける。内面は斜格子状の箝磨きが施されている。瓦器碗3は粘土をはりつけた程度の高台を有するものであり、暗文はみられない。瓦器碗4～7は法量も技法もよく似ている。8は底部がやや平坦である。11は黄緑色の釉薬がついた陶器である。瓦12は布目痕が付く平瓦である。

土師質土釜13は口縁部が「く」の字状に外反するもので、外面には斜め方向のハケ目を施している。鍔部下方外面には煤が付着している。橙色を呈し、胎土に小石粒を含む。

土師質土釜14・15は口縁端部をわずかにつまみ出して端部を丸くおさめる。体部外面は箝削り調整、内面はナデが施されている。橙色を呈し茶色砂粒を多く含む。

須恵器甕16は「く」の字状に外反し、端部に丸みをおびる。外面は縦方向の平行タタキ。内面は縦方向の平行タタキ及び横方向の平行タタキを施す。青灰色を呈し白色粒を含む。

C. 小 結

本遺構面からは畦畔と溝を兼ね備えた水田遺構が検出された。大規模な水田遺構の一部にあたると考えられるが、その畦畔の方向は条里制地割に規制されたものであろう。小畦畔の南北の間隔は10.5～11.5mと揃っており、東西の間隔は約15.5mであり、縦長の長方形のものであろう。いわゆる長地型の水田区画であろう。

水田は耕土と考えられる青灰色粘土内からはほとんど遺物が出土していない。

水田の時期については水田面を覆っていた灰白色系砂出土の遺物が参考になる。

瓦器や土師質土釜の形態から考えると、13～14世紀頃のものが多い。あまり新しい遺物は入っていないので、水田面もその時期の所産のものと考えたい。

第5節 古代末～中世遺構面

第7層（暗青灰色粘土）上面を遺構面とする。T.P.+7.9m前後を測る。

No.218～225付近で河川N R0401が検出された。本遺構面は水田に關係したあぜや溝・足跡群等は検出されていないが、土層の状況から考えると水田面に近い。

時期は平安末～鎌倉時代を中心としている。

A. 河川N R0401 (fig.13～15)

2 H216から2 K226にかけて、ほぼ南北に約50m以上検出された。流路方向は河川底面のレベルから考えて、南東から北西に向かって流れていたものと考えられる。河川の規模は長50m以上、幅上面約7～8m、下面で約1～2m、深さ約1.2m以上をはかる。2 J221付近では河川に直交する形で堰が検出された。河川は堰を境にして、北部では西へ、南部では東へ蛇行している。

堰 N R0401に直交する形で検出された。流路内の堰直上では厚さ0.7～0.8mの砂質土が堆積していた。堰の構造については河流によりかなり乱されており、復原するのは難しいが、概略は以下のようなものであろう。

断面U字形になった河床面（黒灰色砂質土ベース）に0.5～0.6m間隔で斜めに木杭を打ち込む。検出された木杭は計8本であったが、それらは3.4mの範囲内で打設されたものであった。杭は直径5～10cm程度で、長いものは長1.4mを越えるものも見られる。

斜めに打ち込んだ杭の打設面はT.P.+7.0m前後で、打設された木杭は深いものでT.P.+6.1mをはかる。約1mにわたって杭の打ち込みがなされている。

杭を斜めに打設した河底面の1.8m×3.5mの範囲に、厚2～3cmの蓆を敷く。蓆にはシルトや粘土等をかぶせ、竹を束ねたものを杭列と直角にして席に通している。この蓆は前後に木杭を打ち込んで固定し、竹や小枝等によって補強したものである。

杭の打ち込み角は杭No.3によれば、約40度をはかる。

堰は流路に対して全くの直角の位置ではない。堰自体がやや東へはっている。南から流れてきた水流は堰にぶつかり、西南へ逃がされる。堰の南方はかなりの微砂が堆積しており、水流の激しかったことが考えられよう。堰の性格としては河川内の水流を調整するために構築されたものと考えられる。堰の構築時期については河川内の微砂や堰直上の覆土内から、若干の遺物が出土しているのでそれが参考になる。

堰とは別にN R0401西岸の2 J225付近で、土師質小皿の集積がみられた。肩部に直接置かれたもので計15～16枚を数える。径1mの範囲内にまとまって置かれたもので一時期の所産と考えられる。土師質小皿の検出面の高さはT.P.+7.55m～T.P.+7.4mである。

土師質小皿に完形品が多いことやあまり使用していないことから考えると、川の祭祀に関連したものかもしれない。

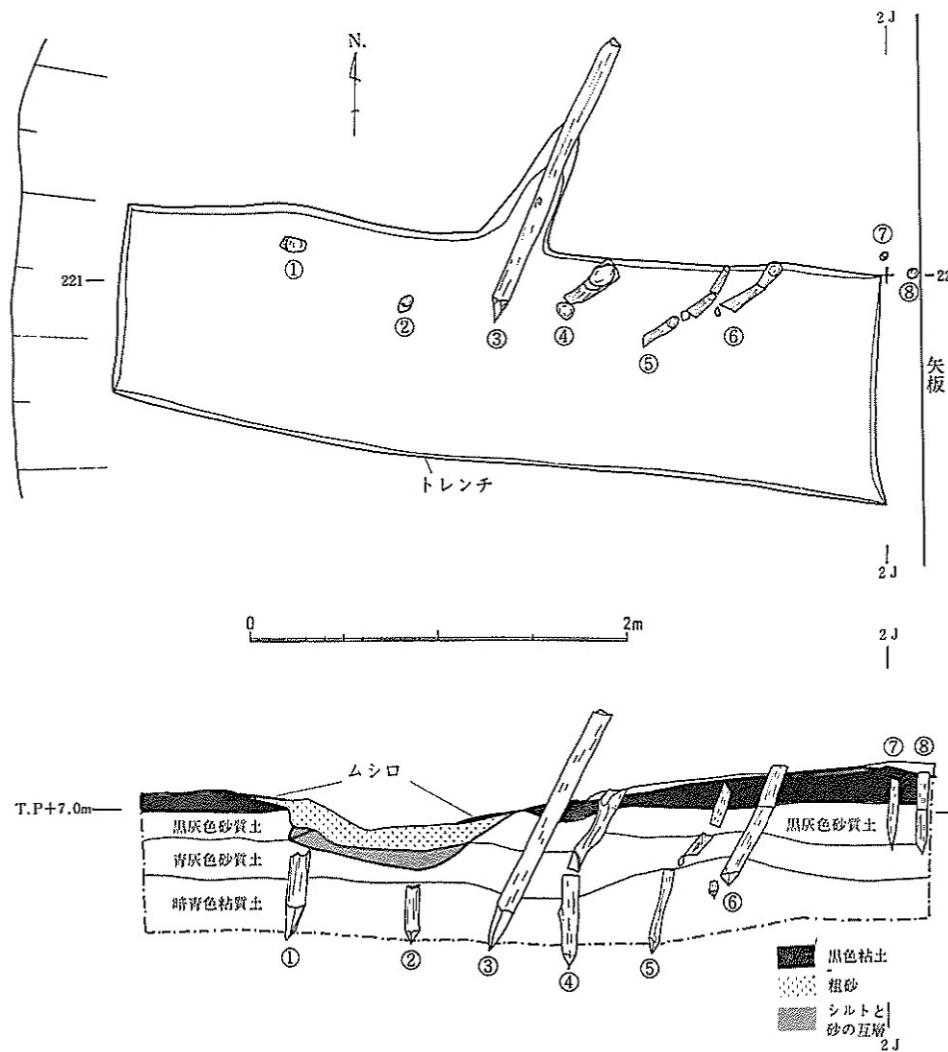


fig.13 古代末～中世遺構面N R0401 堀内杭列平面図及び北側断面図 (1/40)

B. 出土遺物 (fig.17)

N R0401内の微砂やシルト層から土器や木杭等が出土している。

1～20は土師質小皿、21～27は瓦器椀、28は青磁である。

1～16は2 J 225付近で一括出土したものである。土師質小皿は、概ね同一技法で、法量も一定である。口縁部内外面は横ナデ。底部外面はヘラ切り後ナデ。胎土は約1mm以下の金雲母の砂粒を多く含んでいる。色調は浅黄色のものが多い。

21～27は青灰色砂質土や灰色シルトから出土した瓦器椀である。

21、22、24、26は高台の断面が三角形を呈している。21は内外面とも不定方向のヘラミガキ外面には指頭痕がみられる。内面には下方にハケ目が見られる。

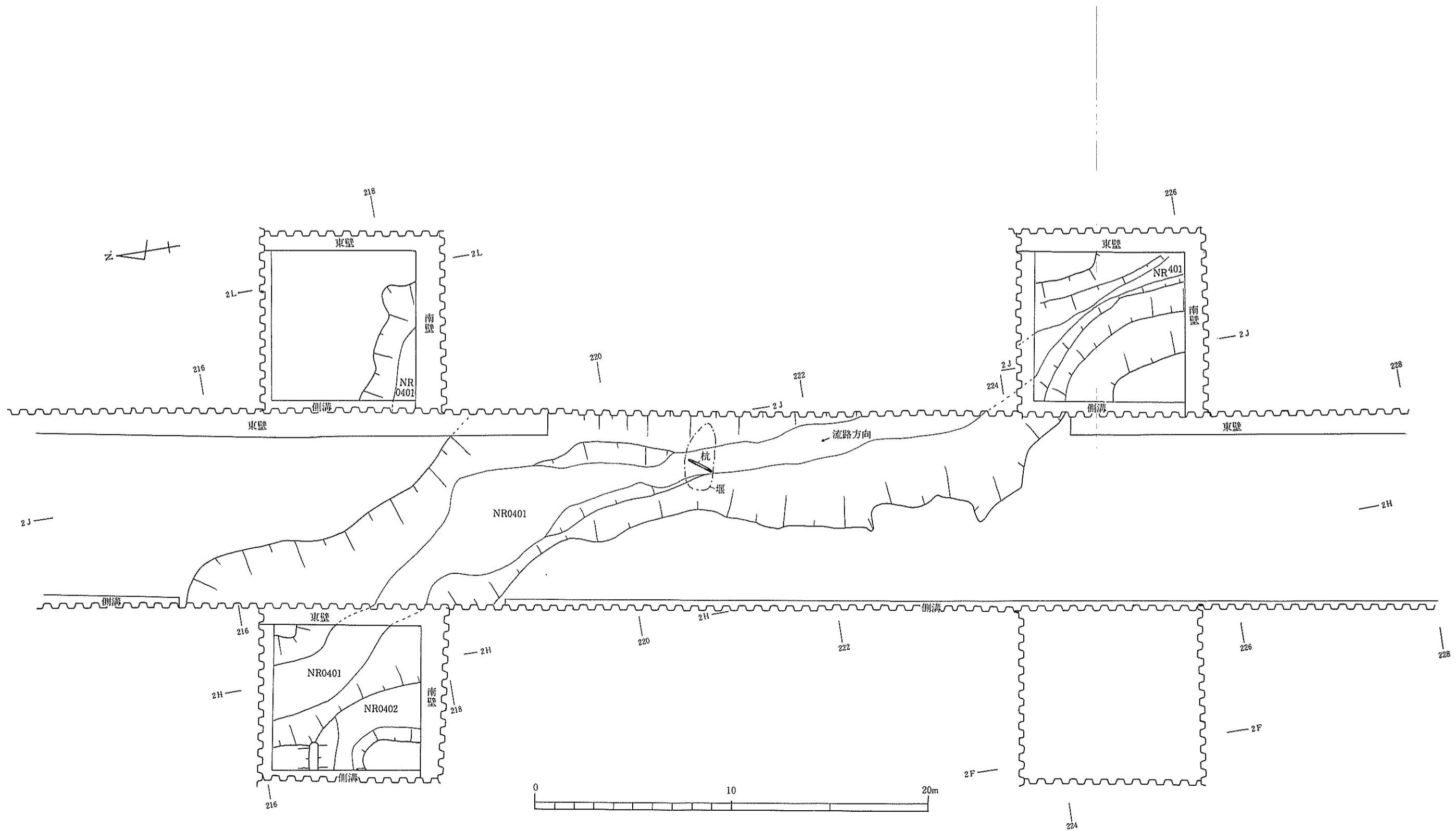


fig.14 古代末～中世遺構面 (1/200)

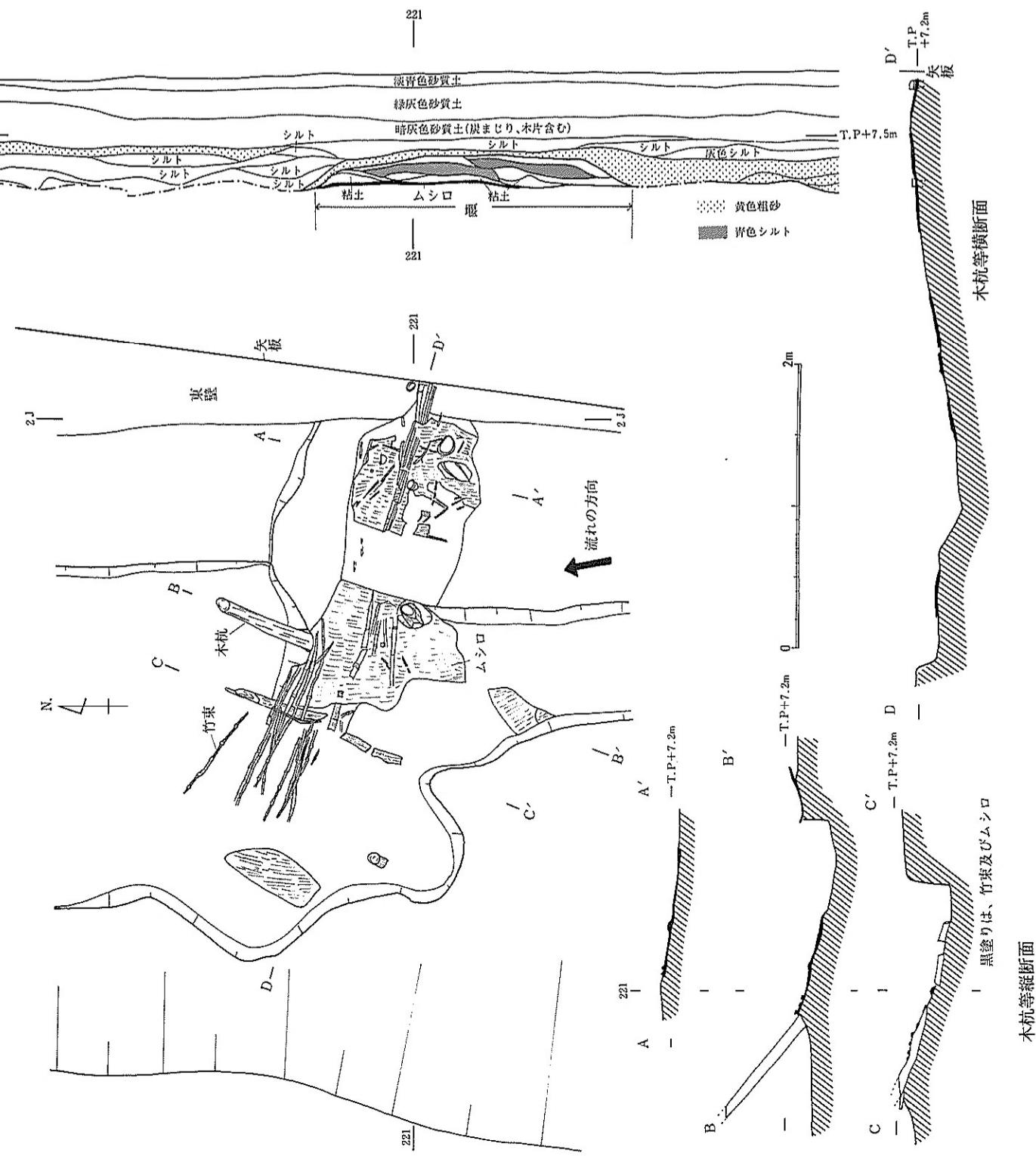


fig.15 古代末～中世遺構面 N R0401壙平面図及び断面図 (1/40)



fig.16 古代末～中世遺構面 N R0401土師器小皿出土状況平面図及び断面図 (1/20)

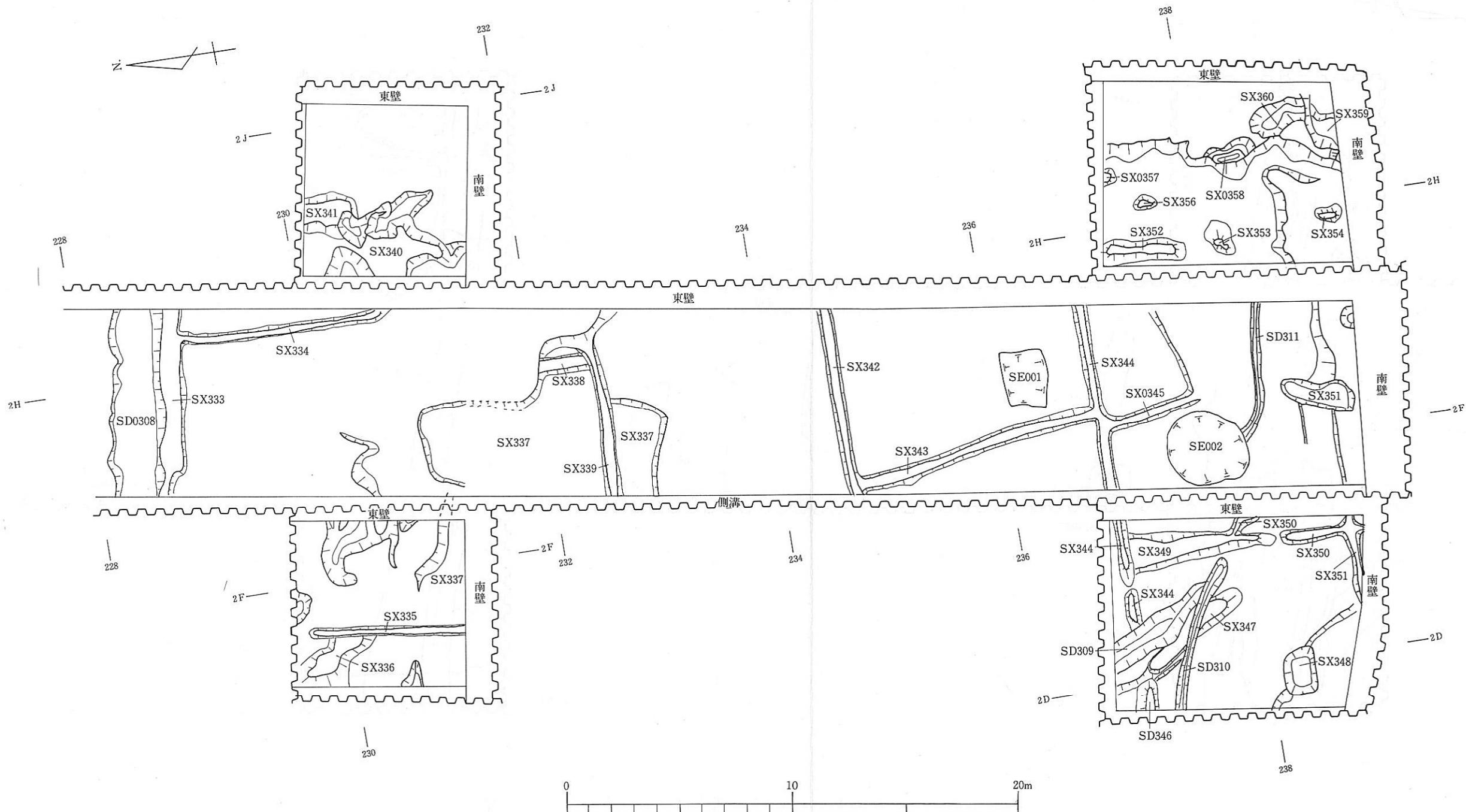


fig.11 中世水田面II④ (1/200)

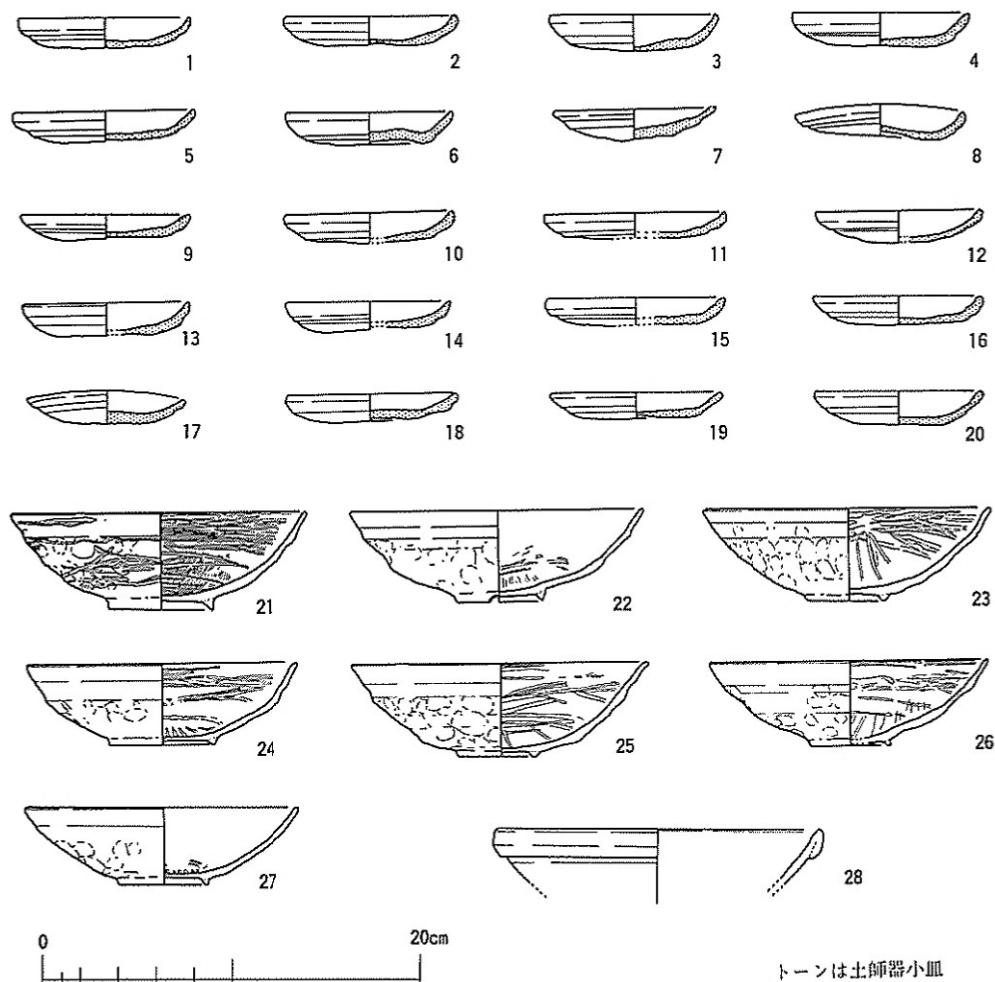


fig.17 古代末～中世遺構面N R0401出土遺物 S=1/4

22の高台には1.2cmの半円形の透しがみられる。24は内面に横方向の暗文があり、外面には指頭痕がみられる。26も同様の技法による。

23、25、27は断面逆台形の高台をつける。23は内面は横方向のヘラミガキ、外面は指頭痕。25、27も同様の技法による。

28は青磁の口縁部の破片である。口縁部は内外面ともナデ。体部外面はヘラケズリがみられる。

C. 小 結

本遺構面はトレーニチ全域に遺構はみられなかったが、No.218～225付近で河川N R0401を検出した。河川には直交する形で堰が設られており、河川内の水流を調整するために構築されたものと

考えられる。類似した堰構造は佐堂遺跡^(註)でも検出されている。このような堰の構築は取水に使用されたものであろう。本遺構面では水田に伴う畦畔や溝等が検出されていないが、水田に伴う遺構面と考えたい。

河川の存続期間、堰の構築時期については砂層やシルト層から土器が出土しているのでそれが参考になる。瓦器や土師質小皿の年代については時間的隔たりがあまりみられない。ゆえに短期間のうちに流れて埋まったものと考えられよう。出土遺物の年代については13世紀前葉頃と考えて大過ないであろう。

(註) 阪田育功他『佐堂(その2) I』

第6節 奈良～平安時代遺構面

第8層（暗緑灰色粘土）上面を遺構面とする。T.P.+7.6m前後を測る。

No.210付近で東西に伸びる溝 S D0501, 2 H218で井戸 S E0501, No.218～220付近で東西に伸びる溝 S D0502を検出した。本遺構面は水田に關係したあぜ等や足跡群等は検出されないが、土層の状況から考えると水田面に近い。

時期は奈良時代を中心としたものである。

A. 溝 (fig.18, 19, 21)

S D0501 No.210で東西に走る溝である。幅2.2～3.1m、長8.5m以上、深さ0.4mをはかり、断面はU字形を呈する。埋土内から若干の土師器片を検出している。

S D0502 No.217～220にかけてほぼ東西に走る溝を検出した。規模については幅上端で11m以上、幅下端で5～7m、長18m以上、深さ0.6～0.8mをはかる。溝の上端はT.P.+7.6m前後、溝の下端はT.P.+6.8m前後をはかる。溝の埋土は緑灰色砂質シルト（微砂まじり）と暗青色粘質土（貝層まじり）の互層になっている。最下層の灰白色微砂層から、土師器皿・須恵器平瓶・高台付杯の土器類や木杭・馬骨等が出土している。馬骨が出土したところは2 K219付近であり、頭蓋・肋骨・仙骨・脛骨・橈骨等がまとまって出土した。これらは溝のはば中央に置かれたもので、頭蓋等はほぼ水平に置かれていた。溝の傾斜は東が高く西が低くなっており、水が東から西へゆるやかに流れているのがわかる。2 L218付近でも完形の土師器堵が出土している。S D0502は2 J 220付近で南北に流れる河川N R0401に南岸を切られているので、肩部からの全体的な規模は明確でないが、復元すれば幅14～15m、長20m以上の大規模な溝になるであろう。何らかの区画を意図したものと考えられる。この溝についてはかつて大阪文化財センターが実施した『特殊マンホールNo.3建設工事に伴う城山遺跡の発掘調査』^(註)の長方形コンクリート連続壁の内側153m²の調査区内で検出された貝層に続くものと考えられる。この貝層は厚さ約1mに近い堆積を示す灰色シルト層を除去してゆく過程で検出されたもので、幅1～3mの帶状範囲にタニシ、カワニナ等の淡水性貝類が集中分布しておりほぼ東西方向にのびている。貝層の厚みは中央部で0.2～0.3mを測り、貝層中からはS D0502と同時期の奈良時代の土師器・須恵器の破片や漆塗木製皿等が出土しているという。この貝層がS D0502に続くものとすれば、東西に長約40mにもなる。

このような溝の中央に馬一頭分に近い馬骨や完形に近い土器が出土するのは、単なる廃棄したものとは考えられない。何らかの祭祀の痕跡かもしれない。馬骨については後章で詳しく論じられることであろう。

(註) 酒井龍一「第X章第2節 特殊マンホールNo.3建設工事に伴う城山遺跡の発掘調査」『亀井・城山』
財団法人 大阪文化財センター 昭和55年

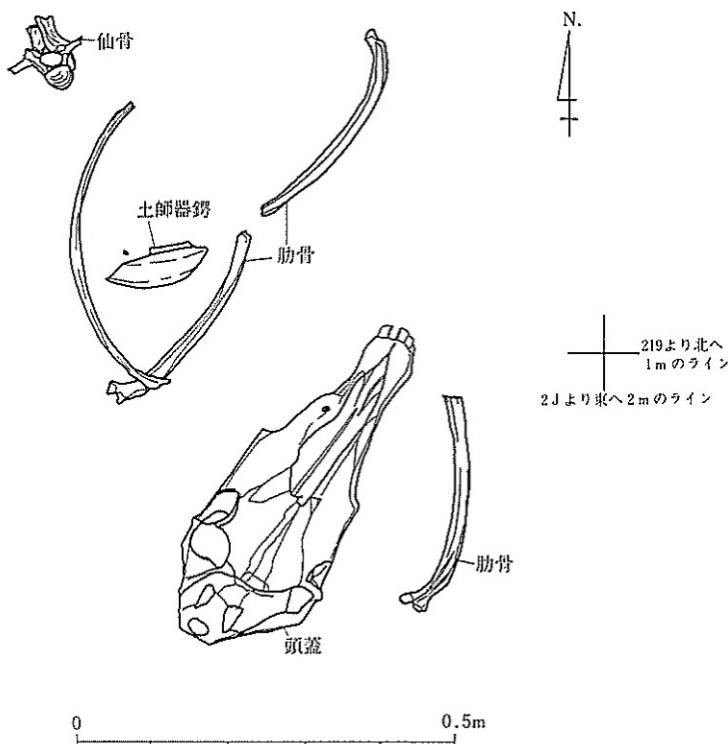


fig.18 奈良～平安時代遺構面S D0502馬骨等出土状況平面図（1/10）

B. 出土遺物 (fig.22, 23)

S D0502内の砂質シルトと暗青色粘質土（貝層まじり）から、土器や木くづ、馬骨等が出土している。馬骨の詳細については後章で述べられることになっている。

1～7は土師器皿、11～14は土師器壺、17～24は土師器鐔甕である。

1の土師器皿の口縁部内面には左下りの斜行の暗文があり、底部内面にはラセン状の暗文がみられる。底部外面には荒いヘラケズリが施されている。

2～7は概ね同一技法で法量も等しい。口縁部内外面は横ナデ。底部外面は荒い不定方向のナデ。11～14は小形の丸底壺である。11は口縁部内外面が横ナデ。体部外面はナデ及び指オサエの痕跡がみられる。

15は須恵器の高台付杯である。口縁部内外面は回転ナデ。

16は須恵器の平瓶である。口縁部外面中央に一条の沈線がみられる。

17は、口縁部内外面は横ナデ後、タテハケを施す。その後、鐔との接合部に横ナデを施す。内面はハケ後指オサエがみられる。鐔部下方内外面に炭化物が付着している。鐔甕については、ほとんど炭化物が付着している。

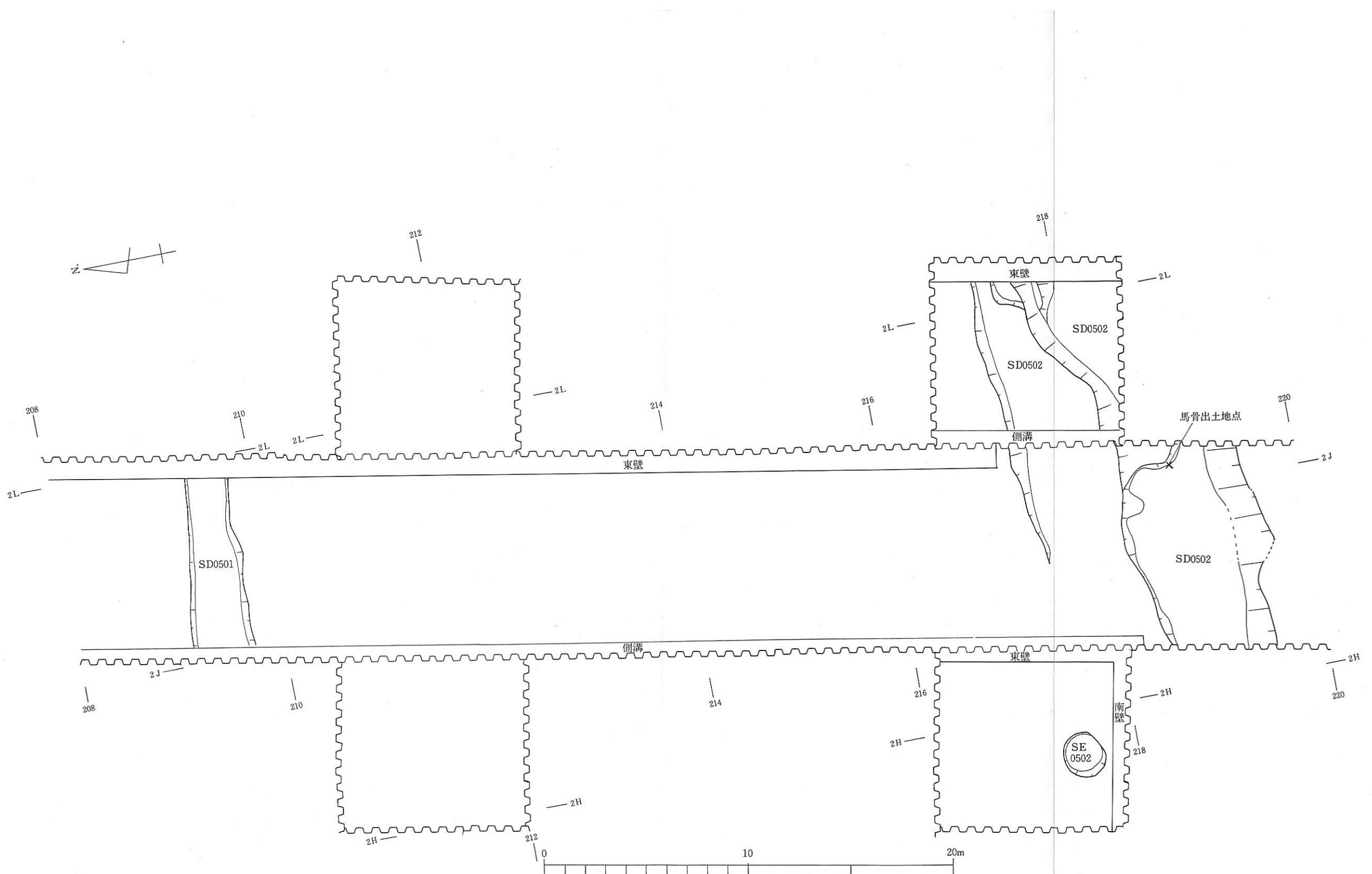


fig.19 奈良～平安時代遺構面 (1/200)

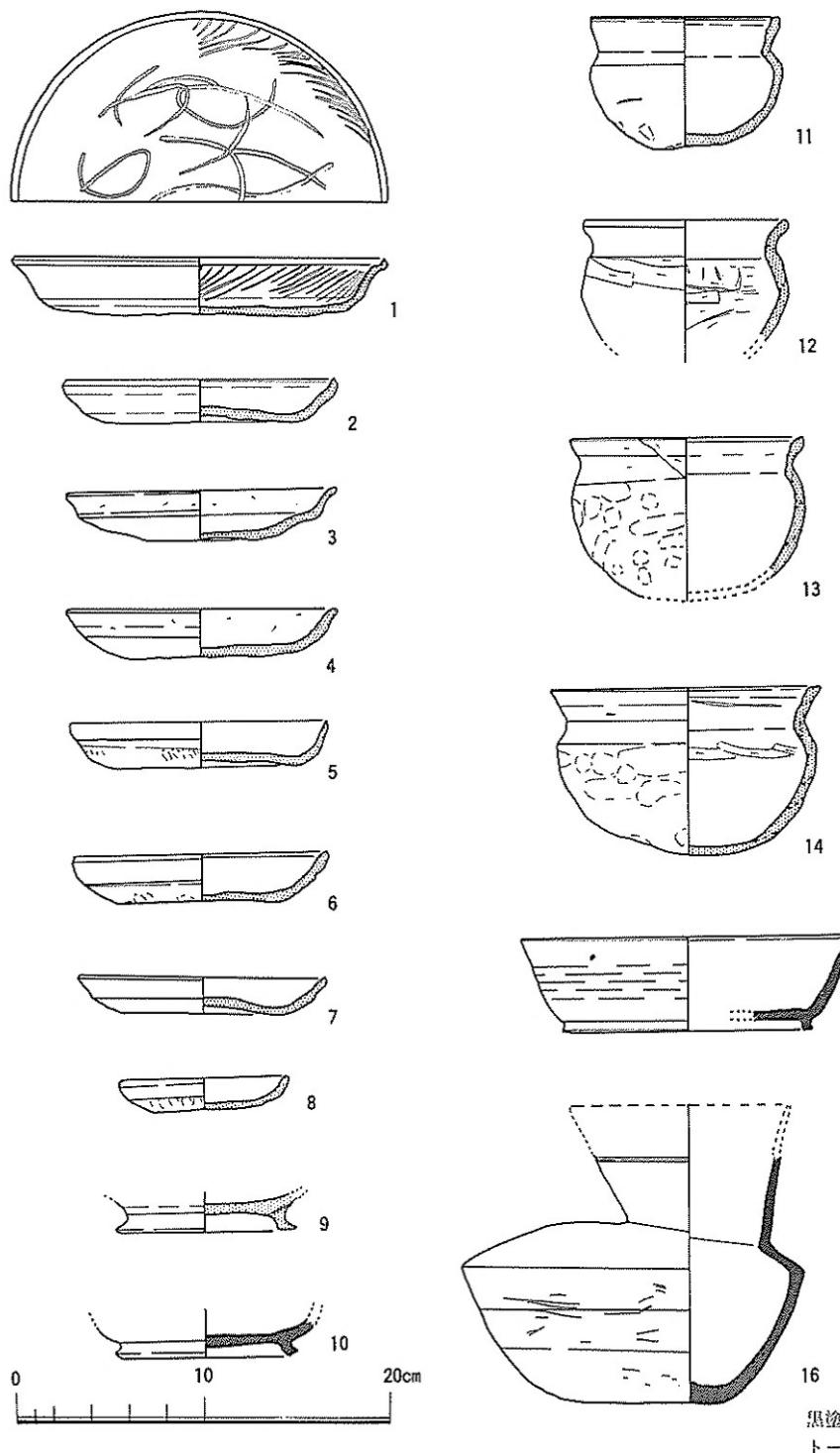
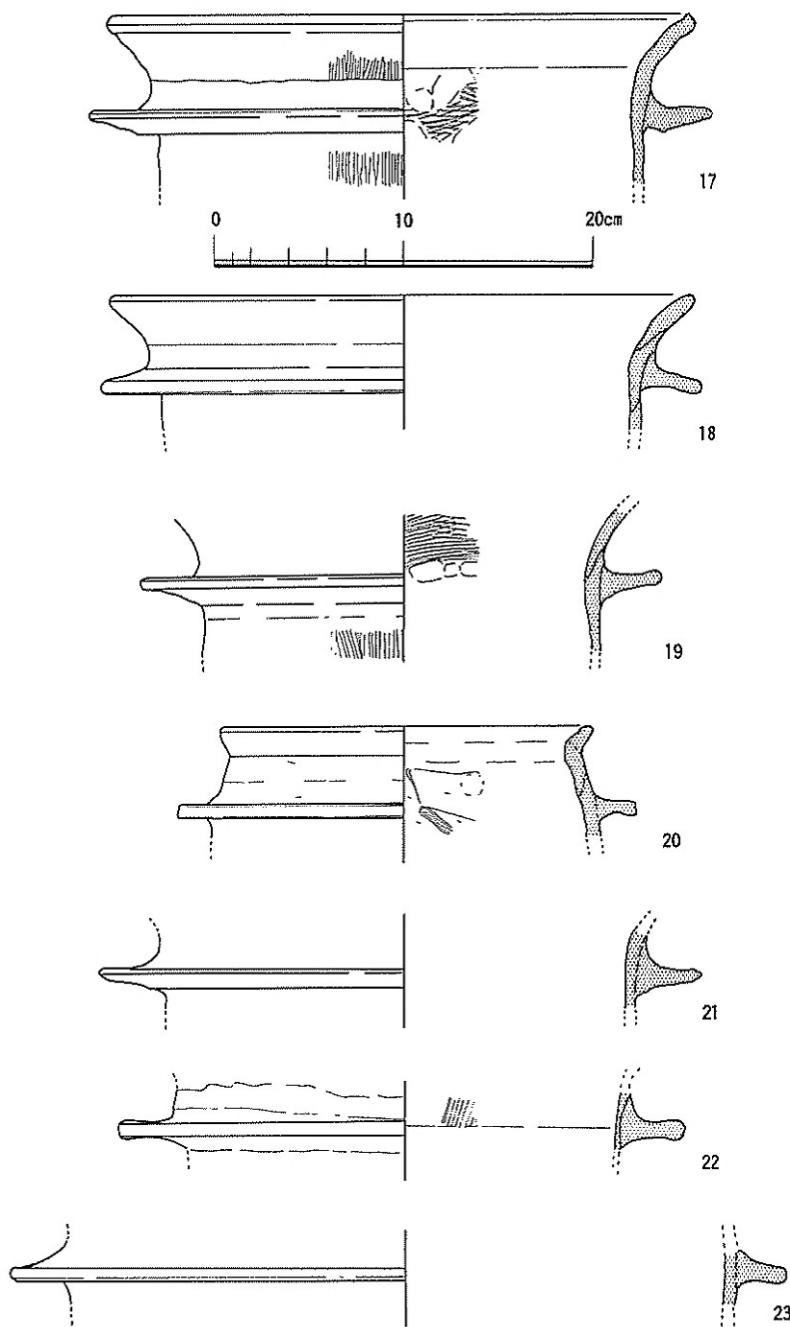


fig.20 奈良～平安時代遺構面S D0502出土遺物① S=1/4



トーンは土師器

fig.21 奈良～平安時代遺構面 S D0502出土遺物② S = 1/4

C. 小 結

本遺構面はトレンチ全域に遺構はみられなかつたが、No.217～220付近で東西に走る溝S D0502を検出した。南北流する中世河川N R0401に中央部を削られている。溝内からは馬一頭分に近い馬骨や完形に近い土器群等が出土しており、水に関連した祭祀の痕跡かもしれない。

溝の存続時期については砂質シルトや粘質土から、土器が出土しているのでそれが参考になる。

出土遺物の年代については8世紀中葉から9世紀にかけての時期と考えられる。

第7節 古墳時代遺構面

第9（青黒色粘土）第10（黒色粘土）層上面を遺構面とする。T.P.+6.9~7.3mを測る。北に行くに従って遺構面の高さは低くなる。検出した遺構面はあぜ・堤・溝・土坑・畝など、主に水田に関係したものが多い。時期については五世紀後半頃を中心とするが、さらに古い遺構も含まれる。

A. 水田 (fig.22~25)

明確な畦畔をもつ部分は限られるが、堤や畝などが多い。

水田面を覆う土砂は約0.1mの青黒色粘土が堆積している。

No.213からNo.218にかけて小区画の水田が検出された。あぜは幅0.6~0.7m、高0.1mの規模をはかる。東西方向の小畦畔は5条検出し、南北方向の小畦畔は4条検出した。

S X 0721, 0722, 0723, 0726 東西方向の小畦畔である。小畦畔間の間隔は3.3~4.2mと揃っている。幅0.9~1.2m、高0.05~0.1mである。あぜは青灰色粘土と黒灰色粘土の混ざった粘土で構築されている。

S X 0719, 0720, 0721, 0725 南北方向の小畦畔である。小畦畔間の間隔は約2.8mである。幅0.6~0.7m、高0.1mである。S X 0725の北側で水口が切られている。あぜは、青灰色粘土と黒灰色粘土の混ざった粘土である。

S X 0732, S X 0735 No.223からNo.226にかけて検出された。S X 0732は南北方向の小畦畔である。幅0.4~1.0m、高0.5m、長8.0m以上。S X 0735はS X 0732と直交する形で検出された。幅0.4~0.9m、高0.4m、長6.5mをはかる。あぜは暗灰色粘土と黒灰色粘土の混ざったものである。

S X 0739, S X 0740 No.230からNo.232にかけて検出された。S X 0739は南北方向の小畦畔である。あぜは幅0.4~0.8m、高0.2~0.3m、長7.5m以上。S X 0740は東西方向の小畦畔である。幅0.3~0.7m、高0.2m、長3.0mをはかる。あぜは青灰色粘土と黒灰色粘土の混ざったものである。

堤

S X 0701 No.198からNo.200にかけて検出された。東西方向の堤である。幅2.5~3.7m、高0.2~0.3m、長8.5m以上。青灰色粘土と黒灰色粘土の混ざった盛土である。

S X 0702 No.203からNo.205にかけて検出された。東辺は不明であるがほぼ方形を呈する堤であろう。南北8.2m、東西6.5m以上、高さ0.4~0.6mをはかる。盛土は0701と同様である。

S X 0704 No.205からNo.207にかけて検出された。幅3.2~4.4m、高0.2~0.3m、長17m以上。S X 0701と同一方向である。その距離は約35mである。盛土もS X 0701と同様である。

S X 0712 No.209からNo.211にかけて検出された。幅4.5m、長100m以上、高さ0.3~0.4mをはかる。盛土は青灰色粘土と黒灰色粘土の混ざった盛土である。S X 0701、S X 0704と同一方向

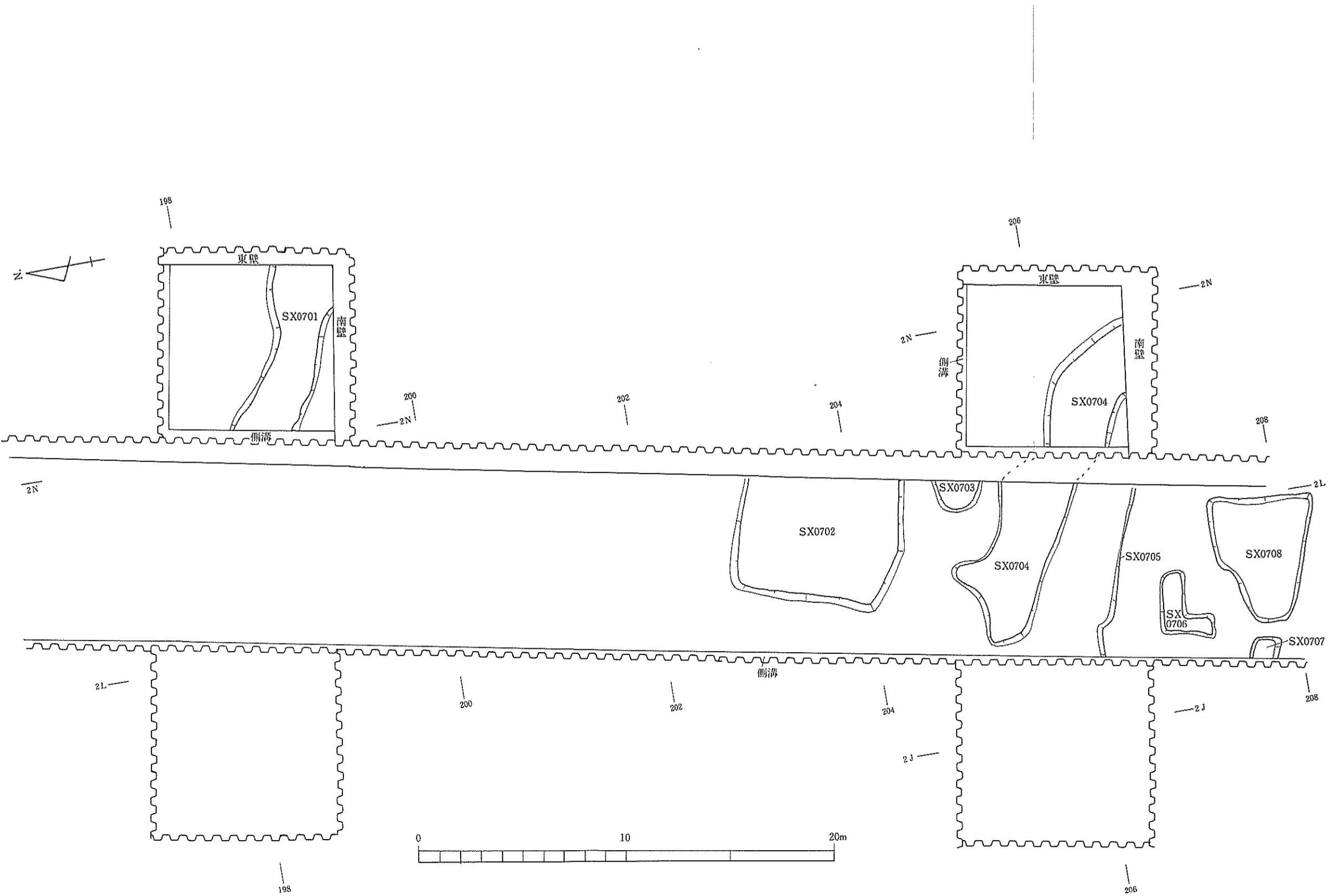


fig.22 古墳時代遺構面① (1/200)

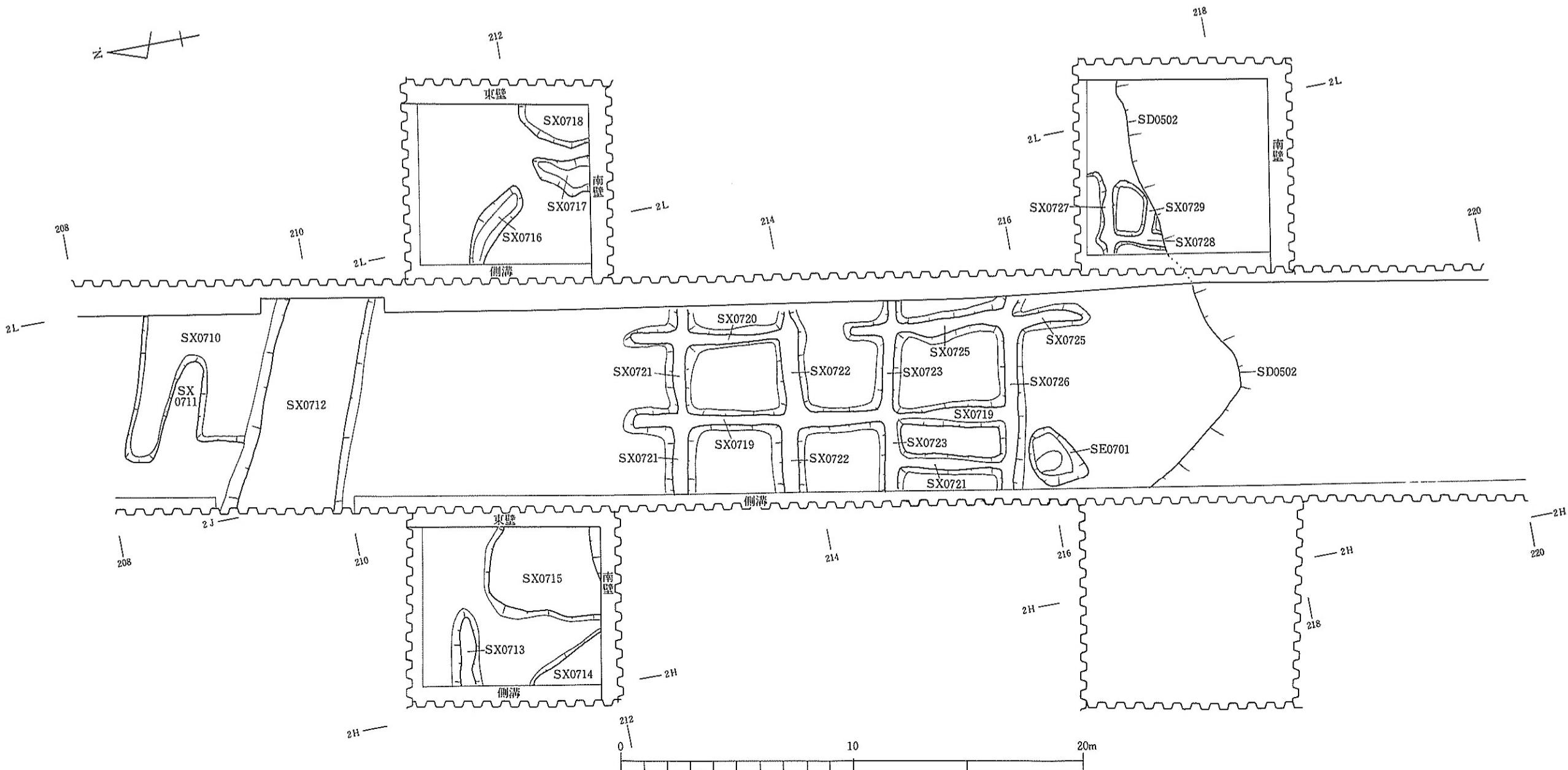


fig.23 古墳時代遺構面② (1/200)

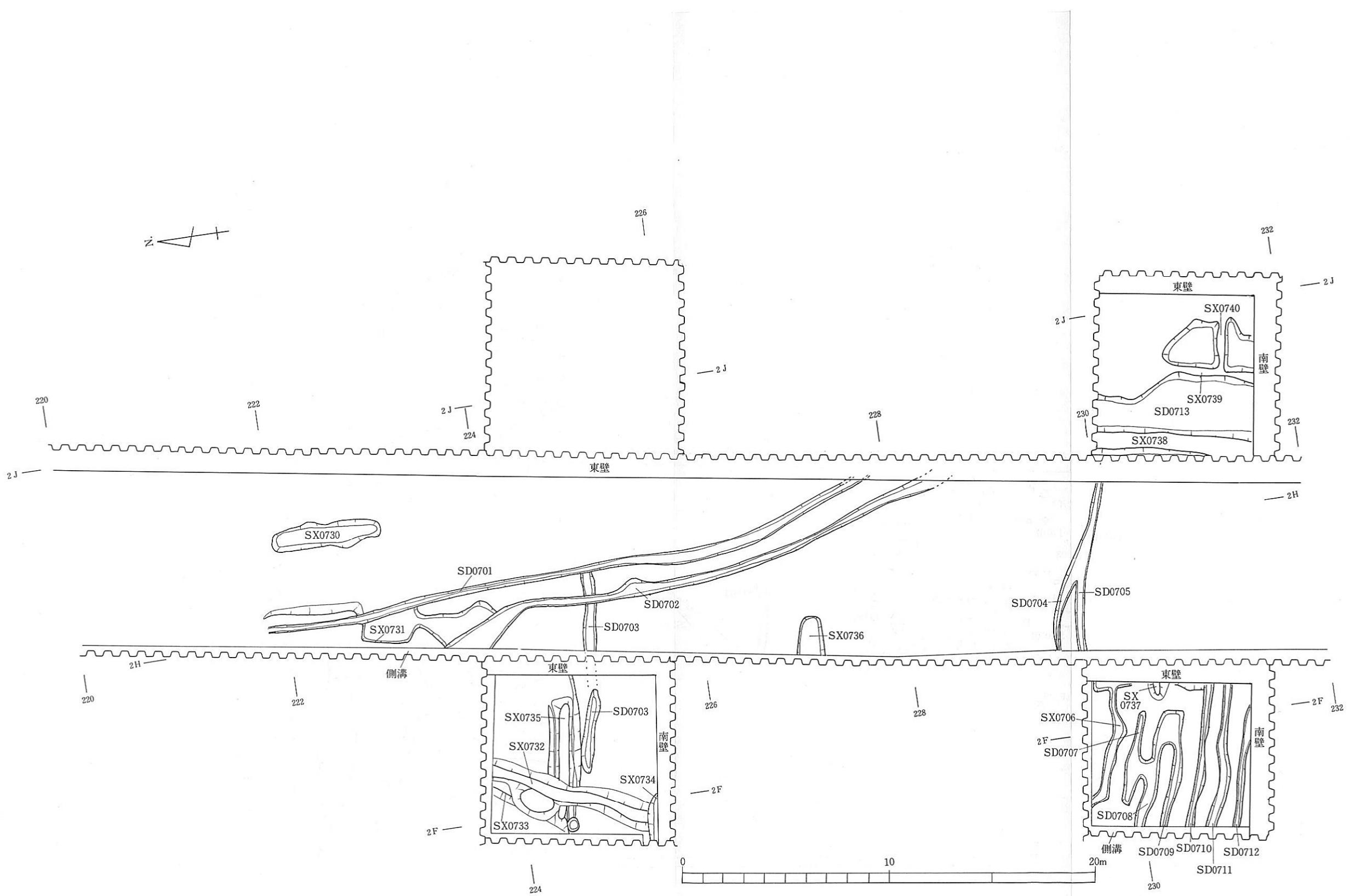


fig.24 古墳時代遺構面③ (1/200)

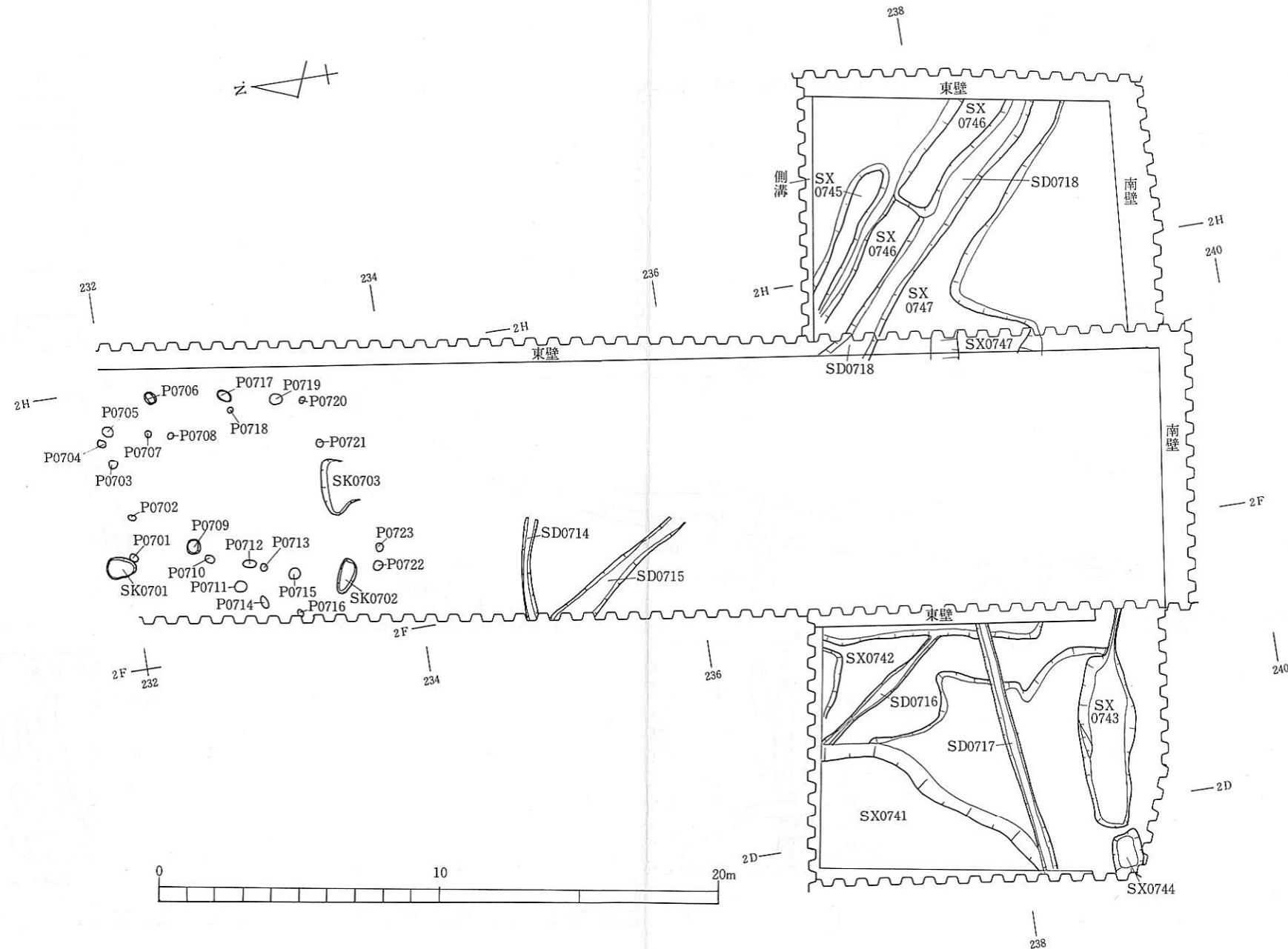


fig.25 古墳時代遺構面④ (1/200)

の堤である。

S X 0741 №.236から№.238にかけて検出された。堤というよりテラス状のものであろう。

S X 0745、S X 0746、S X 0747 №.237から№.239にかけて検出された。三ヶ所とも平行している。S X 0745は幅1m、長5.5m以上、高さ0.3m。S X 0746は幅1.6m、長11m以上、高さ0.3~0.4mをはかる。東側は一段高くなっている。S X 0747は西端でL字形に屈曲する。幅1.5m、長11m、高さ0.3~0.4mをはかる。盛土は青灰色粘土と黒灰色粘土の混ざったものである。

溝 (fig. 26)

S D 0701 №.222から№.228にかけて検出された。幅0.4m、長30m以上、深さ0.15m。やや蛇行気味で直線状に伸びる。埋土は青黒色粘土で、層内より須恵器片等が出土している。溝より東側は段がついて低くなる。S D 0701は段にそって西側に掘りこまれている。溝のレベルは北へ行くほど低い。排水用の溝であろうか。

S D 0702 №.224から№.229にかけて検出された。S D 0701の西側1.2mのところで平行して伸びる溝である。幅0.4~0.6m、長25m以上、深さ0.15m。№.224付近より北側では幅約1.5mと広くなる。埋土は青黒色粘土で、層内より完形の須恵器の杯身・杯蓋等が出土している。

遺物の出土状況 (fig. 26) については1の杯蓋が2 H 226付近で検出された。天井部を下にしてほぼ水平に置かれていた。土器底面のレベルはT.P.+7.3m前後である。溝底面のレベルより約5cm浮いている。2の杯身は2 I 228付近で検出された。底部を下にして正位の状態で据えられた状況であった。杯身底面のレベルはT.P.+7.3m前後である。溝底面のレベルより若干浮いている。1、2とも溝のはば中央で水平位置で検出されており、意図的な行為かもしれない。

S D 0703 №.225付近で検出された。幅0.6m、長約10m、深さ0.2m。S D 0701、S D 0702に直交して切られている。埋土は青黒色粘土である。

S D 0704、S D 0705 №.230付近で検出された。S D 0703と同様東西走する溝である。幅0.3~0.4m、長10m、中央で合流する形になっている。合流する付近で須恵器の甕が細片になって検出されほぼ一個体になる。埋土は青黒色粘土である。

S D 0706, 0707, 0708, 0709, 0710, 0711, 0712 №.229から№.232にかけて検出された溝群である。幅0.3m、深さ0.1m、東西走する小溝で、溝間の距離もほぼ等間である。溝の埋土は青灰色系の粘土で、ベースは黒灰色粘土である。溝群は平行しており島の敵溝であろう。敵部は削平されているのであろう。

S D 0718 №.238付近で検出された。溝というより堤S X 0746とS X 0747にはさまれた凹みの様である。

S D 0717 №.239付近で検出された。ほぼ東西に一直線状に伸びるものである。幅0.4m、深さ0.2m、長9.2m以上。埋土は青黒色粘土である。

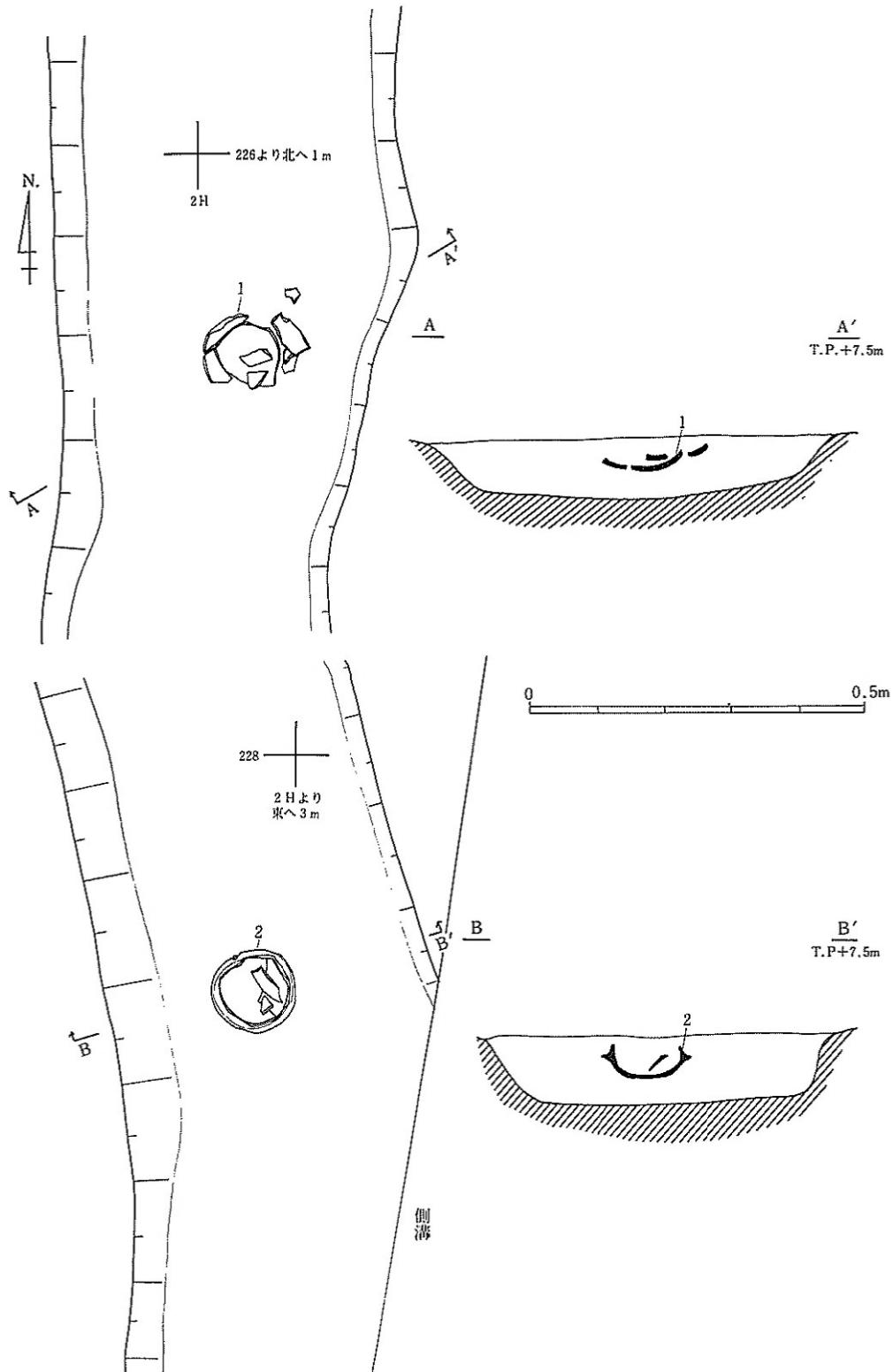


fig.26 古墳時代遺構面S D0702遺物出土状況平面図及び断面図

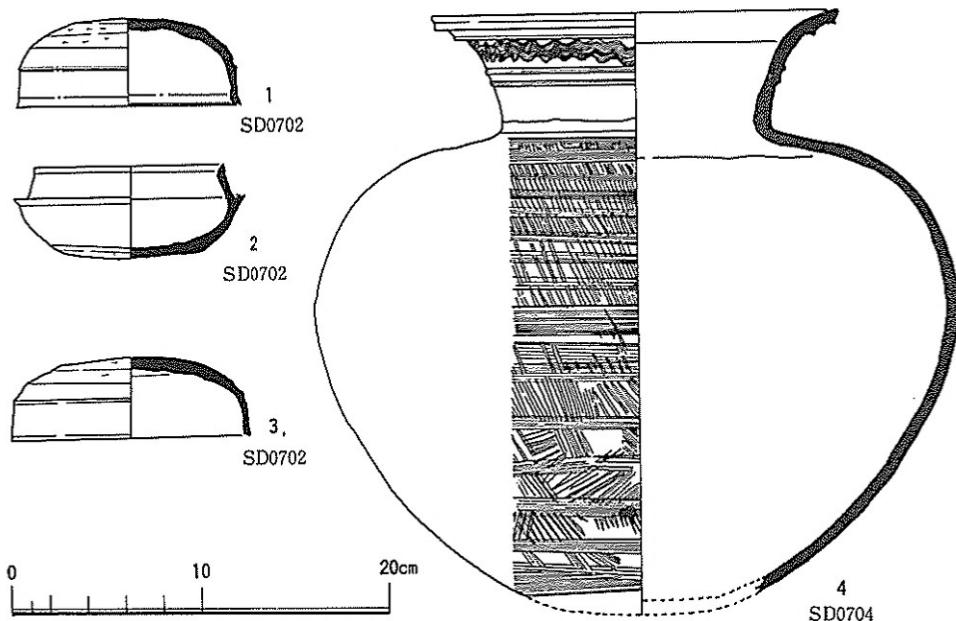


fig.27 古墳時代遺構面 S D0702、0704出土遺物 S=1/4

S D0702、0704 出土遺物 (fig.29)

1は須恵器杯蓋である。口径12.1cm、器高4.6cm。口縁端部には一条の沈線がめぐる。天井部は回転ヘラケズリ。口縁部内外面は回転ナデ。焼成良好。

2は須恵器杯身である。口径10.1cm、器高4.9cm。口縁端部は内面に面をもつ。底部外面は回転ヘラケズリ。口縁部内外面は回転ナデ。焼成良好。1と2はセットになるかもしれない。

3は須恵器杯蓋である。口径12.8cm、器高4.3cm。口縁端部は内面に面を有する。天井部外面は回転ヘラケズリ。口縁部内外面は回転ナデ。焼成良好。

1～3はS D0702内より出土した。

4はS D0704より出土した須恵器甕である。口径21.6cm、器高31cm以上。底部を欠失している。口縁部はくの字状に外反し、口縁端部は面を有する。肩はやや張り気味で胴部へ伸びる。底部へは鋭く内弯する。体部最大径は体部中央より上位にある。口縁部には回転ナデのあと波状文を施す。その下部は二条の突帯により波状文を区画する。体部は右下がりの平行タタキを底部まで施したのち、横方向にカキ目調整を施す。内面は青海波文をすり消している。胎土は密で黒色粒を含む。焼成は堅緻である。色調は青灰色を呈する。1～4についてT K208の時期であろう。

その他の遺構 (fig. 28~34)

S X 0743 2 E 239で検出された。規模は長辺6.7m、短辺1.4~2.0mで長方形形状を呈している。深さは南肩部より約0.6~0.7mをはかる。青灰色砂質土のベース土を逆台形状に穿った土坑状のものである。遺構内の土層の堆積については、fig.29に詳しい。断面Aを参考にすると、上層より①暗青灰色粘土（炭混じり、土器を含む）②～④黒灰色粘土（炭混じり、土器含む）が3層、⑤青灰色粘土のブロック土（かなり粘着力強い）、⑥黒灰色粘土（炭・土器含む）が堆積している。①暗青灰色粘質土は南平坦面にも堆積しており、そこでは五世紀に属する須恵器や土師器、製塩土器等が出土している。落ち込みについてのレベルは南肩部でT.P.+7.35m前後、底面でT.P.+6.7m前後である。遺物の出土が多くみられるのは③黒灰色粘土及び、⑥黒灰色粘土である。下層の⑥黒灰色粘土より下は灰色砂層がうすく堆積し、土坑内が滯水状態であったことが理解できる。③層と⑥層の間には⑤青灰色粘土のブロック土が約7~8cmレンズ状に堆積している。⑤層より上部はU字形に再掘削され、土坑内一部をさらえた状況であった。ただ、⑤層より上部は破片になった土器が多い。土坑の東側は幅0.2~0.6mの溝が伸び、土坑に合流する状況であった。溝の埋土は暗青灰色粘質土である。

遺物の出土状況についてはfig.28に詳しい。土坑内下部より韓式系土器、土師器、須恵器、製塩土器、炭化した木片、管玉一点が出土している。また南平坦面上にも韓式系土器、土師器、須恵器等が検出され、土坑内のものと接合しうる破片も認められる。土器等は完形や完形に近いものが大部分を占め、それらだけでも約30点にのぼる。土器の出土状況については置かれたものではなく、南肩から投棄された状況であった。

土坑内及び南平坦面で検出した土器の器種は須恵器（高杯・鉢形器台・甕・壺・把手杯鉢）土師器（甕・鉢・高杯・杯蓋）、韓式系土器（平底鉢・甕・杯）、製塩土器、管玉である。

全て五世紀後半に属するものである。 (fig.30~33)

S X 0744 (fig.34) 2 D 239で検出された。当初 S X 0743と連続する遺構と考えられたが、途中で途切れる。規模は長辺1.5m、短辺1.1m、深さ0.5~0.6mの長方形をした土坑である。二段に掘削された様である。埋土は上から、青黒色粘質土、灰黒色粘土（ブロックまじり）、炭まじりブロック土、黒粘がU字状に堆積している。灰黒色粘土より韓式系土器の甕の破片が出土しており、S X 0743と一連のものであろうか。底面のレベルはT.P.+6.65mであり、西側がやや傾斜しており矢板の西側へも続く様である。S X 0743のようになるかもしれない。

本遺構面も S X 0743と同様五世紀後半に属するものである。

B. 小 結

本遺構面はトレチのほぼ全域に遺構がみられた。遺構の種類については水田関係（堤・溝・あぜ・井戸）のもの、畝、溝、ピット、土坑状のものがある。主に大部分は生産関係の遺構であり、南端部でS X 0743、0744という、韓式系土器を出土する祭祀に関連した土坑状のものを検出



fig.28 古墳時代遺構面S X 0743遺物出土状況平面図 (1/20)

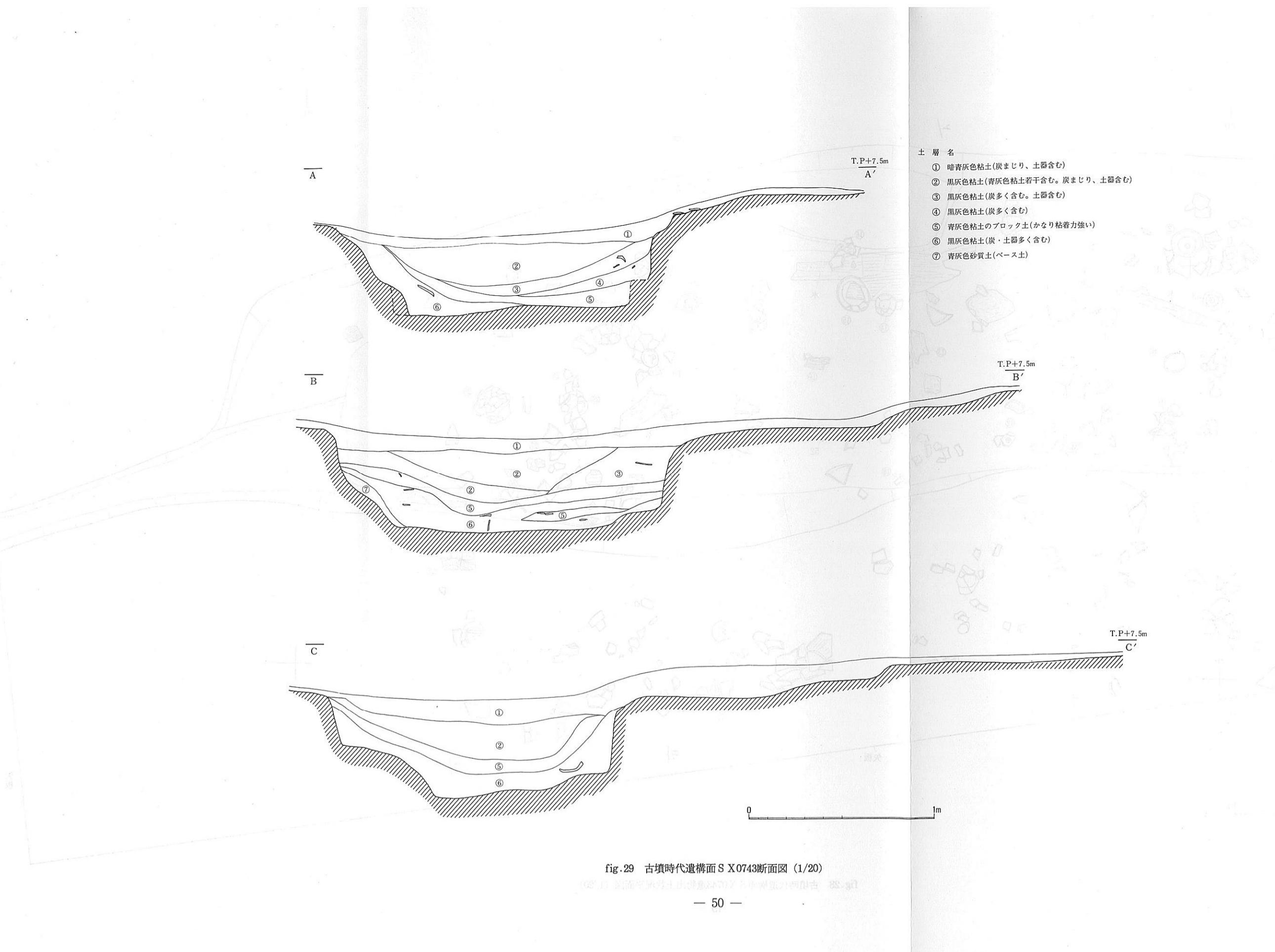


fig.29 古墳時代遺構面S X 0743断面図 (1/20)

(参考) 古墳時代後半・後世の古墳の構造と埋葬文化

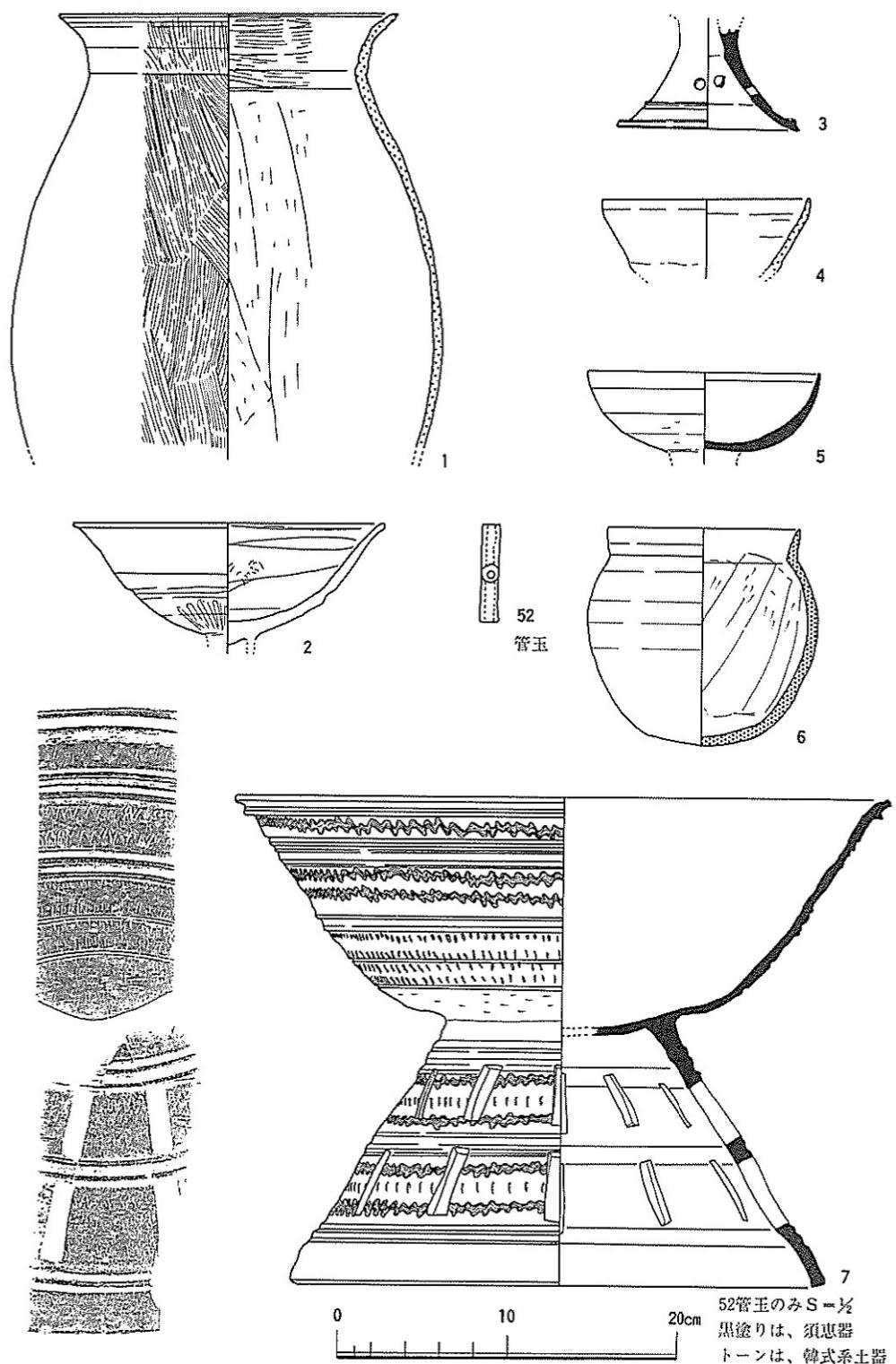


fig.30 古墳時代遺構面S X0743出土遺物① S =1/4

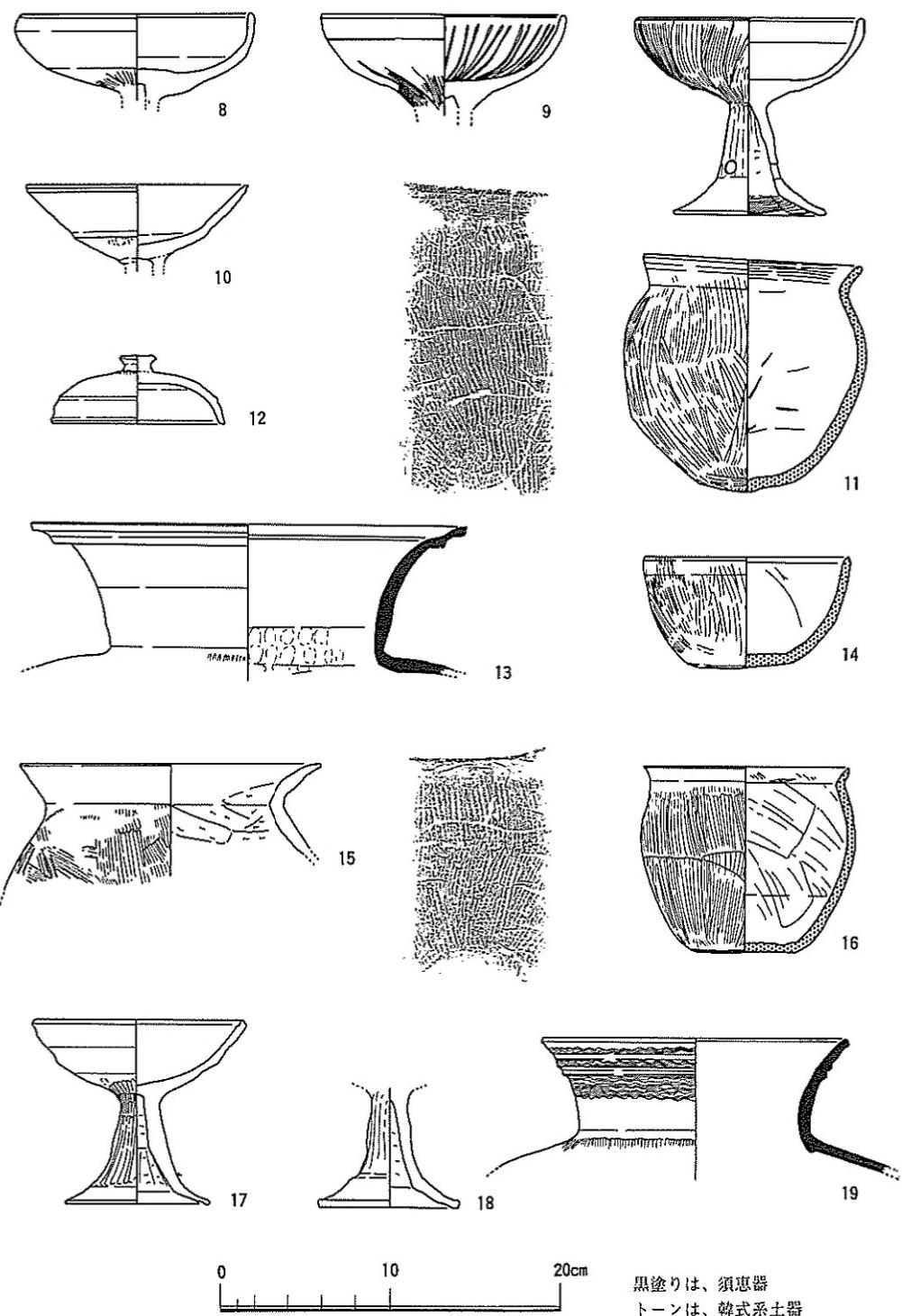


fig.31 古墳時代遺構面 S X0743出土遺物② S = 1/4

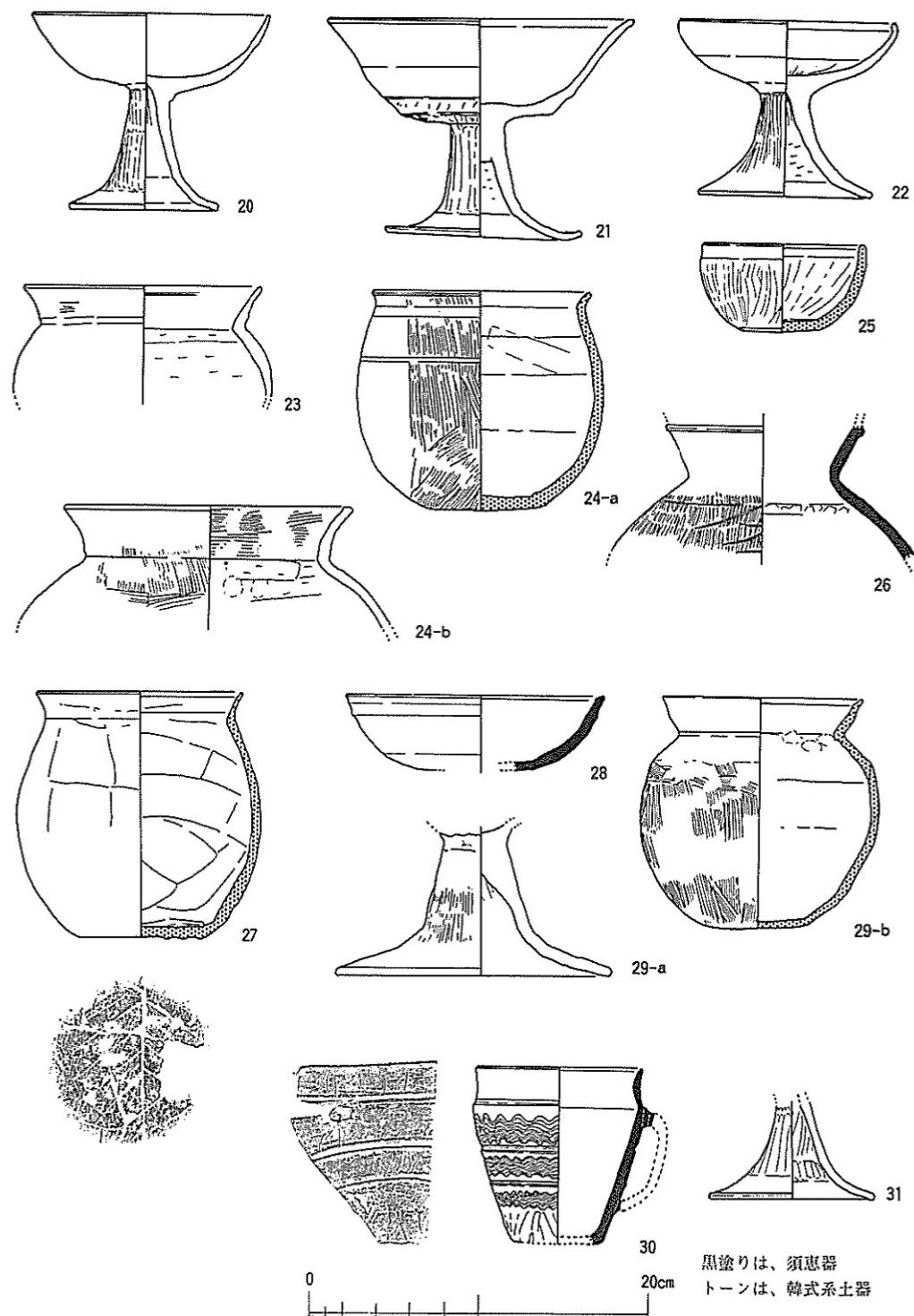


fig.32 古墳時代遺構面S X0743出土遺物③ S=1/4

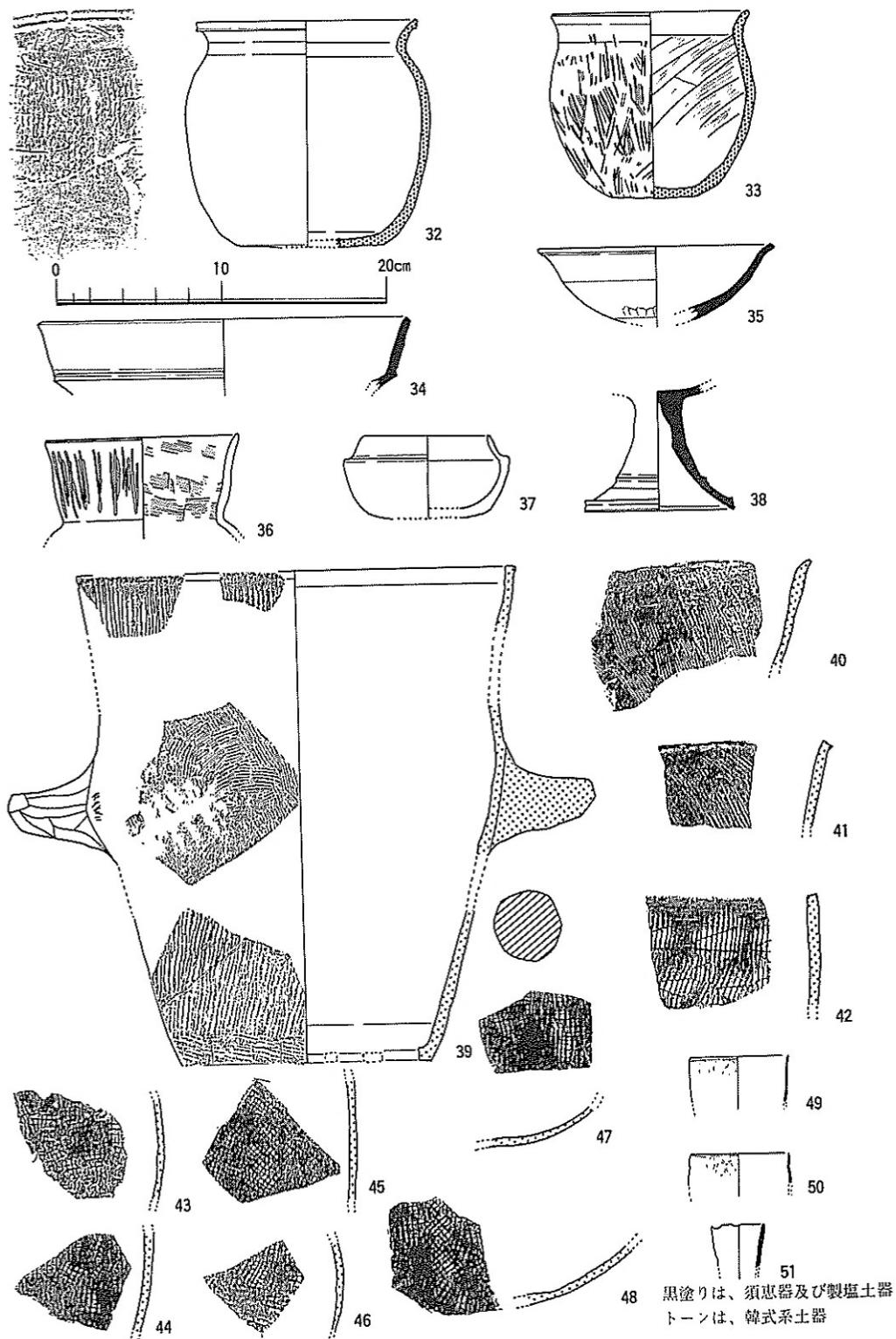


fig.33 古墳時代遺構面S X0743出土遺物④ S=1/4

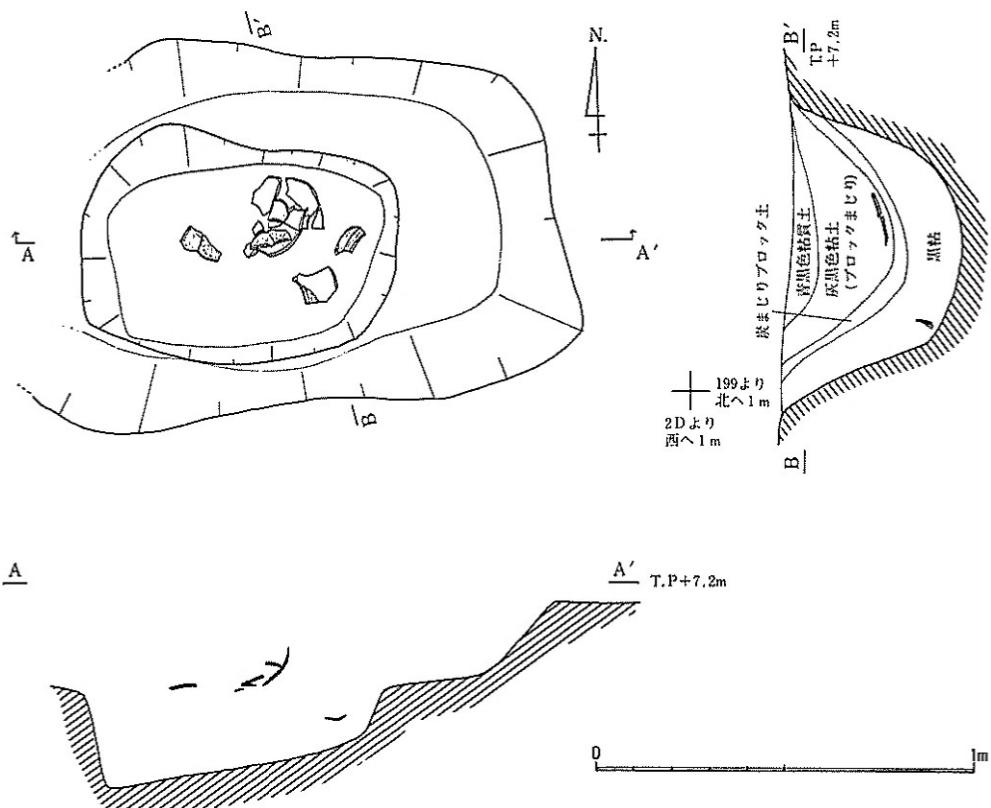


fig.34 S X0744遺物出土状況平面図及び断面図 (1/20)

したにすぎない。

水田関係の遺構の時期については遺物が少量しか出土していないので明確でない。同一遺構面で検出された溝や土坑から出土した土器は五世紀後半頃のものである。それらから考えれば五世紀代のものと考えて大過あるまい。出土遺物の詳細については観察表を参照されたい。

第8節 弥生後期遺構面 I

第11層（緑灰色シルト）上面を検出面とする。T.P.+7.0m前後を測る。北に行くに従って遺構面の高さは低くなる。検出した遺構は畝溝、溝、土坑、竪穴住居、ピットなどである。主に集落に関連した遺構が中心となる。（fig.35、36）

A. 畝 溝

トレント南半で検出された。幅0.3~0.4m、深さ0.1~0.2mの小規模な溝である。黒色粘土を埋土とする。埋土内からは少量の弥生土器片が出土する。

S D0901~S D0915、S D0918~S D0922は東西方向の小溝群である。

B. 土 坑 (fig.39~41)

S K0901 №.229付近で検出された。長径約1.0m、短径約0.8m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。検出面はT.P.+7.35m、底面はT.P.+7.1mである。層位は二層にわかれ、上層は青黒色粘質土、下層は青色粘土である。底面より上方へ約5cmのところで、横位の状態で完形の壺一個体と板状の結晶片岩が検出された。壺は口縁部が片口状を呈し、体部下半に打欠きがみられた。壺棺として使用され片岩を蓋に利用したものであろうか。壺棺墓の可能性が強い。

壺（fig.38）は、完形の状態で検出された。口縁部を1ヶ所つまみ出して片口状にしている。体部外面は縦方向のヘラミガキを有し、内面上半は横方向のハケ目がみられる。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部下半に一部、5×4.5cmの打欠き痕がある。体部上半に一部黒斑がある。色調は黄灰色を呈する。

結晶片岩（fig.39）は、長辺14cm、短辺11cm、厚さ2.2~1.2cmの板状のものである。表面には鉄器等を削った痕跡が線状にみられる。

S X0902 (fig.40) №.231付近で検出された。長6.3m、幅1.3m、深さ0.25mの長方形を呈する土坑状のものである。埋土は黒褐色系の粘土である。底面の高さはT.P.+7.0mをはかる。遺構内中央付近で土器が出土している。土器を廃棄した穴であろう。

S X0902 出土遺物 (fig.41) は甕、高杯、器台、壺等がある。

C. 溝

直交する形で細長い溝が多く検出されている。

S D0923、S D0924 №.236付近で検出された。S D0923は幅0.5~0.7m、長10m以上、深さ0.2mの東西方向の溝である。埋土は灰黒色粘質土である。埋土内より弥生土器片が出土している。S D0924は幅1.6m、長10m以上、深さ0.3mのS D0923と平行して走る溝である。埋土も同様である。

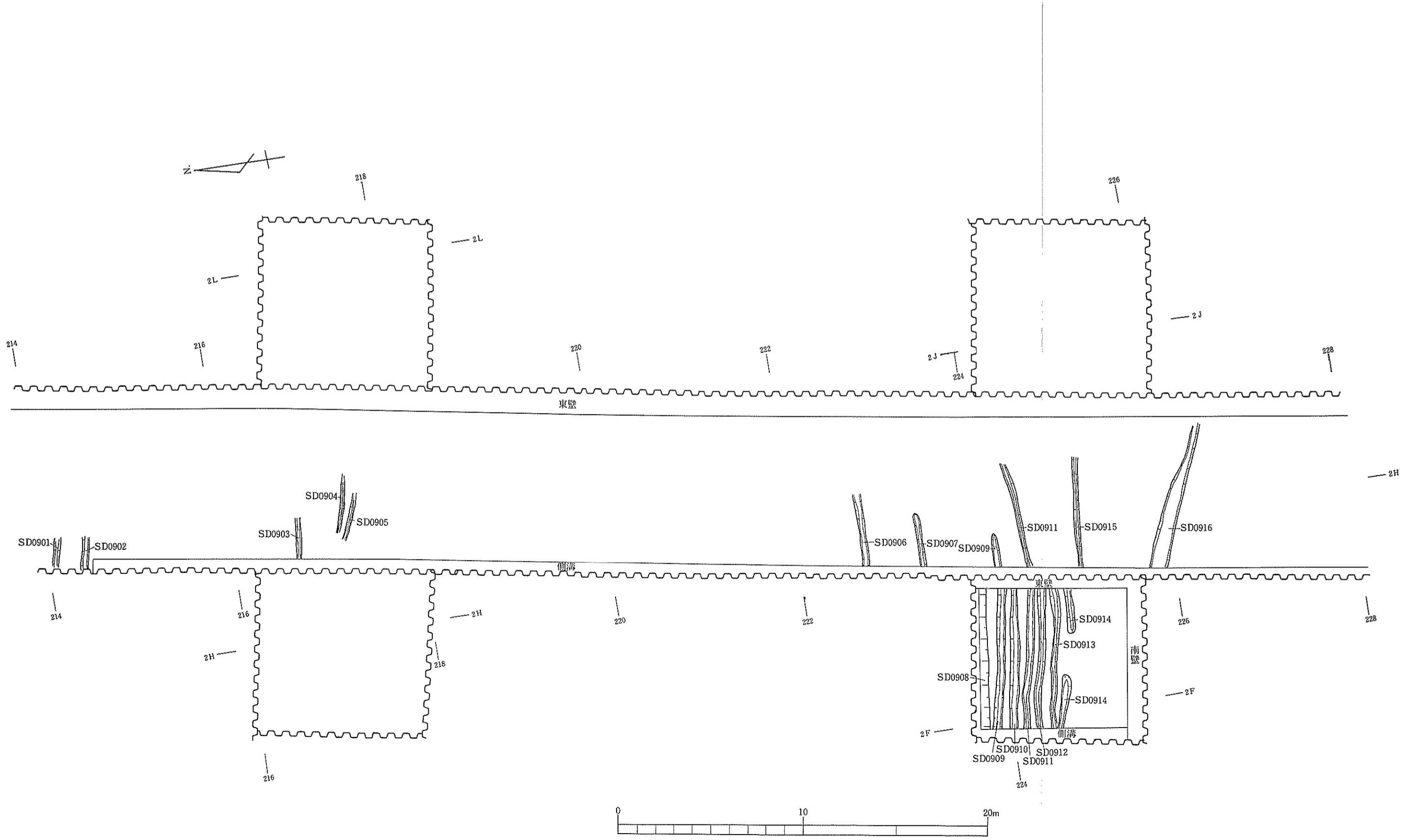


fig.35 弥生後期遺構面 I ① (1/200)

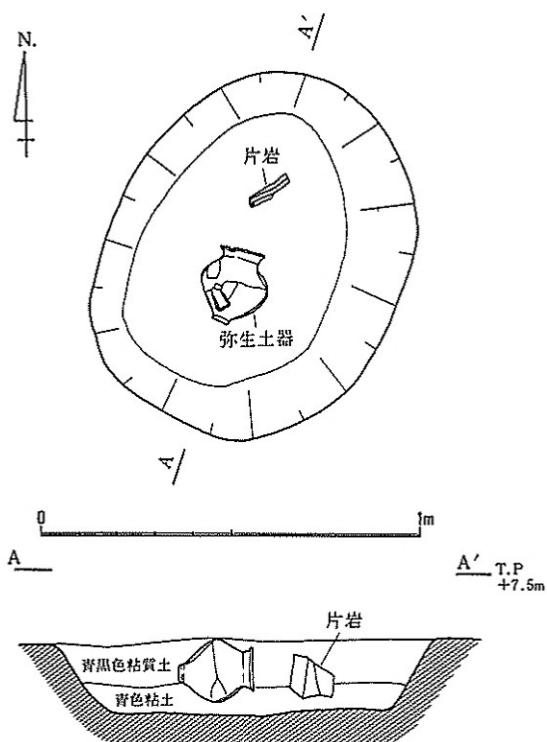


fig.37 弥生後期遺構面 I S K0901
遺物出土状況平面図及び断面図 (1/20)

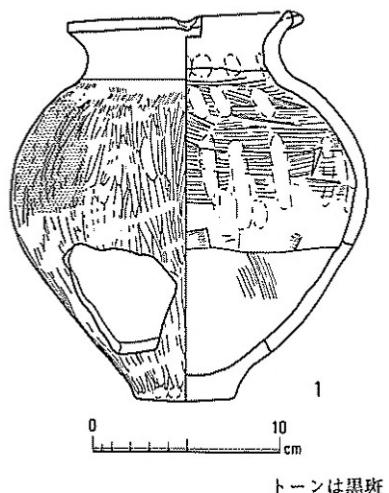


fig.38 弥生後期遺構面 I S K0901出土土器 (1/4)

S D 0926～S D 0929、S D 0933～S D 0936 No.236～No.240付近で検出された。全て南北方向の溝である。溝間の幅1.5～3.2mで平行して伸びる。埋土は黒灰色粘土であり、溝内より弥生土器片が出土している。溝の断面は逆台形を呈する。

S D 0925、S D 0930 東西方向に伸びる溝である。埋土は黒灰色粘土であり、弥生土器片が出土している。溝の断面は逆台形を呈する。

これらの直交する溝については排水用のものかもしれない。

S D 0917 No.231～No.234の間で検出された。住居跡 S B 0901を半円形に囲む形でみられる。南端部は S D 0919によって切られている。溝幅1.6～3.1m、深さ0.4～0.6mをはかる。埋土は暗青黒色粘質土であり、層内より弥生土器片が多量に出土している。S D 0917 (fig. 43) 出土土器の器種は壺、甕、高杯、鉢、ミニチュア壺等がある。

D. 積穴住居

S B 0901 No.232～No.233付近で検出された。住居はほぼ全容が検出されている。規模は長辺5.7m、短辺4.3m、深さ0.35mを測り、長方形を呈するものである。住居は灰色粘土を整地して造られている。住居内においては上部で焼け

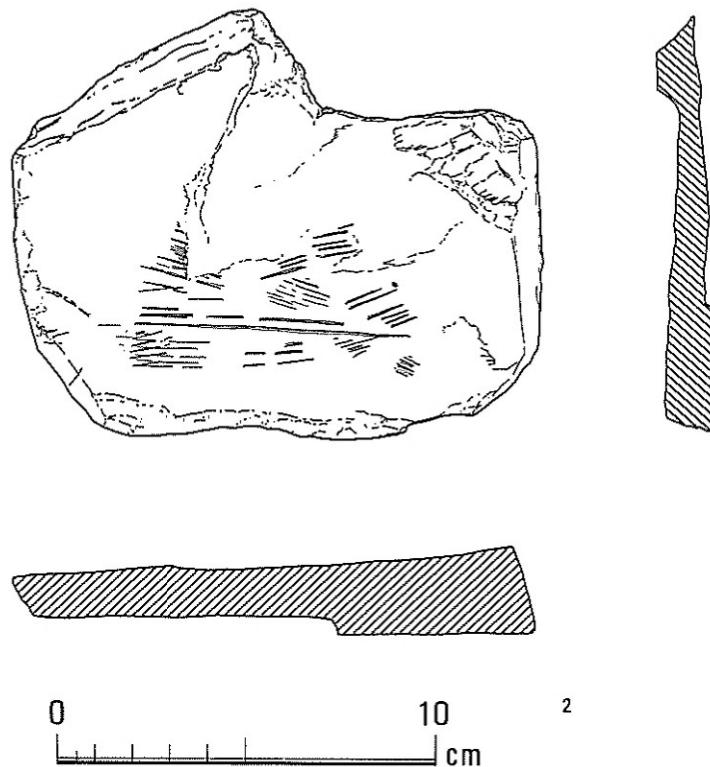


fig.39 弥生後期遺構面 I S K0901出土土器 (1/2)

た炭化材、焼土、炉、土器群、柱穴 2ヶ所、周溝（壁溝）を検出した。まず住居内を覆っている包含層（黒色粘土）を除去して焼けた炭化材、焼土、炭、灰を検出した。（fig.44）

遺物・炭化材等出土状況（fig.44） 炭化材等の遺存は北東部・南東部・南西部にみられた。それらは放射状に倒れこんだ垂木材が中心をしめる。炭化材が検出される同一面で台石・弥生土器等が検出された。住居内における弥生土器の出土位置は四ヶ所にわたる。住居北東部では①～⑨の土器群があり、その器種と数は壺 2、甕 2、器台 2、鉢 2（有孔鉢を含む）、高杯 1 である。

壺①と有孔鉢②はセットになった状態で検出された。器台④の上にのっていたのであろう。器台④と⑥は立った状態である。特殊ピットには炭化材や甕⑩と壺⑪が検出された。これらの土器は中央に向かって倒れこんでいた。住居南東部では⑫～⑯の土器群があり、その器種と数は壺 2、甕 2、高杯 3 である。⑭～⑯は横倒しになった状態で検出され、また高杯⑬、⑯は接して検出された。南西部では甕⑰が鉢⑲の上に重ねた状態で検出された。おそらくセットになるものと考え

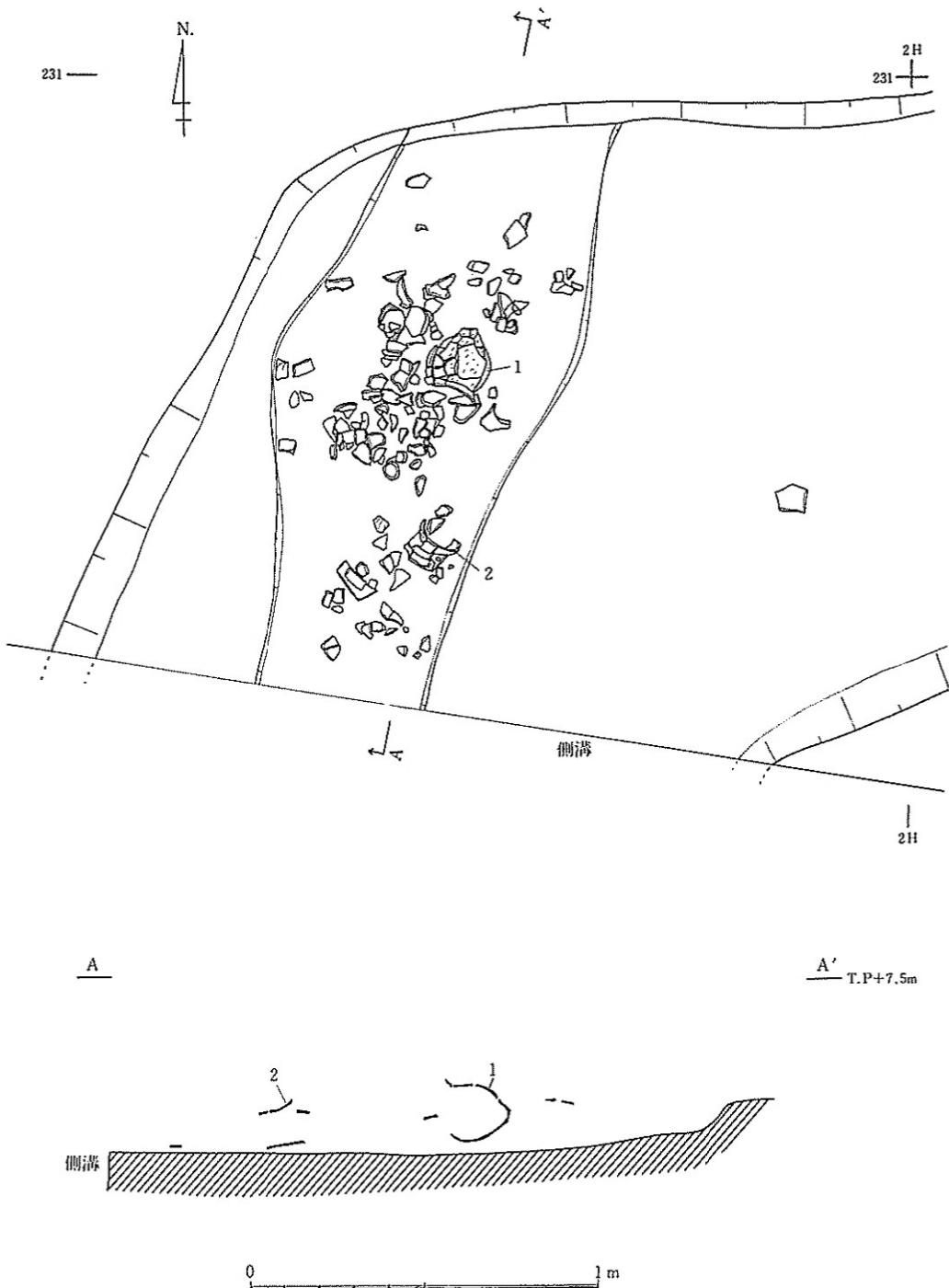


fig.40 弥生後期遺構面 I S X 0902遺物出土状況平面図及び断面図

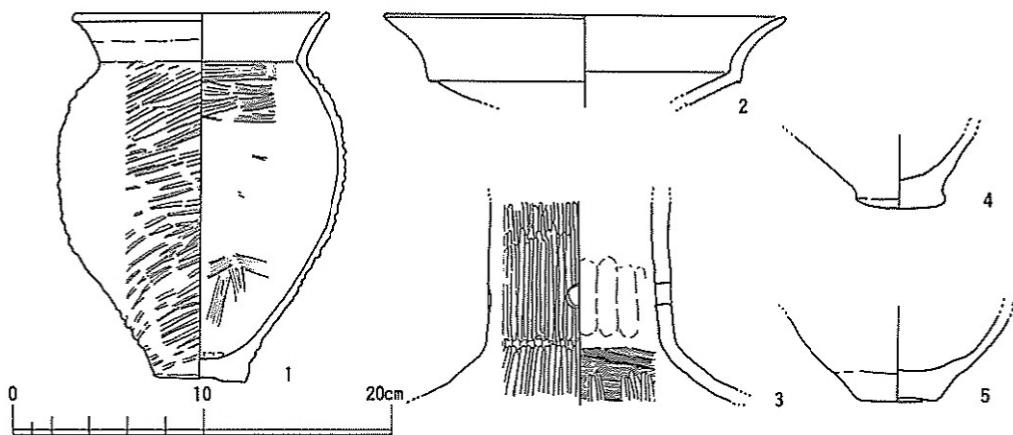


fig.41 弥生後期遺構面I S K0902出土土器 S=1/4

られる。北部には大形の台石が据えおかれていた。弥生土器や大形の台石が検出される面は実際の生活面であるが、周溝や柱穴等は精査を進めても検出されない。この面は貼床面であろう。貼床は暗青灰色粘質土によって0.1~0.15m為されている。炉跡や特殊ピットは生活面において検出された。

住居の構造 (fig.47)

住居の規模は長辺5.7m、短辺4.3m、深さ（最終床面）0.3~0.35mをはかる。住居内において上部で焼けた炭化材、土器、石器、炉、周溝、柱穴2ヶ所、特殊ピットを検出した。黒褐色粘土の包含層を除去した段階で焼けた丸木の炭化材、炭、焼土を一面に検出した。丸木の炭化材は放射状に倒れていた。壁は垂直に掘り下げ、その深さは、0.28mを測る。周溝は壁の直下に巡らされていた。周溝の断面は「U」字形を呈し、上部で幅40~50cm、深さ16cmをはかる。周溝の埋土は暗青灰色粘土と黒色粘土である。

柱穴は中央で2ヶ所検出された。柱穴1は直径65cm、深さ55cmの規模を有し、柱痕は直径15cmをはかる。柱穴2も、直径60cm、深さ55cmの規模を有し、柱痕は径20cmをはかる。埋土は黒灰色土である。柱穴1と柱穴2の距離は約2.1mをはかる。2ヶ所の柱穴の中央には炉がみられる。炉の規模は直径70cm、深さ35cmをはかり、埋土は上層より⑦黒灰色粘土、⑧黒灰色粘土（炭・焼土含む）⑨黒灰色粘質土である。炉跡は貼床面から検出された。炉跡を切る形で東側に特殊ピットが検出された。特殊ピットは三角形状を呈し長辺は約2.0mである。特殊ピットの中央に直径45cmの円形ピットが検出された。特殊ピットの深さは貼床面より25cmである。埋土には焼土や炭も含んでいるが黒灰色土系のものである。特殊ピットの機能は明確ではないが貯蔵穴のような機能が考えられるかもしれない。

S B0901 (fig.45) 出土土器の器種は壺、鉢、甕、器台、高杯、有孔鉢等であり、作業台用の

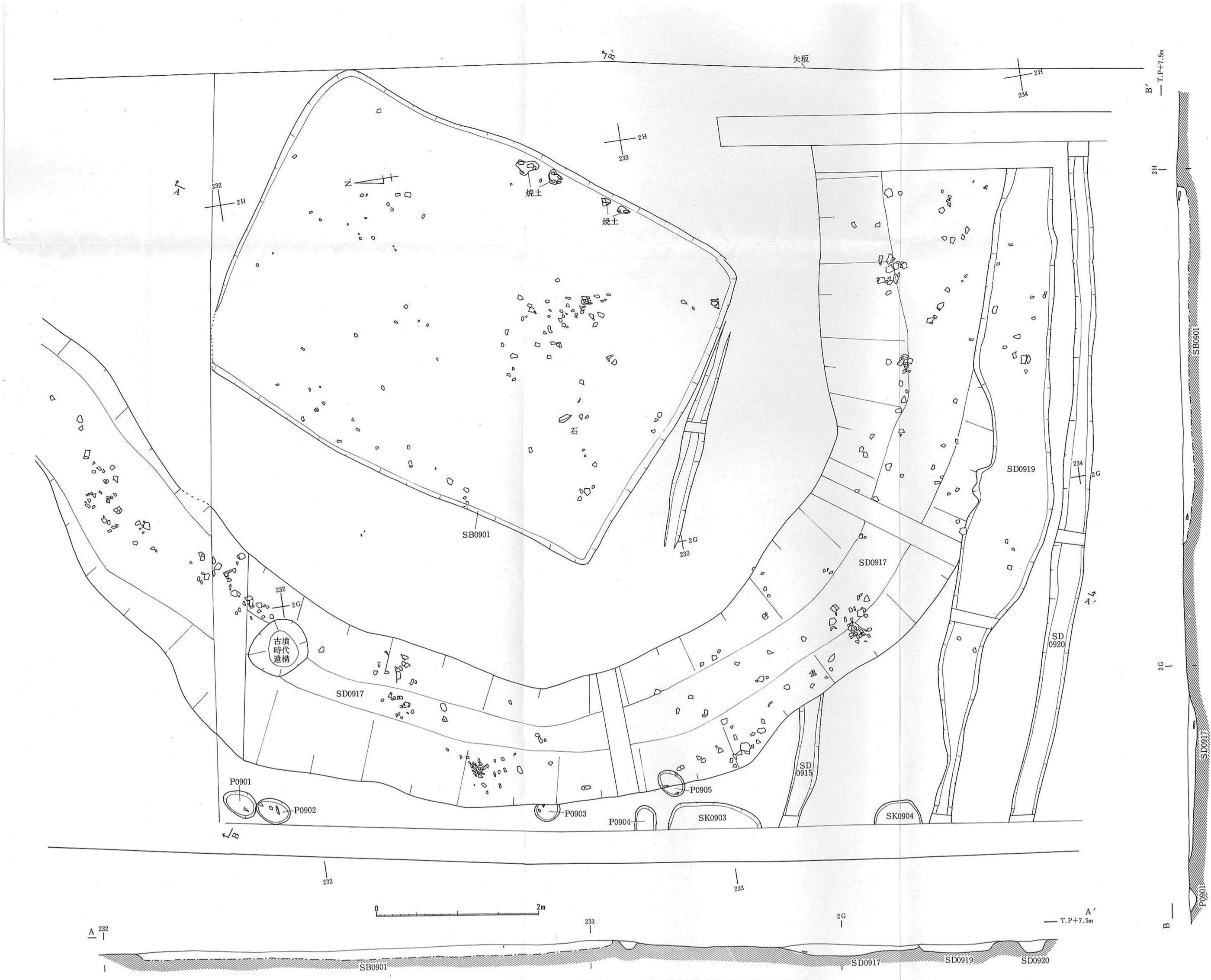


fig.42 弥生後期遺構面 I S B0901上層及び S D0917他遺物出土状況平面図及び断面図 (1/40)

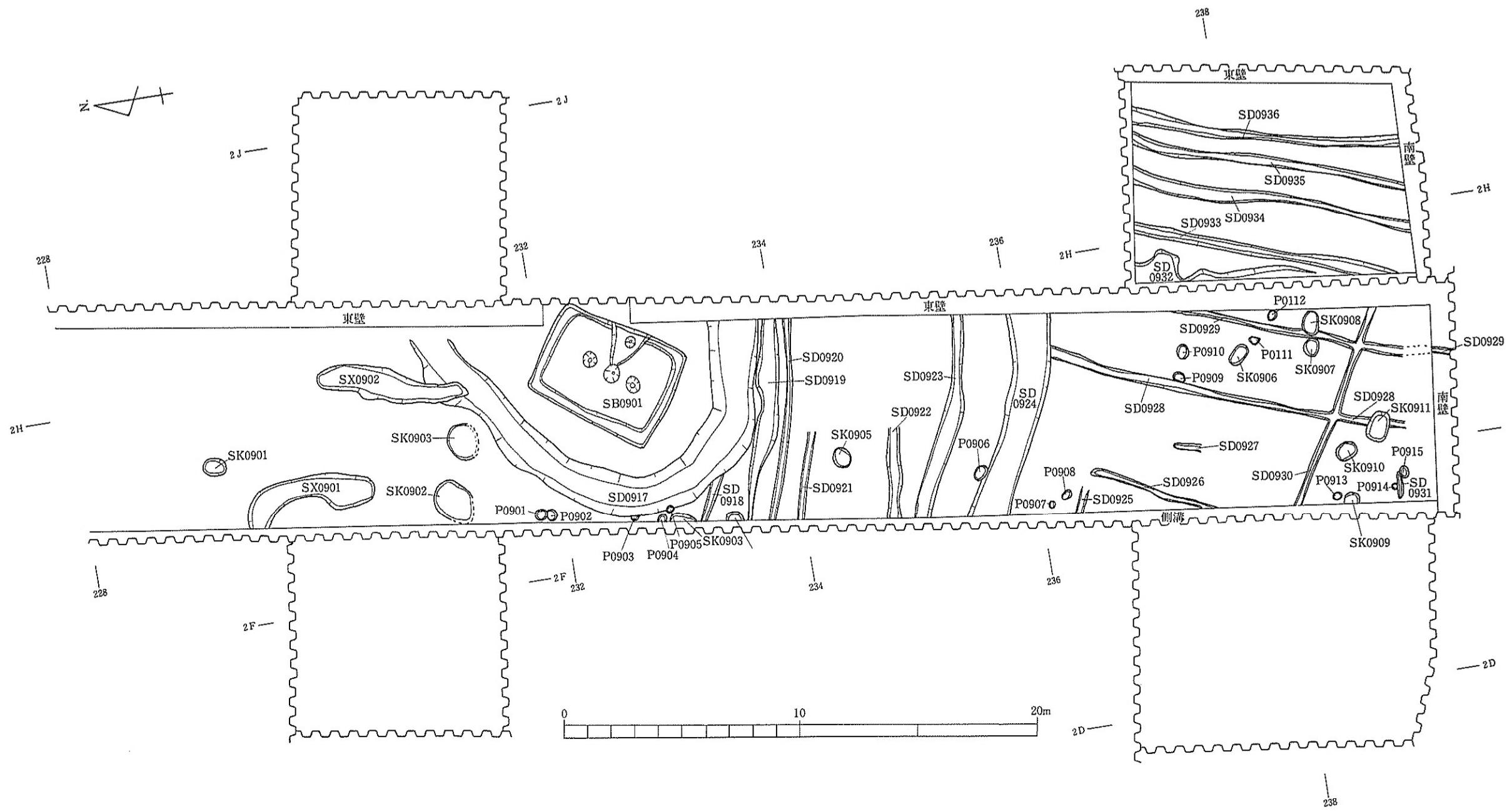


fig.36 弥生後期遺構面 I ② (1/200)

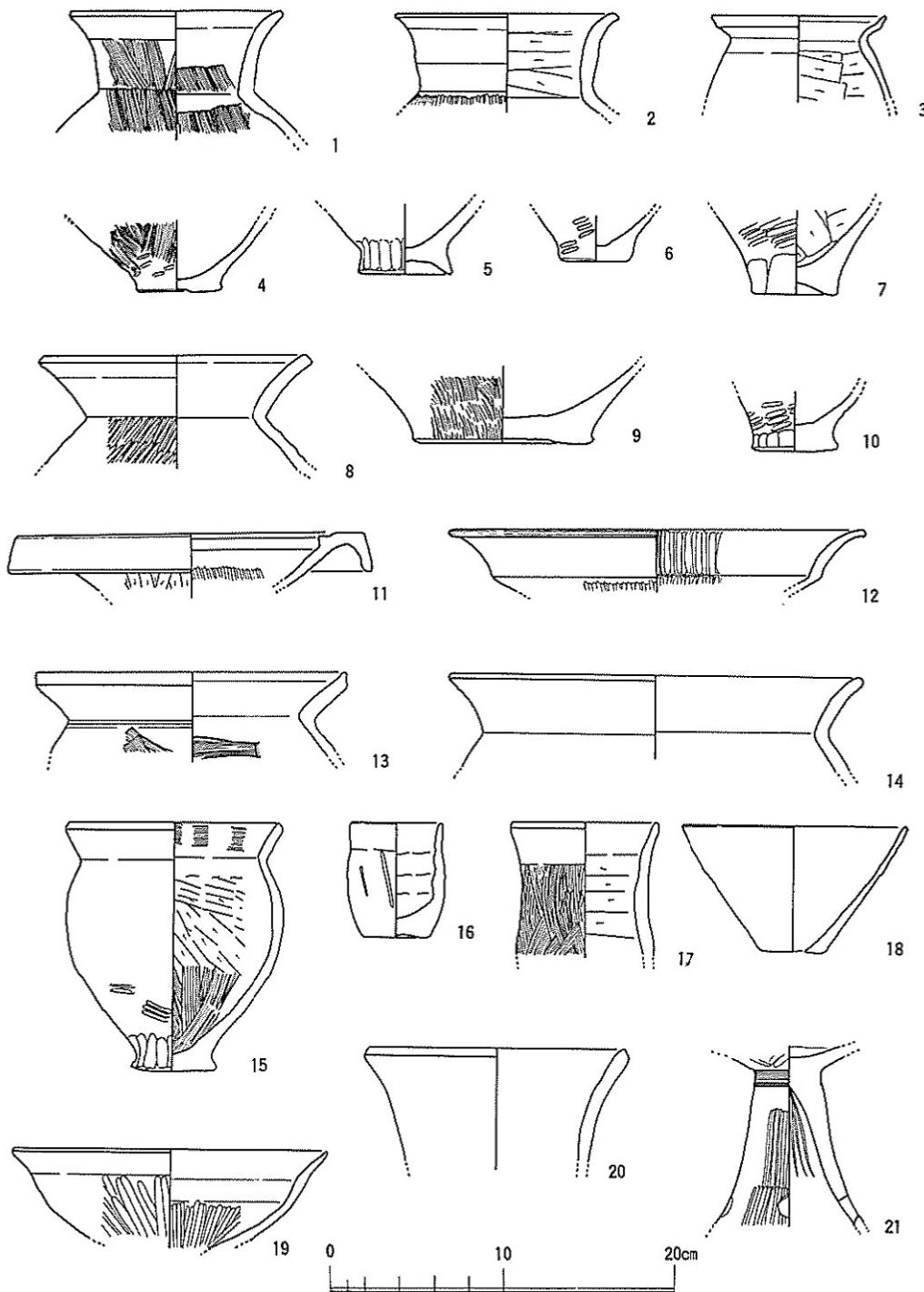


fig.43 弥生後期遺構面 I S D0917出土土器 S=1/4

台石が加わる。

E. 小 結

本遺構面はトレンチ全域に遺構がみられるのではなく、主にNo.216～No.239にかけてのみであった。遺構の種類については集落関係（住居・ピット・土坑・溝）のもの、壺棺墓、畝溝等がある。特に堅穴住居 S B0901は火災にあった焼失住居だったので住居内で使用されていた土器の量、配置、器種等が明確になった。S B0901の時期は出土土器より弥生後期中葉頃と考えられる。またS B0901を半円状にとりまく形で検出されたS D0917には、住居内で使用されていた土器が廃棄されていた。さらにS D0917の底面はS B0901よりも深く掘削されていた。これらは住居内の湿気を除去し住居内への水の浸入を防ぐためのものと考えられる。

本遺構面の時期については出土土器より弥生後期中葉頃と考えられる。

出土遺物の詳細については観察表を参照されたい。

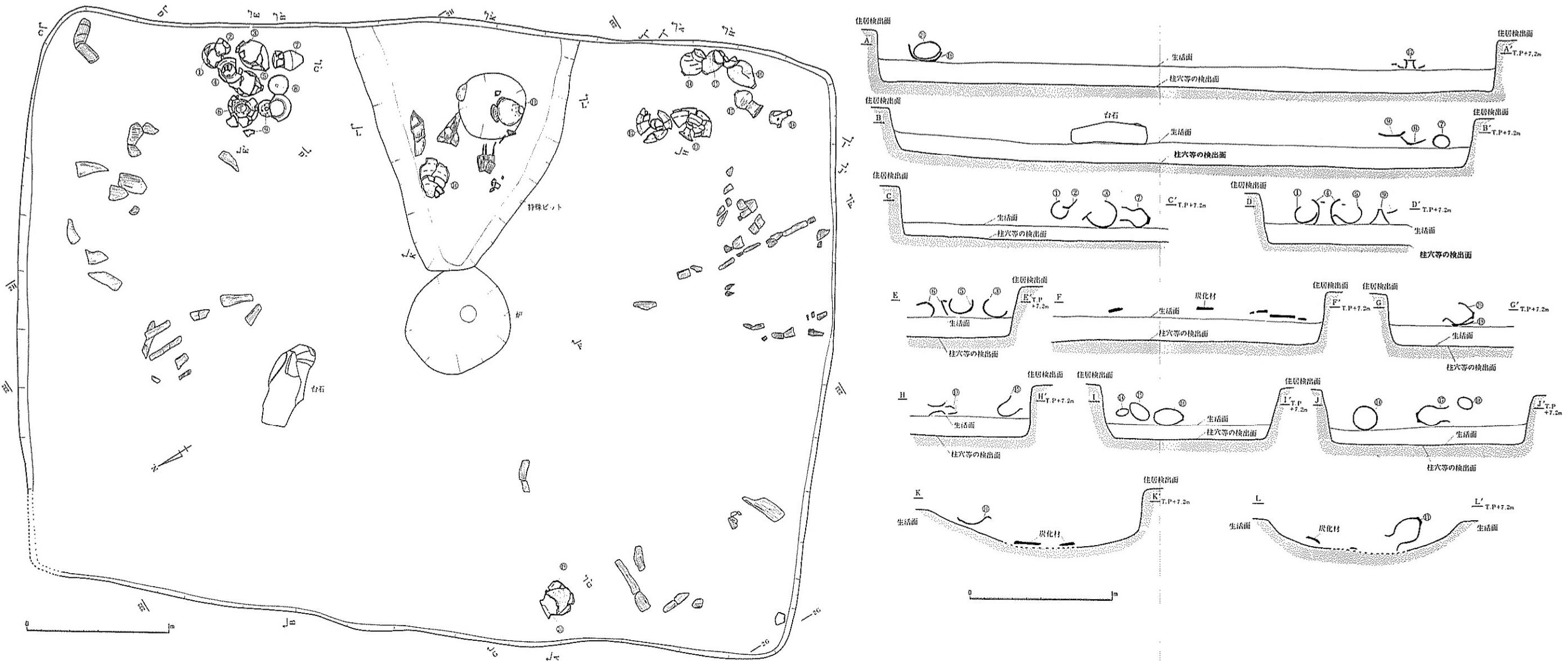


fig.44 弥生後期遺構面I S B0901土器・炭化材等出土状況平面図及び断面図 (1/20)

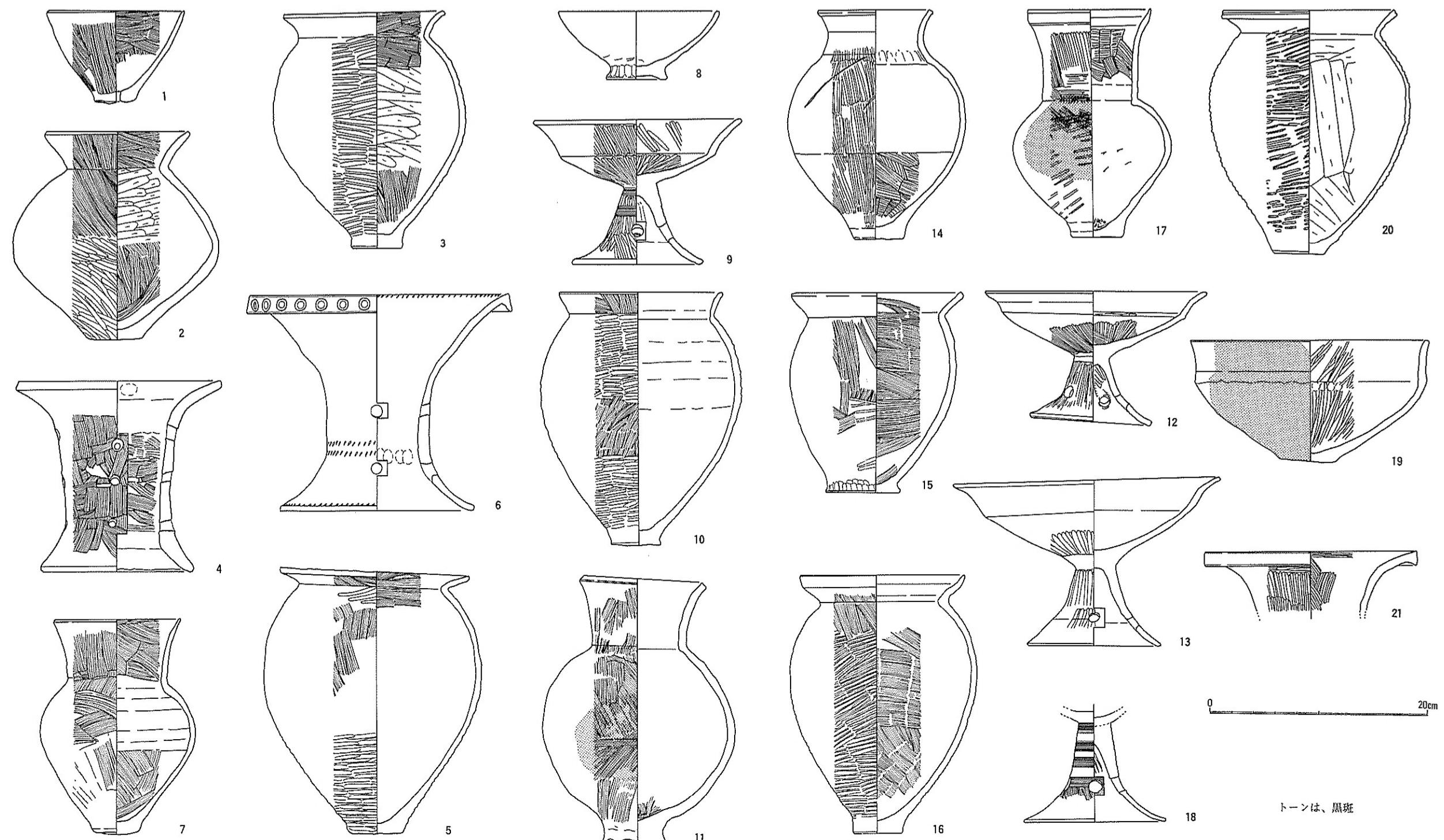


fig.45 弥生後期遺構面 I S-B0901出土遺物① S=1/4

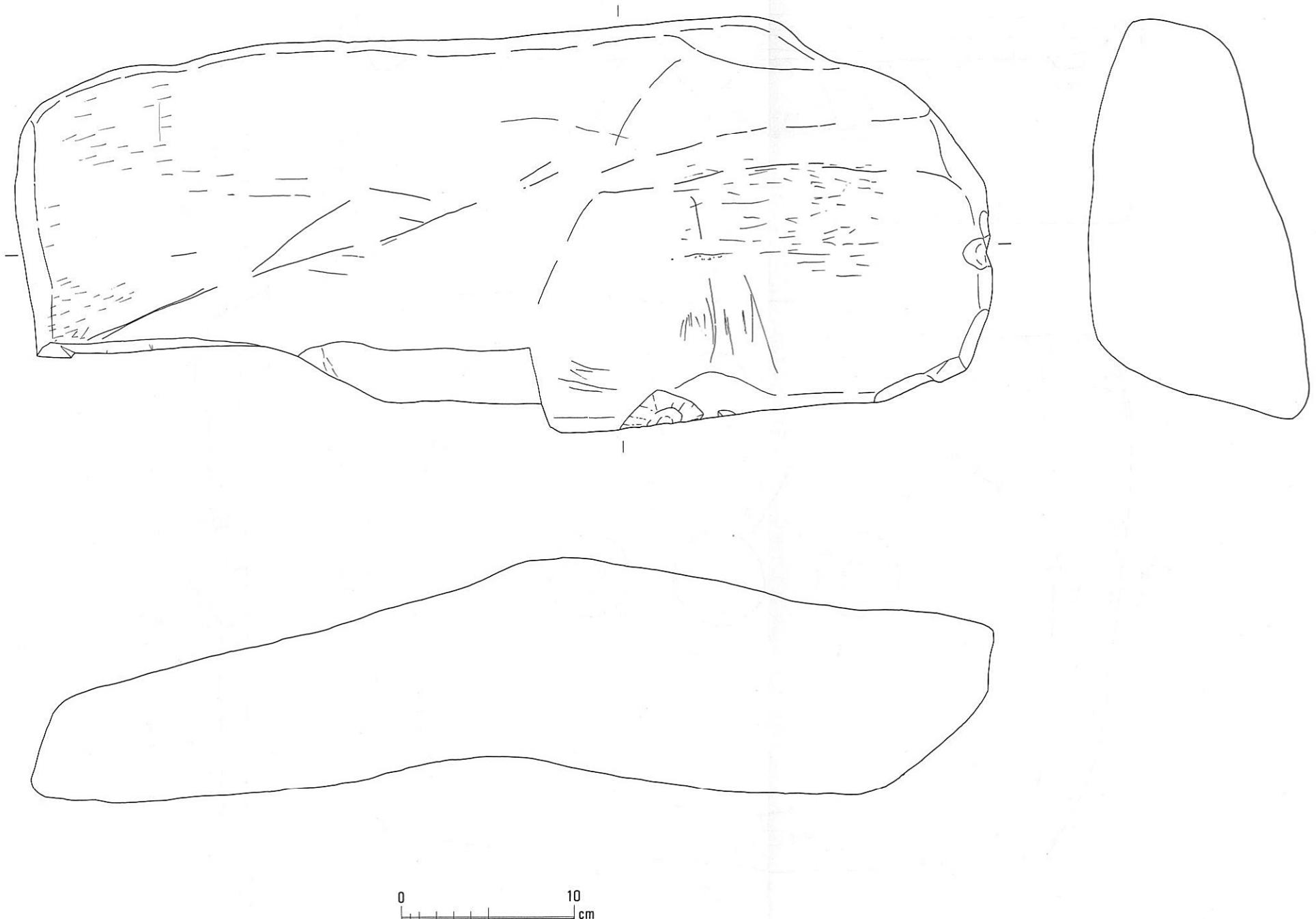


fig.46 弥生後期遺構面 I S B 0901出土遺物② S = 1/3

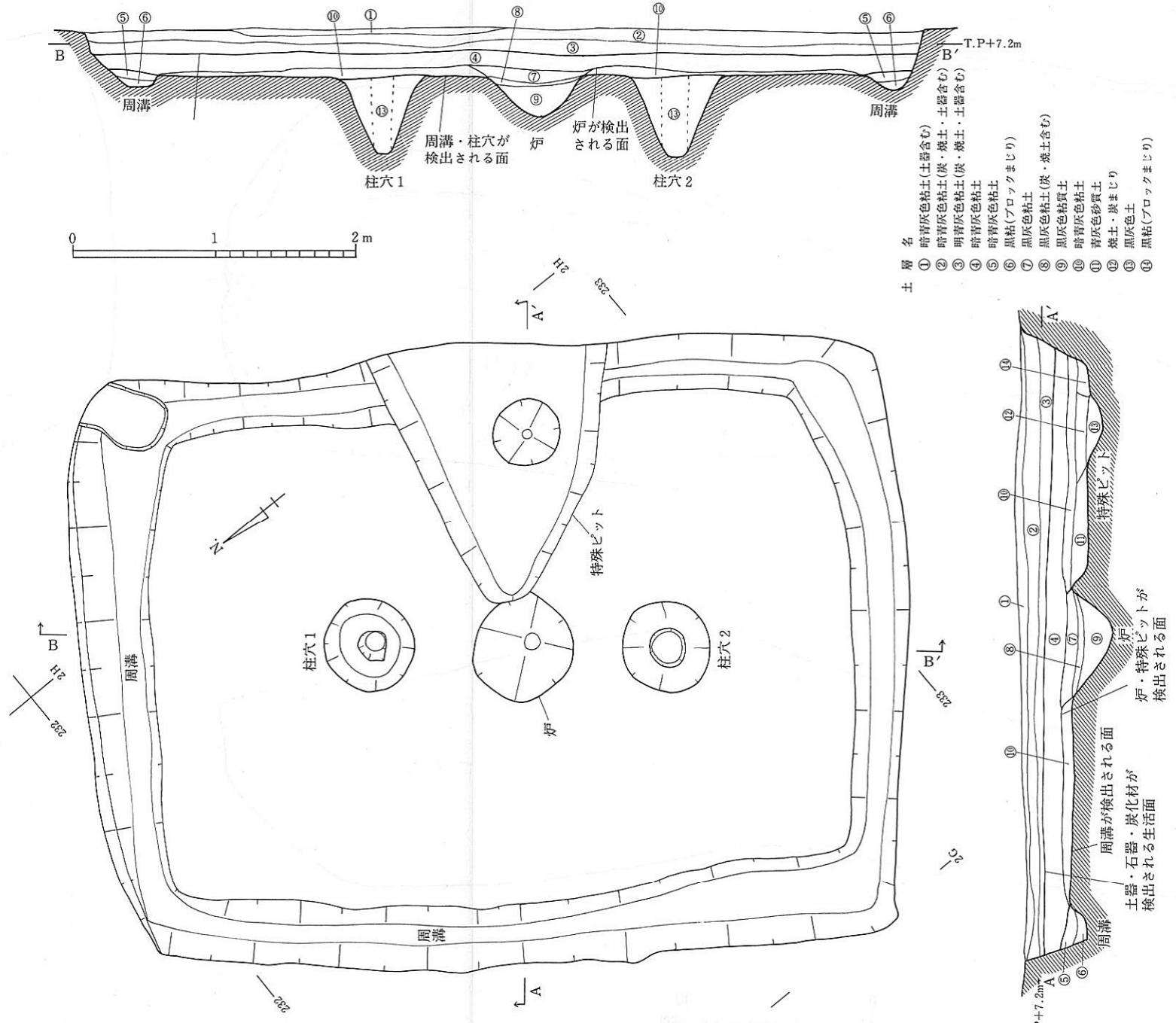


fig.47 弥生後期遺構面 I S B0901遺構平面図及び土層断面図 (1/40)

第9節 弥生後期遺構面II

弥生後期遺構面Iと同様、第11層（緑灰色シルト）上面を遺構面とする。遺構面の高さは北へ行くに従って低くなる。南端でT.P.+7.0m、北端でT.P.+6.6mをはかる。検出した遺構は溝・ピット・堤・大溝・堅穴住居・土坑等である。集落に関連した遺構が中心となる。

A. 堅穴住居

S B 1001 (fig.52~61) No.214～No.215付近で検出された。住居はほぼ全容が検出されている。規模は東西7.3m、南北7.6mの円形プランを有する。まず住居内を覆っている包含層（黒色粘土）を除去して焼けた炭化材・焼土・炭・灰・土器片等を検出した。(fig.52) S B 1001を切る形でS D 0901、S D 0902を検出した。幅40～45cm、長3.8mの細長い小溝である。埋土は黒色粘土である。

遺物・炭化材等出土状況 (fig.53) 住居内の埋土は黒色粘土及び暗灰色粘土である。それらを除去すると中心から外に向かって放射状に広がる棒状の炭化材が住居全体に検出された。これらの炭化材は住居の上屋を構成する垂木材の一部と考えられるが、板状のものや横木を組み合わせた材もみられた。これらの多量の炭化材の出土によって本住居は火災住居であることが判明した。

炭化材等が検出されるレベルで多量の土器が検出された。出土した遺物は完形及びほぼ完形の弥生土器45個体、石製品2である。弥生土器の器種と数は甕6（台付甕1を含む）、器台7、鉢4、高杯15、壺12（台付壺3、ミニチュア無頸壺1、長頸壺2、把手付短頸壺1を含む）である。各器種は形態にバラエティを有しており、いくつかのタイプに分類することができる。最も多量に土器が検出された北群は合計28点みられ、全出土土器の約2/3がここに集中していた。東群では3個体、南群では12個体、西群では3個体の土器が各々出土している。北群の28個体の土器の出土状況についてはスペースを考えれば平面的には配置しえない。土器は部分的に器台にのせられたりしていたであろうが、木製の棚状施設の存在を考えたい。器台②の上には甕①が乗っていたであろうし、器台⑥、高杯⑨、壺⑭は口縁部を西に向けて横倒しになっていた。高杯⑧も同じ方向に倒れているが、その上に甕⑤が重なっている。高杯⑦、台付壺⑩、高杯⑪、鉢⑬は直立状態でつぶれていた。高杯⑯と⑰は並んでいた様である。長頸壺⑧と高杯⑫は口縁部を北に向けている。台付壺⑩は口縁部を西に向けていた。器台⑩と⑫は上から押しつぶされた状態であった。高杯⑨の口縁部の破片は長頸壺⑯のところまで飛んでいた。高杯⑭の周辺にみられる炭化材は棒状のものではなく板状のものである。器台⑩の上には、ミニチュアの無頸壺が乗せられていたのであろう。南群では高杯⑩と⑪が並んで検出された。器台⑩の上には甕⑩が乗せられていたであろうし、器台⑭の上には甕⑩が乗せられていたであろう。台付甕⑪の下になっている炭化材は板状のものである。磨石は定位置であるし、台石も動いていないであろう。

土器や石製品の検出は住居中央部ではあまり見られず壁際に多くみられる。特に北群では28個

体の土器の出土をみた。また板材等の検出から棚状施設の存在を考えたい。これらのことから北群は食器置場の可能性が高い。

住居の構造 (fig.54)

多量の弥生土器、石製品、炭化材等が検出される面は当時の生活面に近いものであろう。炭化材を除去し、精査を進めると主柱穴・炉・周溝が検出された。5~6 cmの貼床は認められるであろう。住居の規模は南北7.6m、東西7.3mのほぼ円形で、深さは検出面から床面まで0.25~0.3 mをはかる。壁はほぼ垂直気味に掘り下げている。周溝は壁より0.2~0.6m離れて巡らされていた。周溝は幅0.5~0.9m、深さ0.15~0.2mの規模をはかり、断面はほぼ逆台形を呈する。周溝の埋土は暗青灰色粘土である。周溝内には土器片もみられるが、完形の土器群は周溝を埋めた後に置かれたものと考えられる。床面のレベルはT.P.+6.8mである。

主柱穴は4本で構成されていた。柱穴1は直径50cm、深さ60cmの規模を有し、径10cm、長30cmの柱根が遺存していた。埋土は黒灰色土である。柱穴2は直径65cm、深さ70cmの規模を有し、径10cm、長40cmの柱根が遺存していた。柱穴3は直径60cm、深さ75cmの規模を有するが柱根は遺存していない。柱穴4は直径55cm、深さ50cmの規模を有し、径10cm、長30cmの柱根が遺存していた。遺存していた柱根は火災によって上部が炭化していた。柱については燃えおちたのであろう。柱穴の埋土にも炭や焼土が混じっていた。柱穴3は一部周溝の内肩を切っている。各柱穴間の距離は3.3~3.4mをはかる。四ヶ所の柱穴を結ぶとほぼ正方形になる。その中央には炉がみられた。炉の深さは0.5mをはかり、規模は径1.1~1.2m、隅丸方形を呈している。埋土は黒灰色土で炭・灰・焼土が混じっていた。

なお本住居の壁際をめぐる周溝については、住居造営時の基礎工事用のものと理解しておきたい。すなわち周溝を掘ることによって住居内の湿気をぬいており、生活面においては周溝を埋めているのである。それらについては壁際に立てる壁板固定のための溝ではなかろう。

S B1001 (fig.55~61) 出土土器の器種は甕、器台、鉢、高杯、壺等であり、高杯と器台の多さが目をひく。さらに砥石と磨石も出土している。土器については観察表を参照されたい。

本住居の時期については、弥生後期前葉と考えられる。

S B1002 (fig.62, 63) No.222~224付近で検出された。住居の東辺のみが検出されており、西方の大部分は調査区外である。全容については判然としないが、ほぼ円形プランを有する堅穴住居であろう。現存する最大径は約6.5mである。住居内を覆っている黒色粘土を除去していくと、炭化材・焼土・炭・灰・土器等を検出した。 (fig.62)

遺物・炭化材等出土状況 住居内の埋土である黒色粘土を除去すると、棒状の炭化材が放射状に検出された。中には板状の炭化材もみられる。これらの炭化材の検出によって本住居は火災住居であることが判明した。炭化材等が検出されるレベルでいくつかの土器が出土している。出土した遺物は住居内的一部分の出土遺物であろうが、完形及びほぼ完形の弥生土器8個体である。弥生土器は全て火をうけており赤変黒化しているものもみられた。弥生土器の器種と数は甕3(小

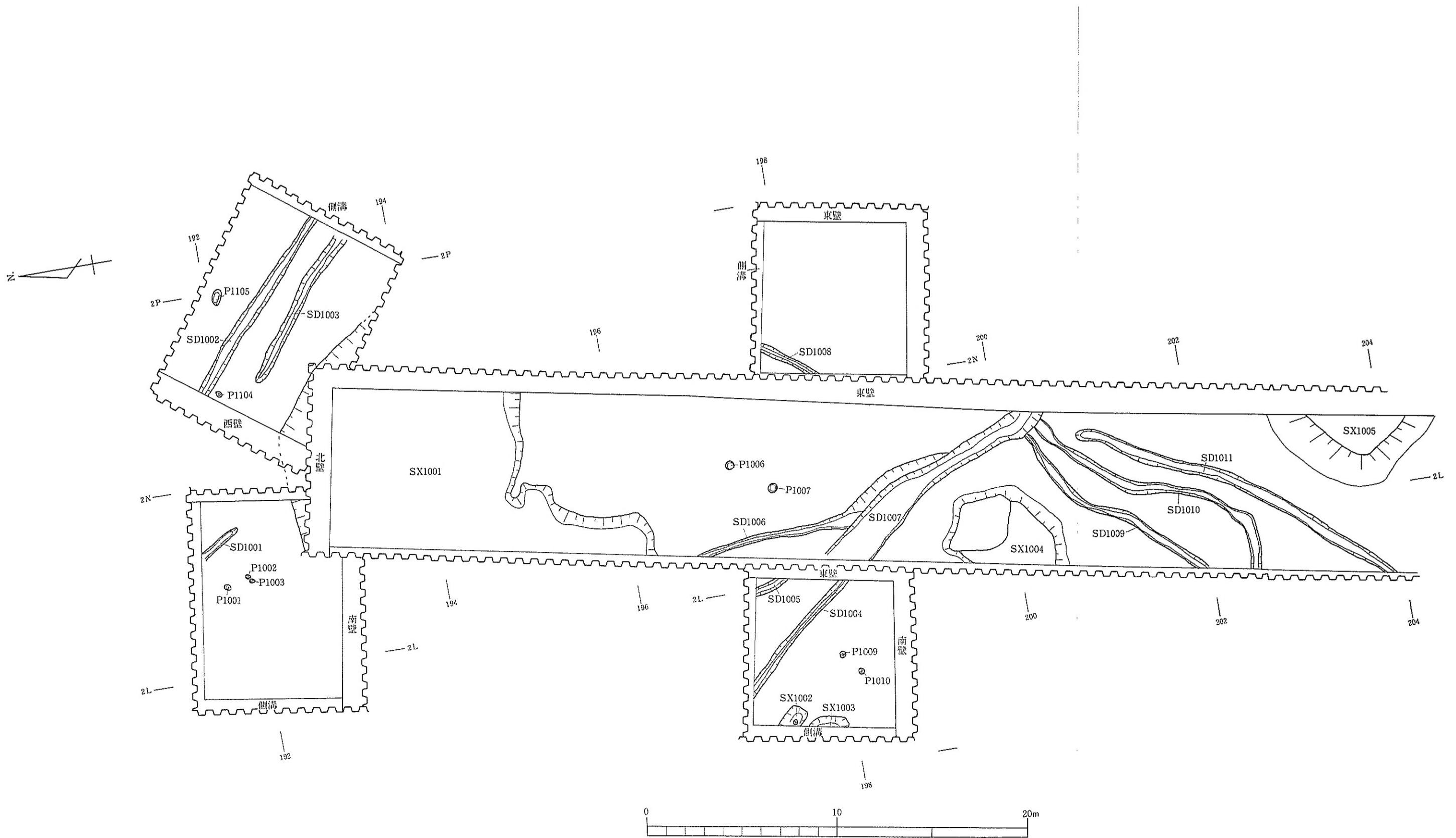


fig.48 弥生後期遺構面II① (1/200)

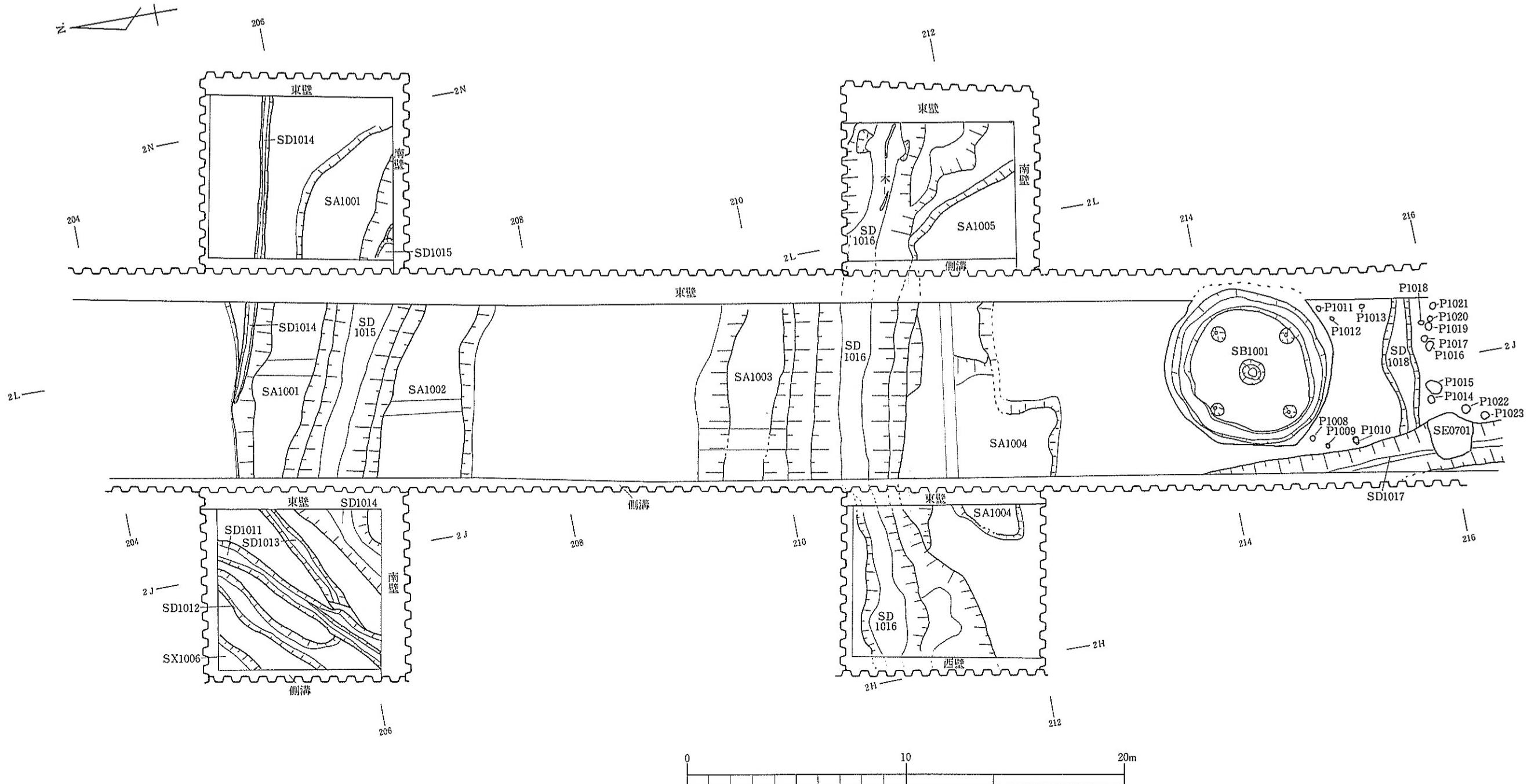


fig.49 弥生後期遺構面II② (1/200)

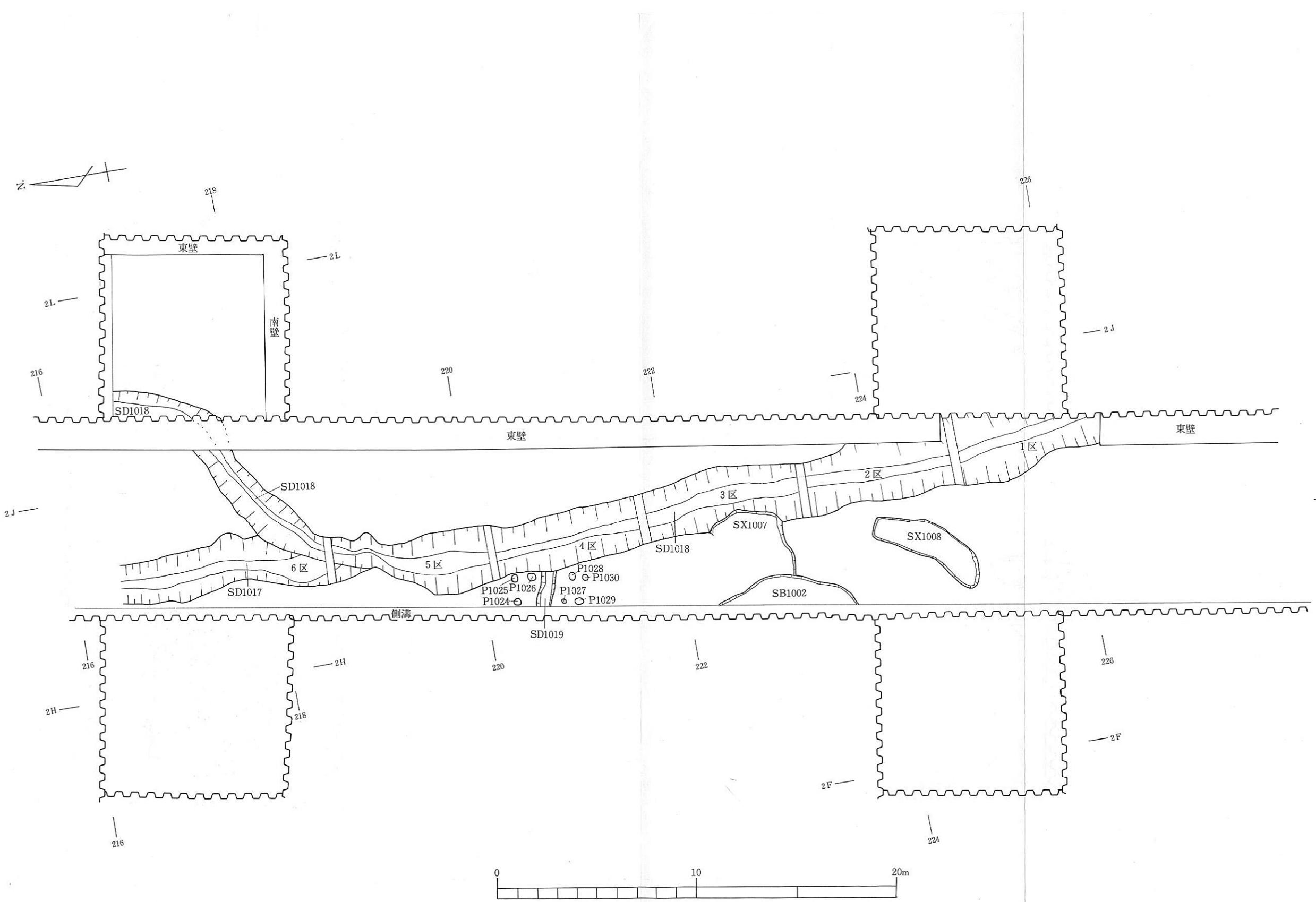


fig.50 弥生後期遺構面II③ (1/200)

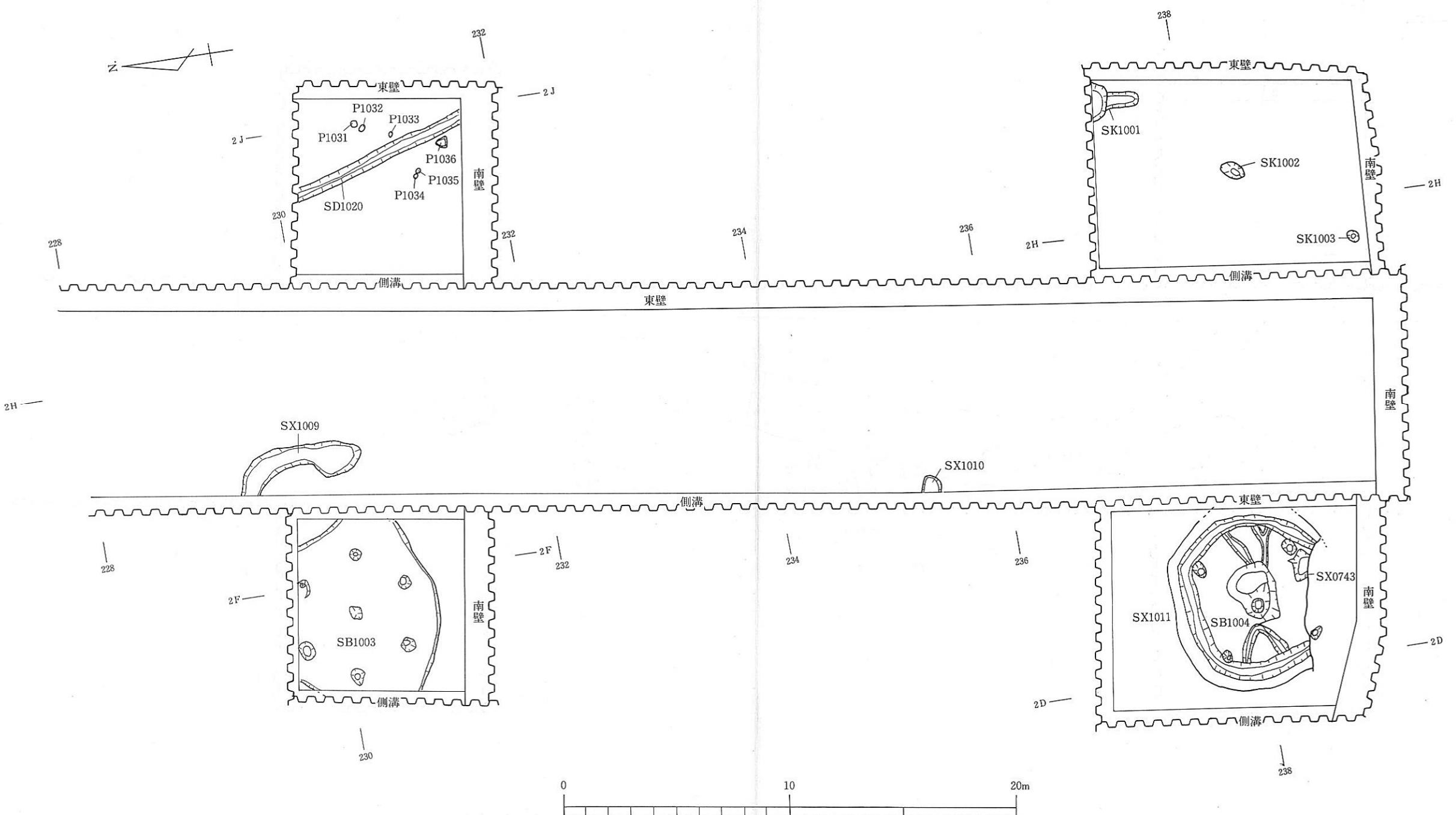


fig.51 弥生後期遺構面II④ (1/200)

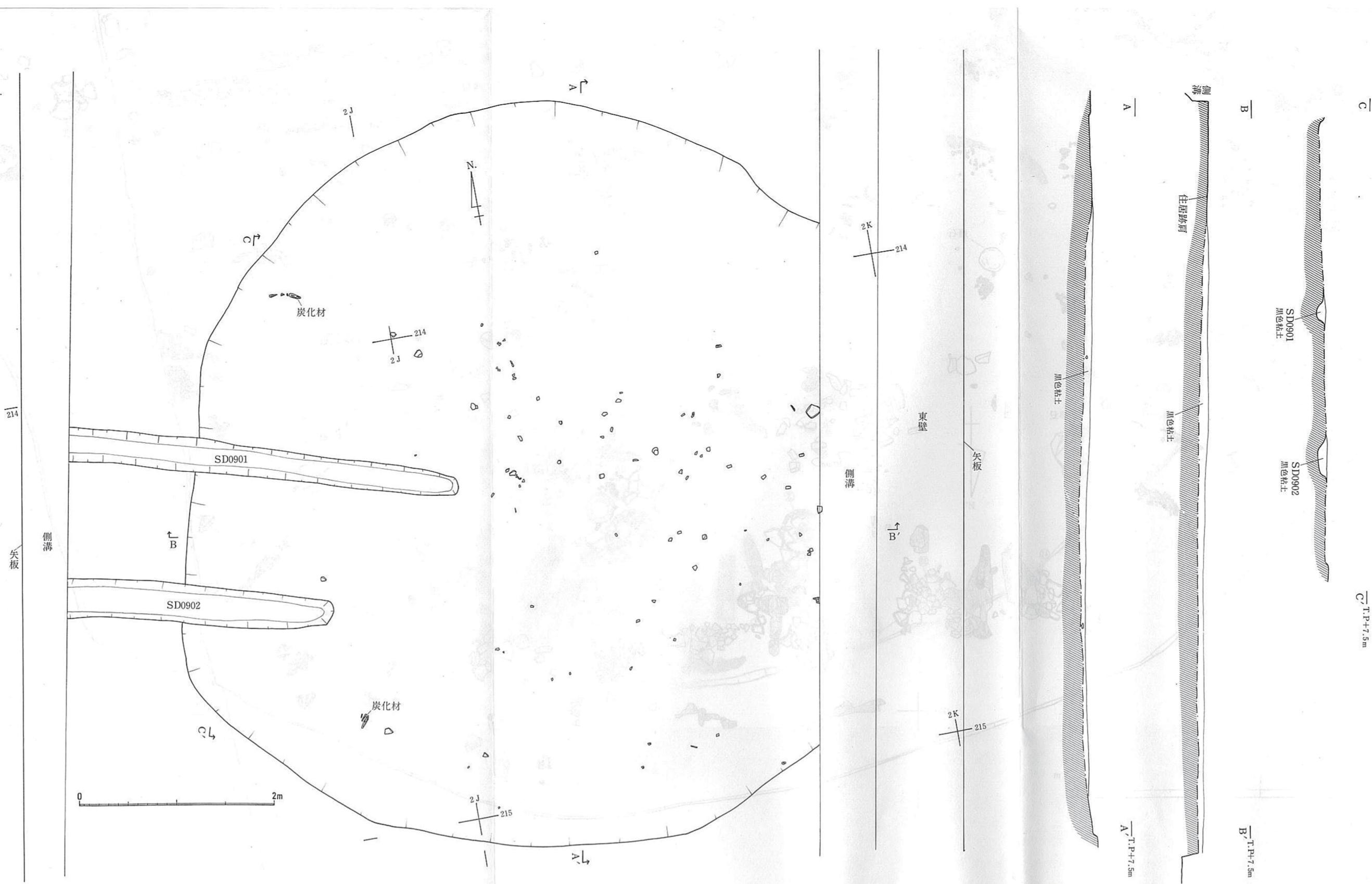


fig.52 弥生後期遺構面II S B 1001上層遺物出土状況平面図及び断面図 (1/40)

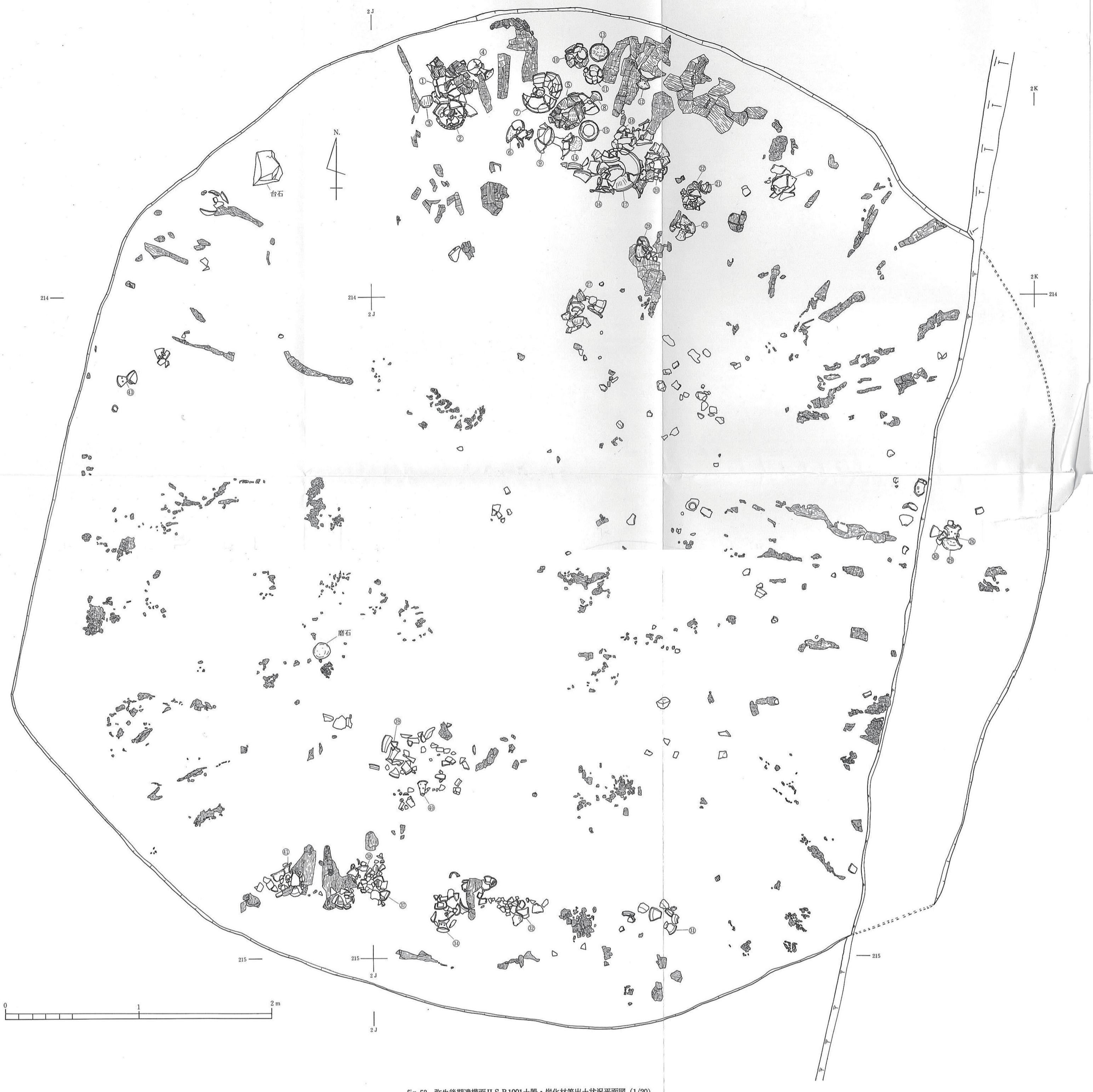


fig.53 弥生後期遺構面II S B1001土器・炭化材等出土状況平面図 (1/20)

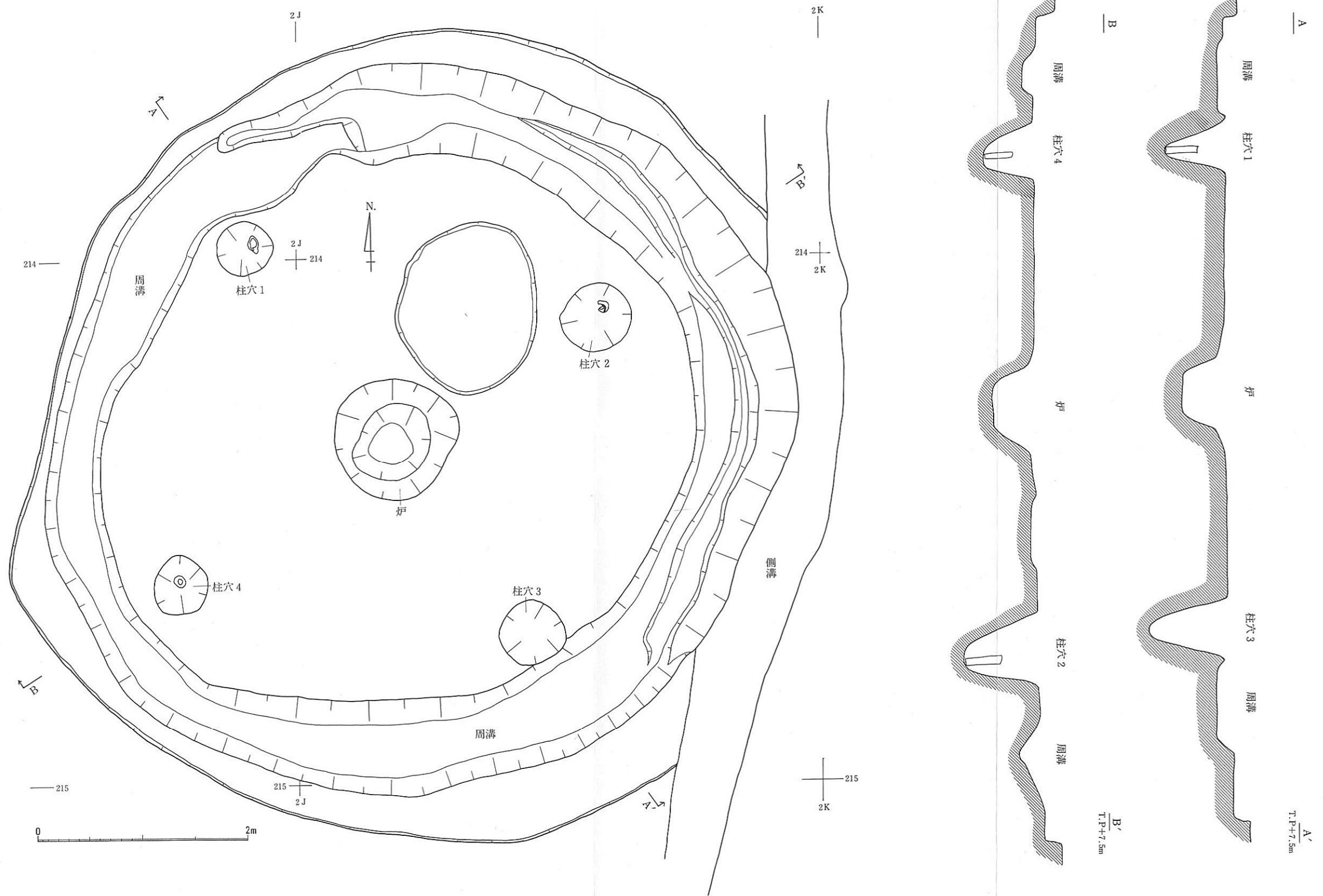


fig.54 弥生後期遺構面II S B1001掘り上り平面図及び断面図 (S=1/40)

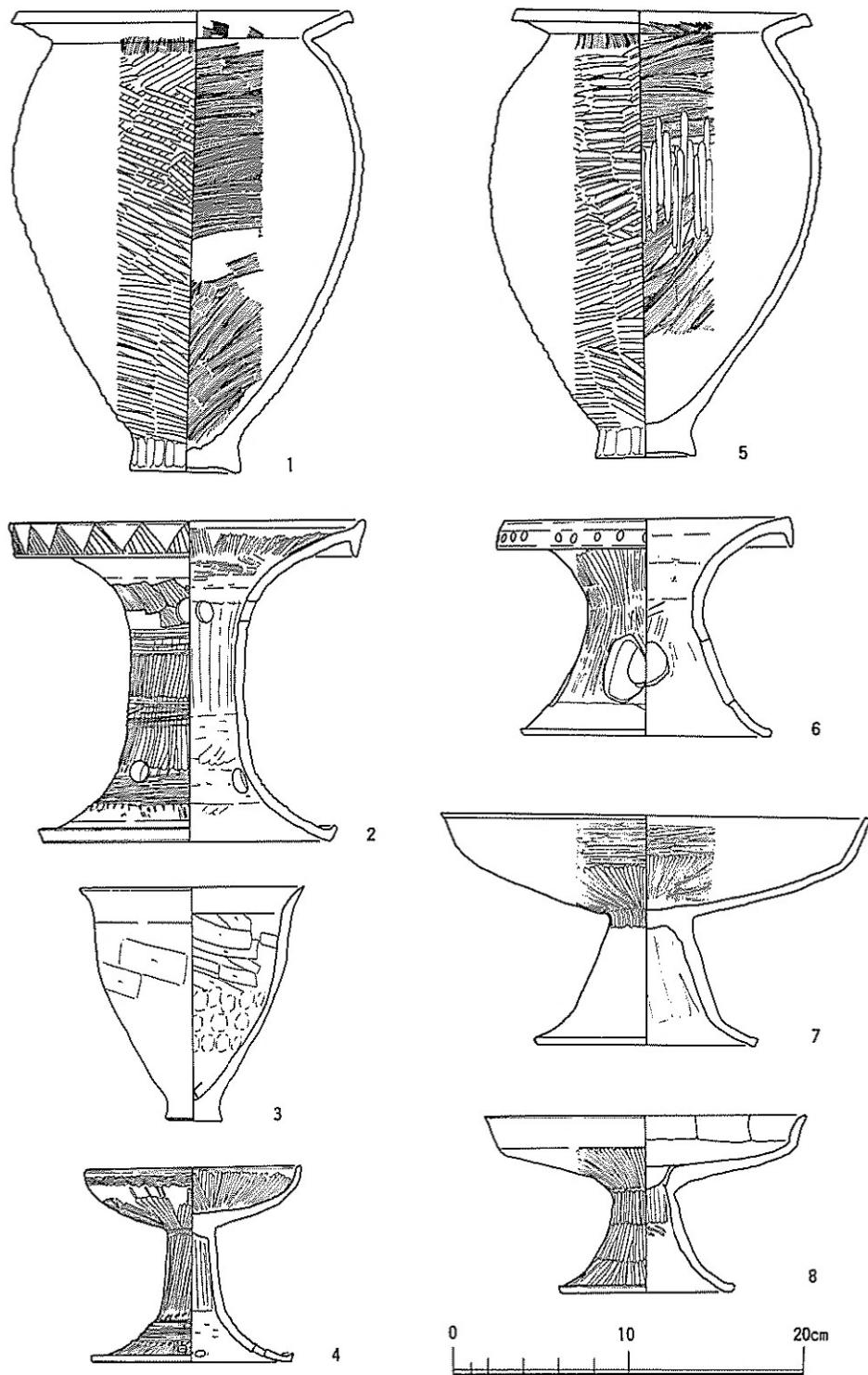


fig.55 弥生後期遺構面II S B 1001出土遺物① 1/4

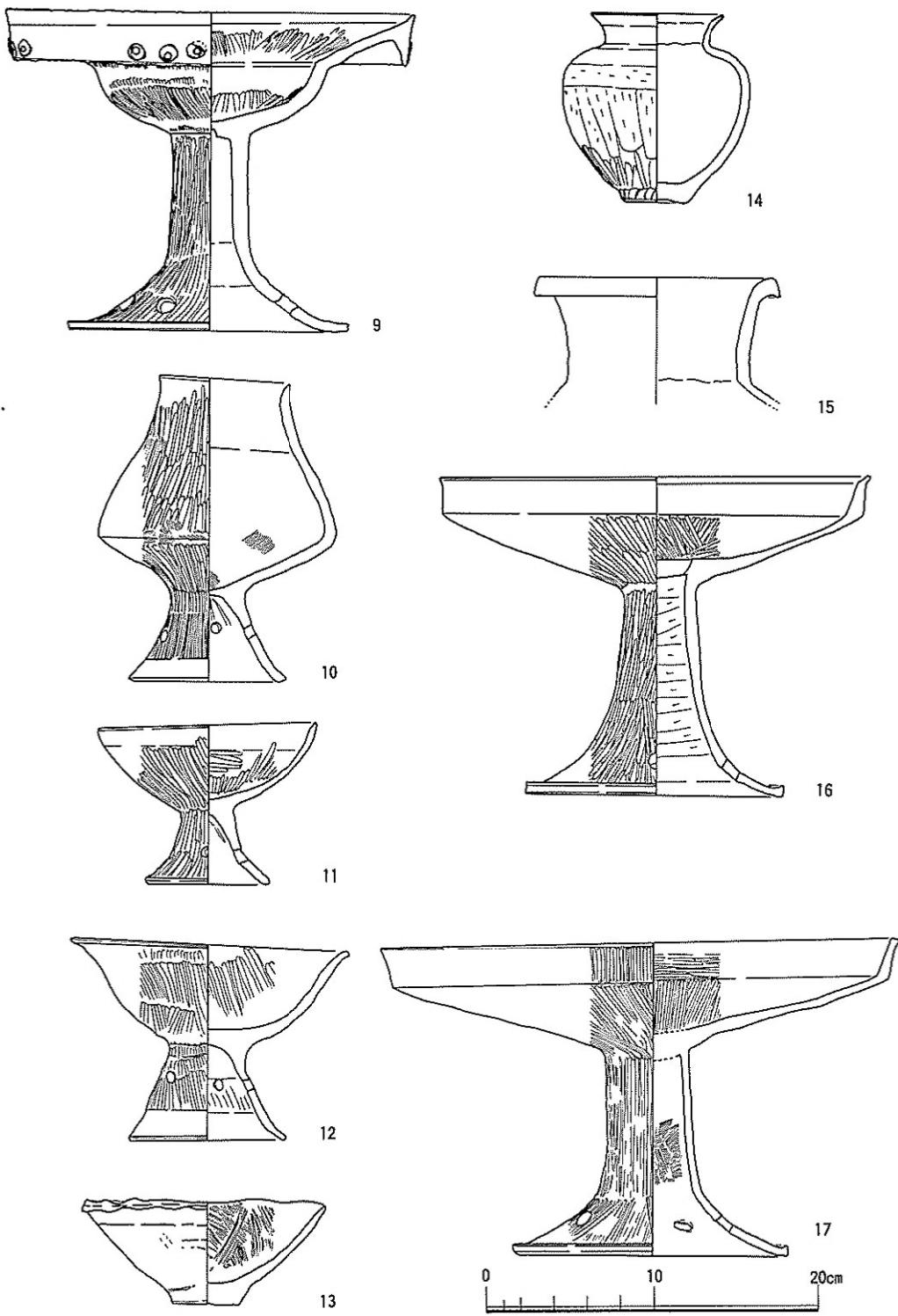


fig.56 弥生後期遺構面II S B 1001出土遺物② 1/4

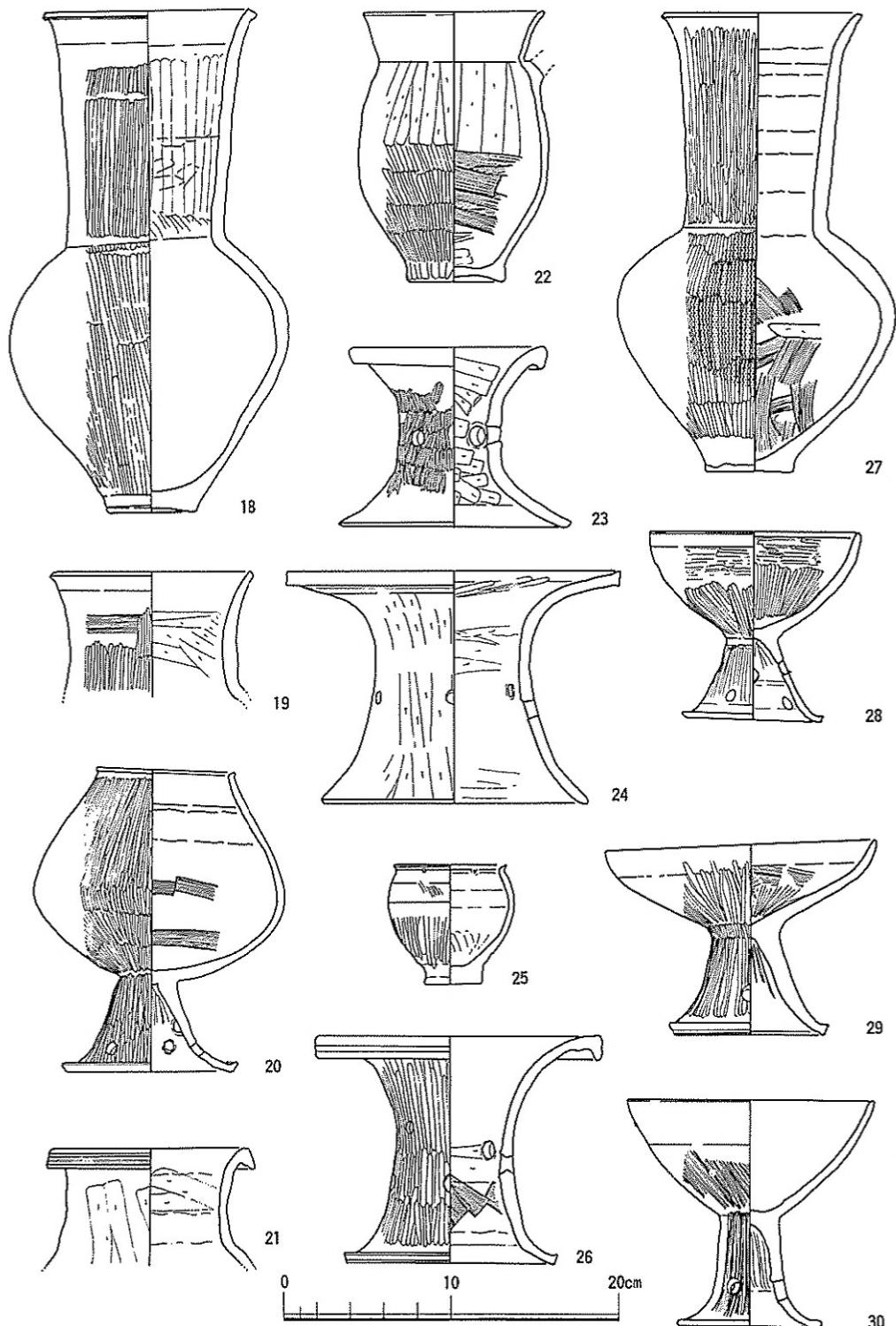


fig.57 弥生後期遺構面II S B 1001出土遺物③ 1/4

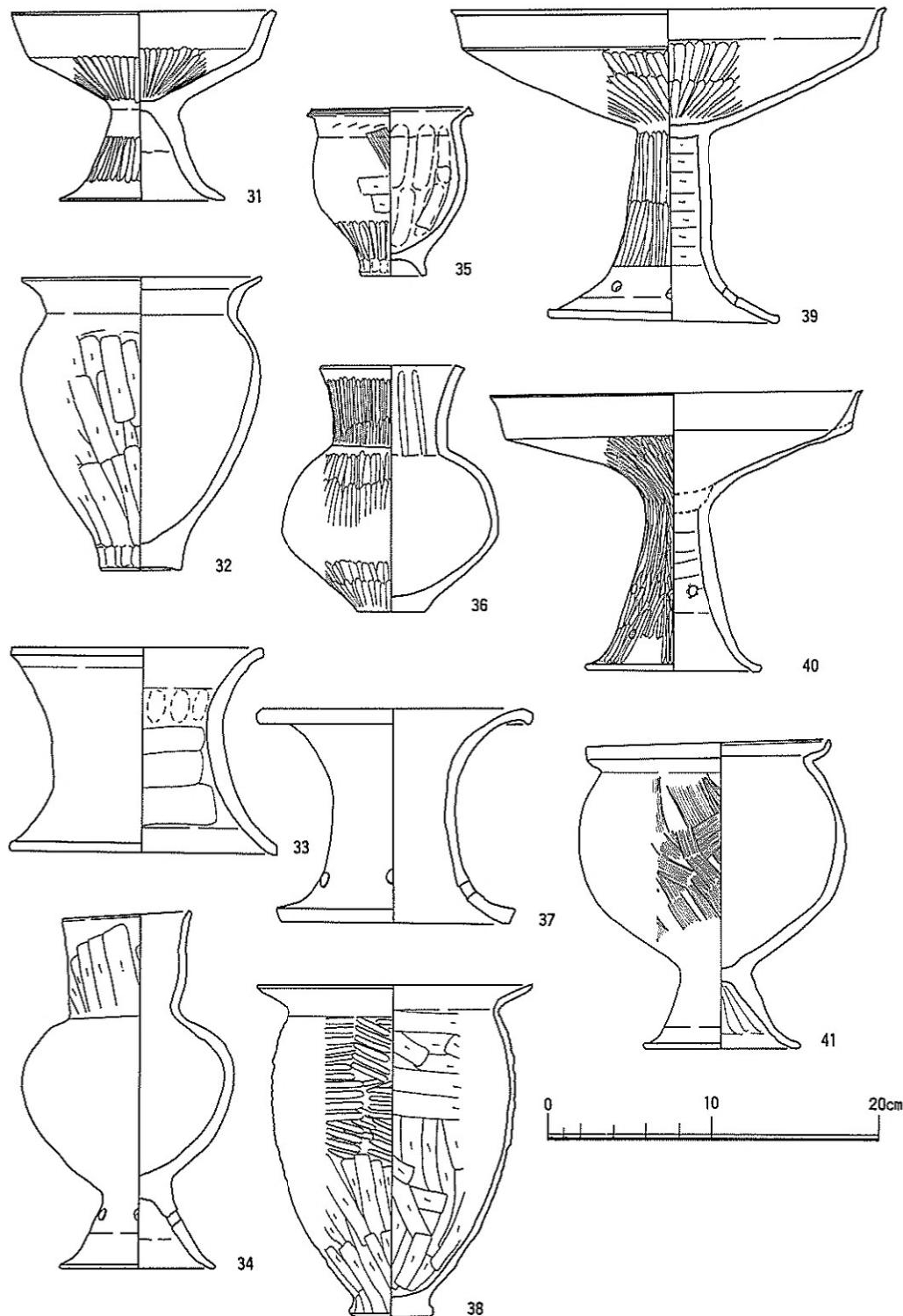


fig.58 弥生後期遺構面II S B 1001出土遺物④ 1/4

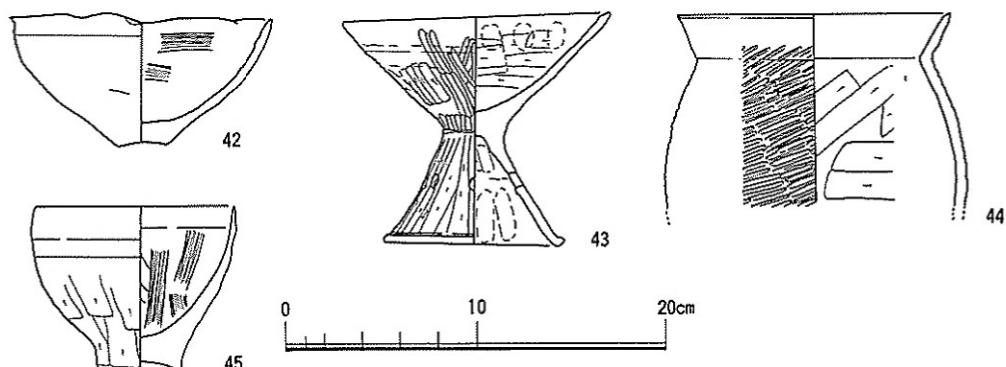


fig.59 弥生後期遺構面II S B1001出土遺物⑤ S=1/4

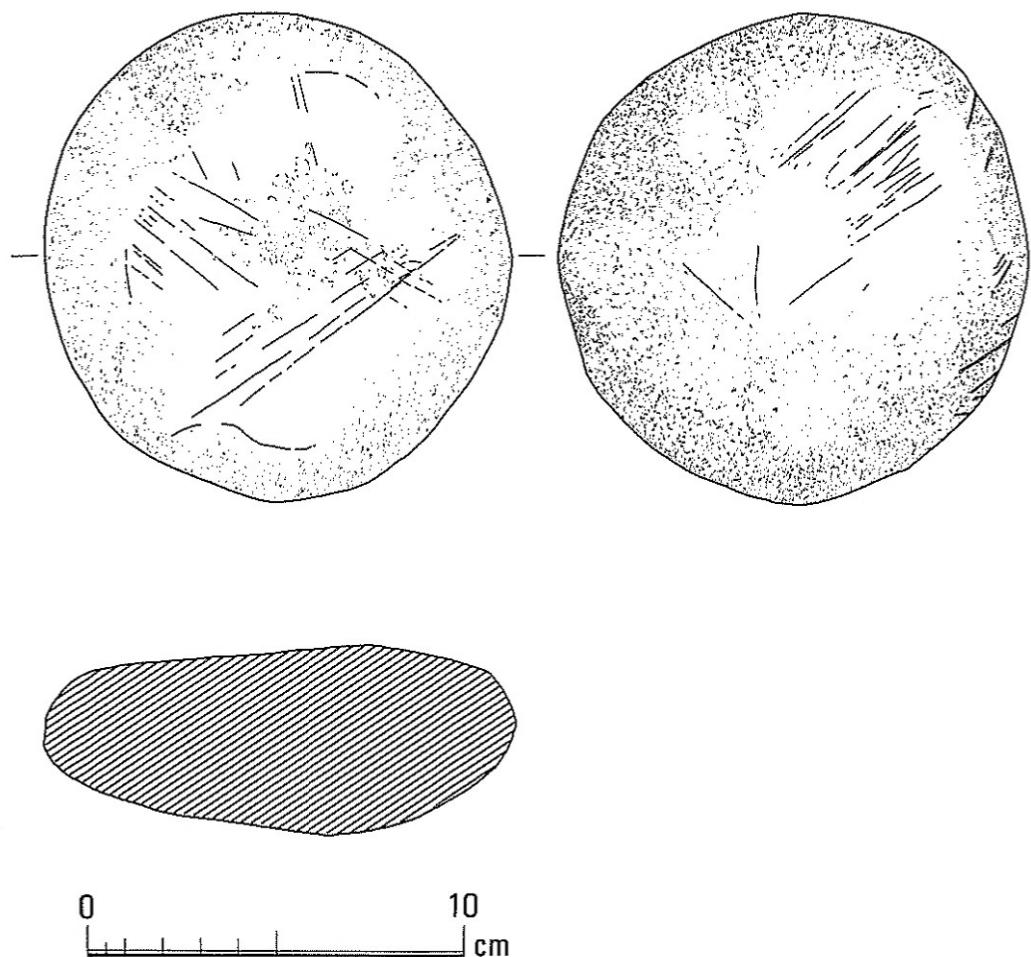


fig.60 弥生後期遺構面II S B1001出土遺物⑥ S=1/2

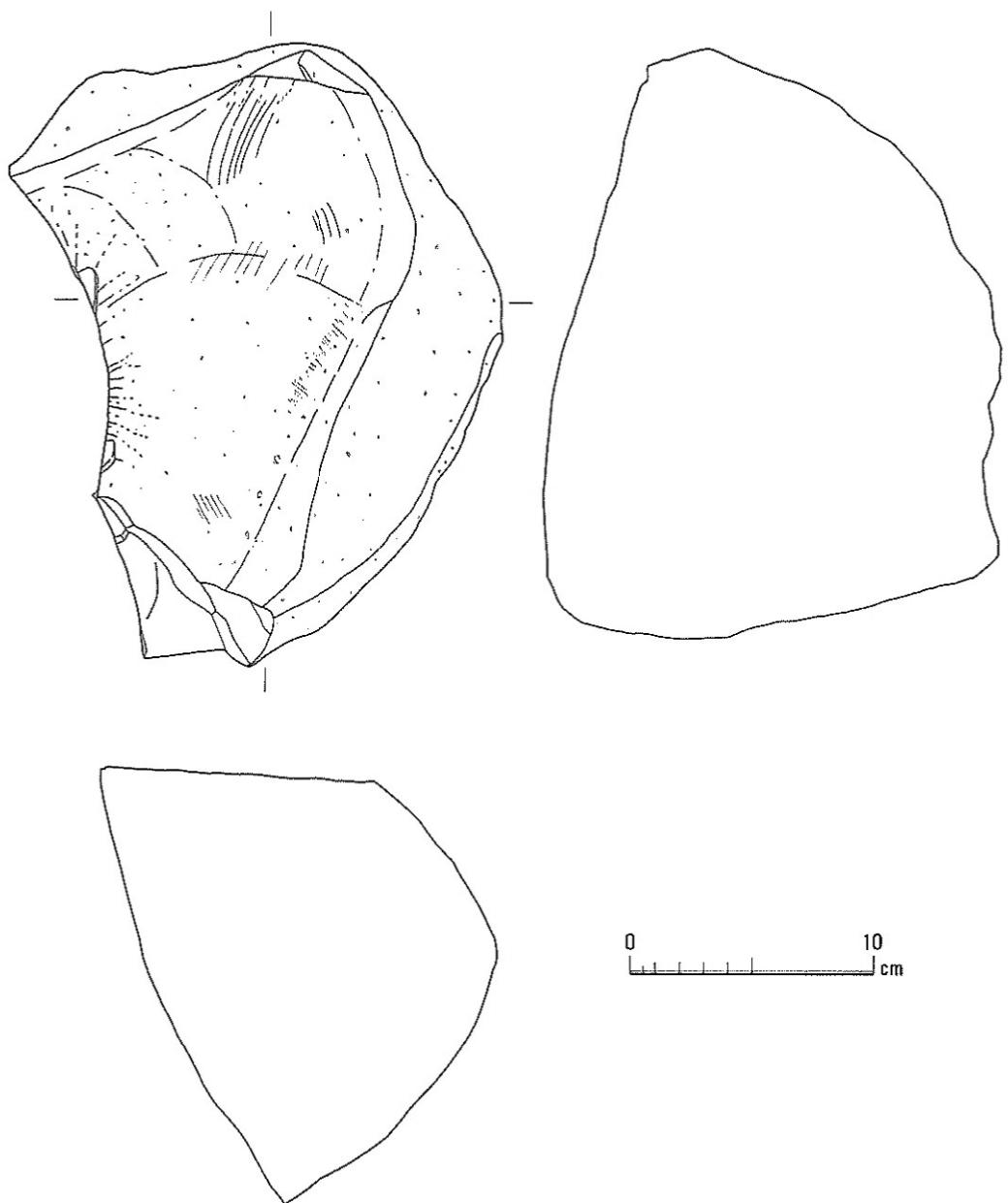


fig.61 弥生後期遺構面II S B 1001出土遺物⑦ S=1/3

形甕を含む)、器台1、高杯3、鉢1である。各土器は住居内の南東部に集中していた。鉢⑦、高杯⑤、⑧はほぼ並んで検出された。器台④、甕②は北に向かって倒れていた。やはり本住居でも高杯が3個体出土しており、数が多い。

住居の構造 (fig.63)

弥生土器や炭化材が検出される面は、生活面であり、T.P.+6.9m前後である。炭化材を除去し精査を進めると壁から0.3m離れて周溝が巡らされていた。周溝は巾0.4~0.5m、深さ0.1~0.15mの規模をはかり、断面は逆台形を呈している。周溝の埋土は黒灰色土である。東南部で出土した完形の弥生土器群は周溝を埋めた後に置かれていたものと考えられる。床面のレベルはT.P.+6.9mである。主柱穴や炉等は検出されなかったが、中央で周溝を切る形で落ち込みが検出されている。落ち込み内の埋土は黒灰色土であり、若干の土器が含まれていた。

また本住居の壁際をめぐる周溝についてはS B1001と同様、基礎工事用のものと理解しておきたい。

本住居は東側の一部を検出しただけであったが、復元すれば直径約8m前後になる。さらに出土土器も増えるであろうし、内部構造も明確になるであろう。

S B1002 (fig.63) 出土土器の器種は甕・器台・高杯・鉢等であり、壺がない。高杯の多いのが目をひく。石製品については出土していない。土器については観察表を参照されい。

本住居の時期についてはS B1001同様、弥生後期前葉と考えられる。

S B1003 (fig.64, 65) No.229~231で検出された。住居は北肩部と西肩部が調査区外である。規模については明確ではないが、東西7.8m、南北6m以上をはかる。プランは円形ではなく主柱穴の配置を考えれば六角形になるであろう。本住居は火災住居ではないので焼土、炭も少なかった。住居内上層にみられる黒色粘土を除去すると住居のはば中央で黒灰色粘質土の落ちがみられた。埋土内には酸化した弥生土器や炭が含まれていた。これは炉であり、直径0.6m、深さ0.35mの隅丸方形を呈していた。炉の断面はU字形を呈している。炉が検出される面では主柱穴がみられない。主柱穴が検出される面は15~20cm下のベース面であり、黒灰色土により貼床が為されていたのであろう。

遺物が検出される面は炉の周辺と柱穴3の東側にみられた。T.P.+7.0m前後である。

貼床を形成する黒灰色土を除去していくと住居のベース面になる。ベース面の高さはT.P.+6.8~6.9mである。ベース面の精査を進めると炉の下部・主柱穴が検出され、周溝は見られない。住居の肩からベース面までの深さは、約0.2mである。壁は垂直気味に立ち上がっている。

主柱穴は炉を中心にして6本で構成されていた。柱穴1は、直径50cm、深さ30cmで隅丸方形を呈する。柱穴2は一辺50~60cm、深さ50cmで方形を呈している。柱穴3は直径65cm、短径45cm、深さ45cmの規模をはかり橢円形を呈している。柱穴4は直径65cm、深さ65cmの規模で円形を呈している。柱穴5は長径65cm、短径50cm、深さ40cmの規模を有し橢円形を呈している。柱穴6は長径60cm、短径55cm、深さ45cmの規模をはかり、偏円形を呈している。柱根が遺存している

ものは見られない。柱穴の埋土は黒褐色粘土であり、断面の形態についてはU字形を呈している。各柱穴間の距離は2.5~2.8mをはかり、6ヵ所の柱穴を結ぶと正六角形になる。住居西側で下層の溝や土坑が検出されている。

本住居は住居全体が検出されていないが、そのプランは六角形になるであろう。復元すれば東西が7.4m、南北が7.0mになる。また、本住居は、火災住居ではないので土器の遺存が少なかった。内部構造については周溝は見られなかった。

S B1003 (fig.64) 出土土器の器種は壺、鉢、器台、甕等である。石器類もみられなかった。土器については観察表を参照されたい。

なお本住居の時期については出土土器より、弥生中期後葉頃と考えられる。本住居はS B1001等とは違う構造となっており、さらに古い構築時期であろう。

S B1004 (fig.66~71) No.237~No.239付近で検出された。住居はほぼ全容が検出されているが、古墳時代の遺構S X0743によって南端は切られている。規模は東西8.1m、南北6.0m以上のややの角ばり気味の円形プランを有する。まず住居内を覆っている暗青灰色粘土（炭まじり）を除去すると、焼けた炭化材・焼土・炭・灰・土器片等を検出した。(fig.67)

遺物・炭化材等検出状況 住居内の埋土は暗青灰色粘土及び暗青黒色粘土である。それらを除去すると外から中央に向かって伸びる棒状や板状の炭化材が住居全体に検出された。これらの炭化材は住居の上屋を構成する垂木材の一部や壁板材と考えられる。T①、T⑧、T⑨、T㉖、T㉗等は、棒状の垂木材の一部と考えられる。また住居東辺のT⑪~T⑯の板材は、長1.2~1.4m、巾0.15~0.4m、厚さ2~4cmの規模を有する。これらの板材は横一列に並んでおり、横木を組み合わせた痕跡が残っていた。これらの板材は壁板に使用されていたものが、火災によって内側に倒れたものと考えられる。住居北辺のT③、T④、T⑤や、西辺のT㉘、T㉙、T㉚等も同様な壁板材と思われる。またT⑩は長11m、巾3m、厚さ5cmの規模をはかり、板状になっている。これらの多量で良好な遺存状態である炭化材の検出によって本住居は火災住居であることが判明した。

炭化材等が検出されるレベルで数個体の土器が検出された。S B1001の様に良好な多量の土器は検出されなかつたが、P③は住居北西部で検出されたミニチュアの壺である。周辺には火災による強い熱のために、石製品が割れて周辺に散らばっていた。P⑥は住居北部で検出されたミニチュアの壺である。P⑤は住居東部で検出された高杯脚部である。P⑪は住居南西部で検出された高杯脚部である。杯部は欠損していた。炭化材等の検出面のレベルは、T.P.+7.15mである。

住居の構造 (fig.69)

多量の炭化材、弥生土器等が検出される面は当時の生活面に近いものであろう。炭化材を除去し精査を進めると、主柱穴・炉・周溝・小溝が検出された。若干の貼床は認められるであろう。住居の規模は東西7.6m、南北6.0m以上のやや角ばった円形で、深さは肩部から床面まで約0.2mをはかる。壁はやや傾斜気味に掘り下げている。周溝は壁より0.2~0.6m離れて巡らされてい

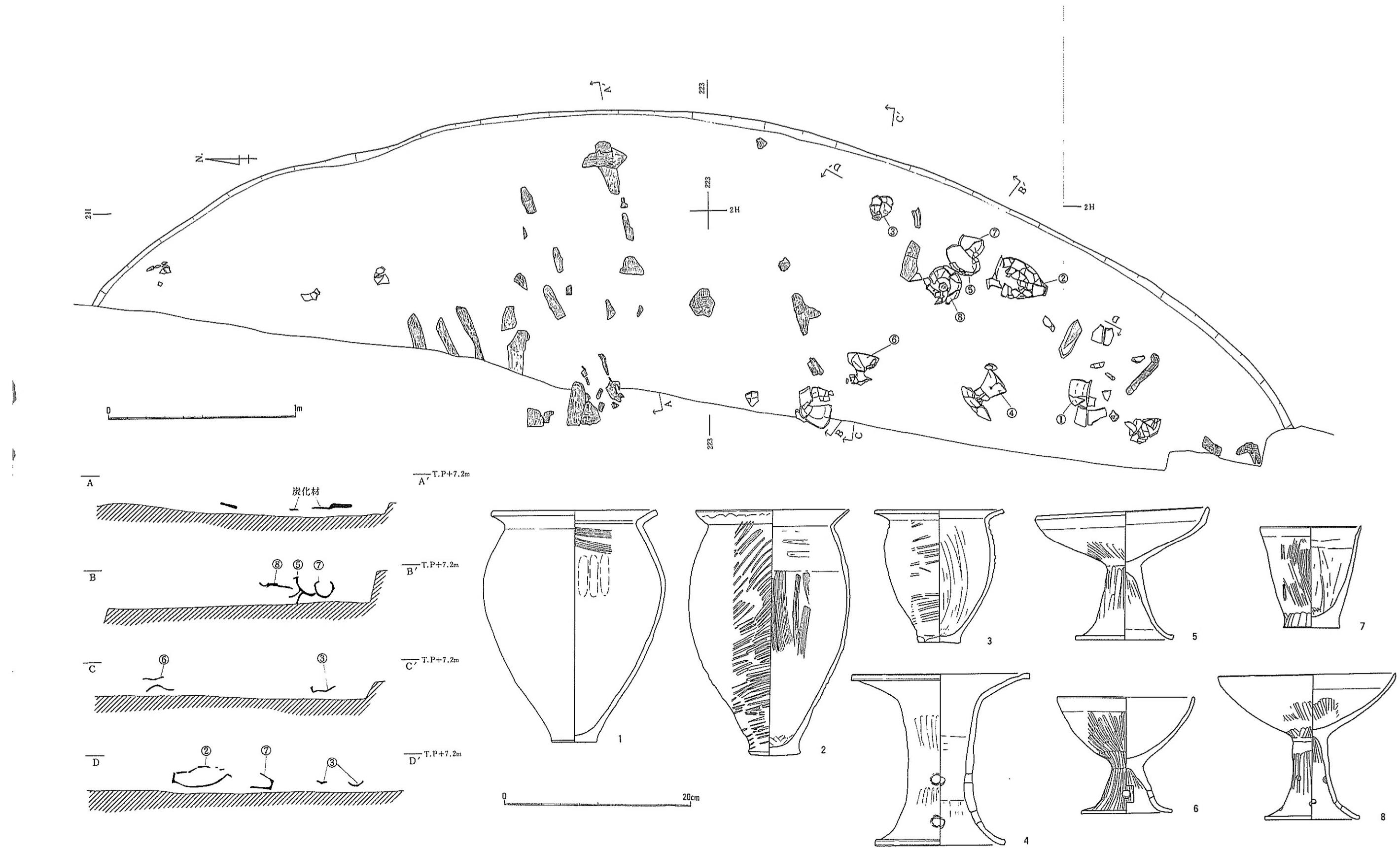


fig.62 弥生後期遺構面II S B1002遺物出土状況平面図及び断面図(1/20) 出土土器実測図(1/4)

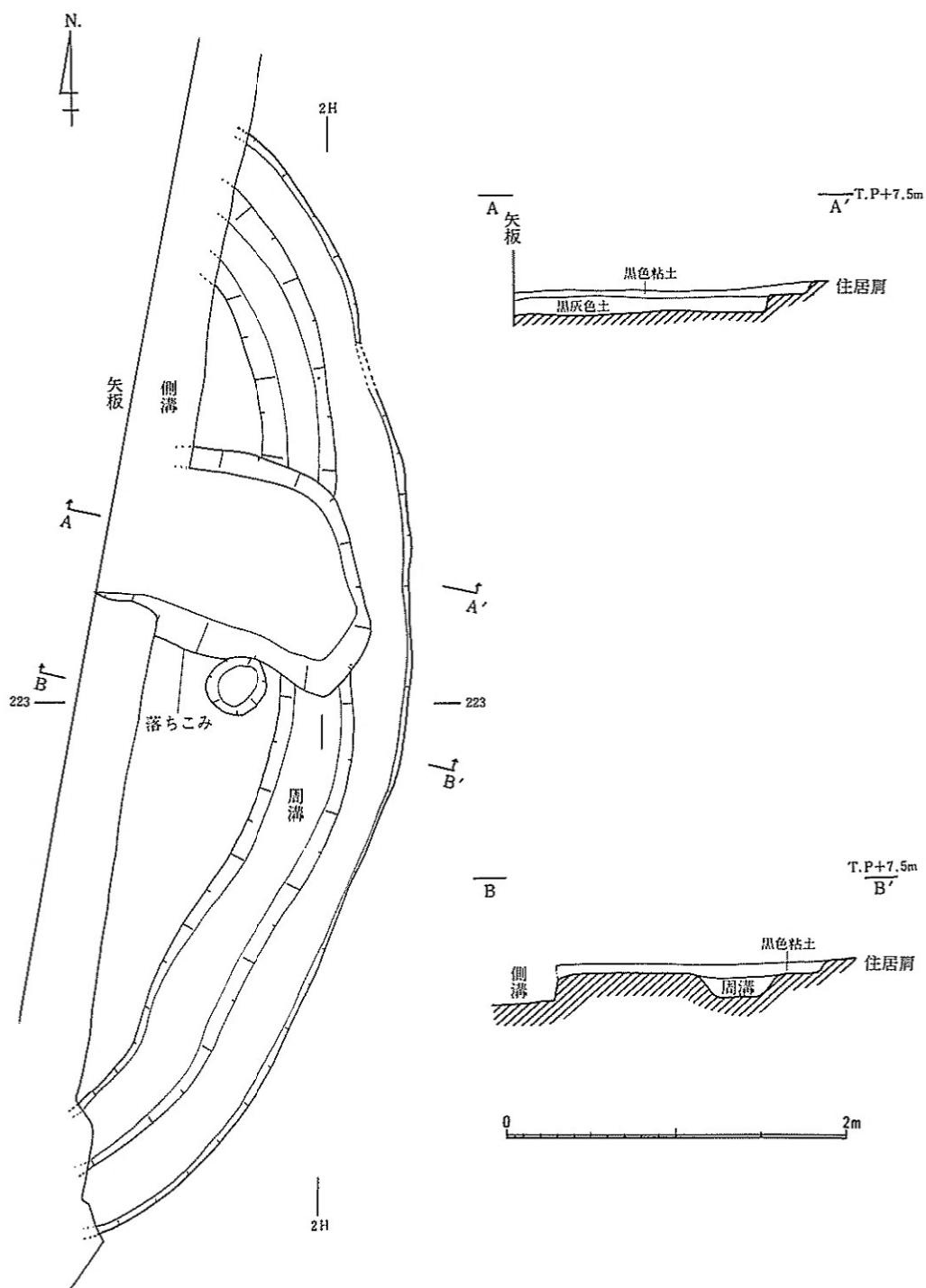


fig.63 弥生後期遺構面II S B 1002掘り上り平面図及び断面図 (1/40)

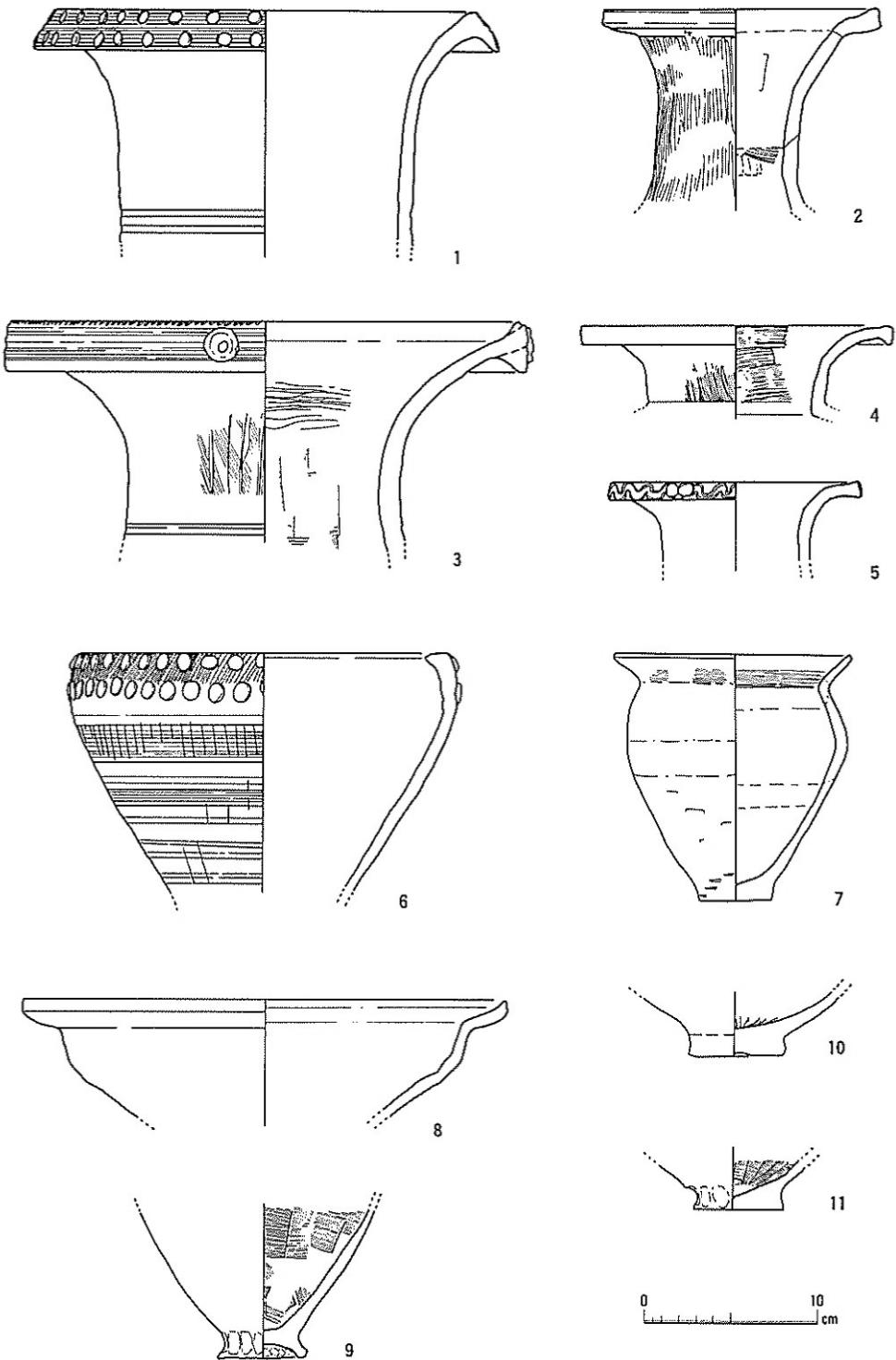


fig.64 弥生後期遺構面II S B 1003出土土器 S=1/4

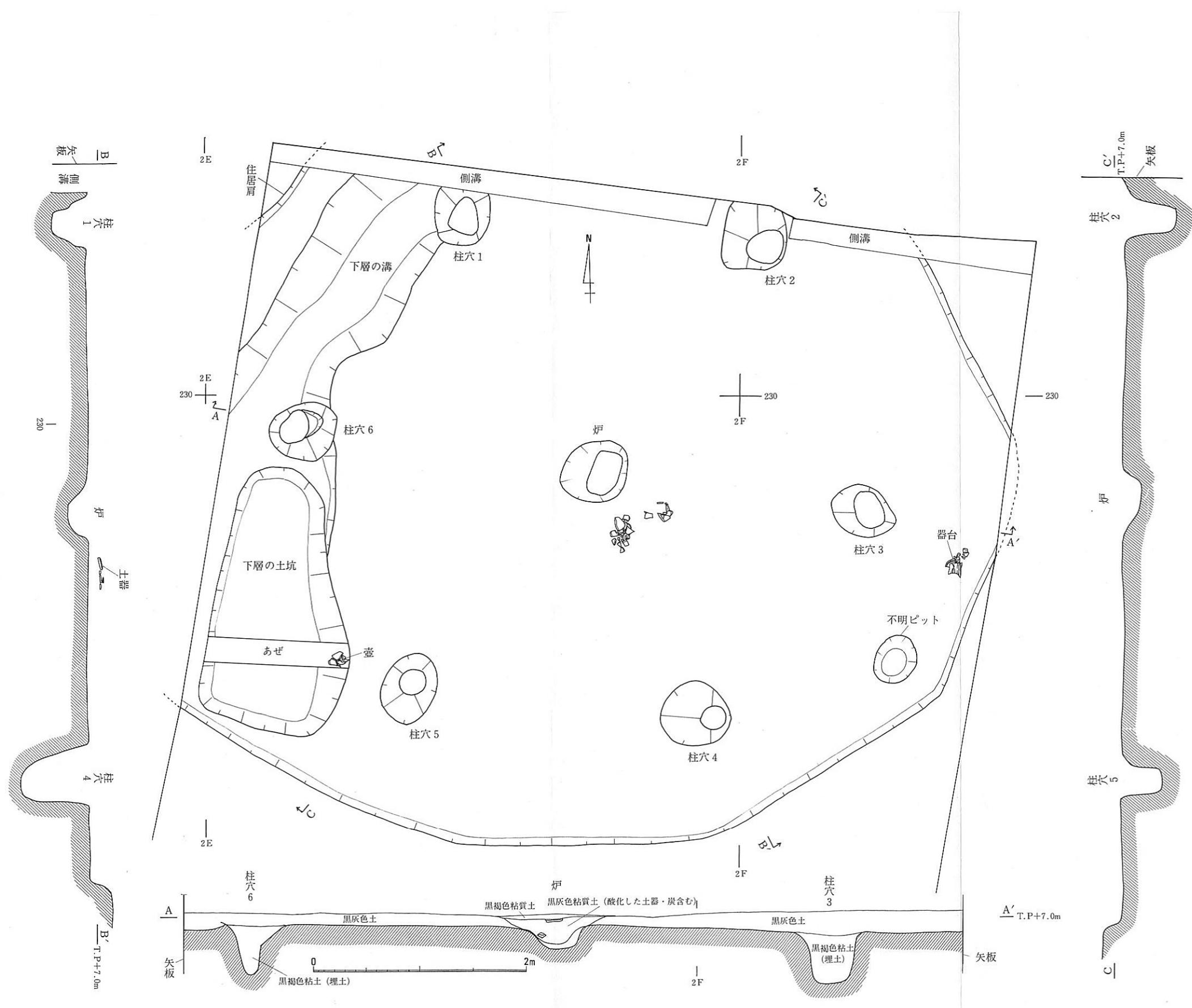


fig.65 弥生後期遺構面II S B 1003平面図及び断面図 (1/40)

た。周溝は巾上面で0.5~0.8m、深さ0.15mの規模をはかり、断面はほぼ逆台形を呈する。周溝の埋土は青灰色粘質土（黒粘混じり）である。周溝を埋めて弥生土器や炭化材がおかれている。床面のレベルはT.P.+7.0mである。

主柱穴はS B1001同様、4本で構成されていた。柱穴1は一辺50cm、深さ50cmの規模を有し、径10cm、長20cmの柱根が遺存していた。柱根は西に偏っていた。柱穴2は長径65cm、短径45cmの橢円形で、柱痕は径30cmをはかる。深さは65cmをはかる。柱穴3は長辺60cm、短辺45cmの長方形で、約15cmの柱痕がみられる。深さは60cmをはかる。柱穴4は長径60cm、短径35cmの橢円形で深さは65cmをはかる。一部柱材の破片がみられた。柱穴1に遺存していた柱痕は火災によって上部が炭化していた。柱穴の埋土は黒灰色土であり、炭や焼土が混ざっていた。柱穴1や柱穴2は一部周溝の内肩を切っている。

各柱穴間の距離は3.8~4mをはかる。四ヵ所の柱穴を結ぶとほぼ正方形になる。その中央には炉がみられた。炉の規模は長径60cm、短径45cmをはかり、隅丸長方形を呈している。炉の東辺は土坑状になっており土器の破片が多量にみられた。炉で煮炊きをしてかきだした跡であろうか。土坑内の埋土は黒色粘土であり、炭・土器を含んでいた。また炉は深さ45cmをはかり、埋土は灰黒色粘土であり炭化木も含んでおり、断面はV字状になっている。さらに炉から周溝に伸びるものとして小溝1~4がある。小溝は巾20~25cmで、長1.7~2.0mをはかり枝分かれしているものもみられる。埋土は青灰色粘質土（黒粘まじり）であり、深さ10cmをはかる。小溝は土坑及び周溝を切っている。排水用のものであろうか。

なお本住居の壁際をめぐる周溝については、S B1001同様住居造営時の基礎工事用のものと理解しておきたい。生活面においては、周溝を埋め、さらに床を貼っているのである。

S B1004は火災住居であったが、完形の弥生土器の出土が少なかった。必要な土器は運びだしたものであろうか。その反面炭化材は良好に遺存しており、垂木材以外に壁板材の存在が明確になった。

S B1004 (fig.66,70,71) 出土土器の器種は壺・甕・鉢・高杯・台付甕・台付碗・器台等であり、完形品が少ない。石製品は出土していないが、紡錘車が一点出土している。遺存していた土器にはほとんど火をうけた痕跡がみられた。土器については観察表を参照されたい。本住居の時期については、出土土器より弥生後期前葉と考えられ、S B1001と比較すれば興味深い。

B. 溝

S D1017・S D1018 S D1017はNo.214からNo.227にかけて検出された溝である。ほとんど南北に一直線状に伸びる溝である。ある程度埋まった段階でS D1018によって掘り直されている。巾は上面で2.5~2.8m、長50m以上の規模を有する。No.216付近で火災住居S B1001の焼土と灰をかきいれた痕跡が上層でみられた。S D1017の断面については、fig.107を参照されたい。断面の形態はU字形を呈し、深さは約80cmをはかる。埋土は上から①灰褐色粘質土、③暗青灰色粘

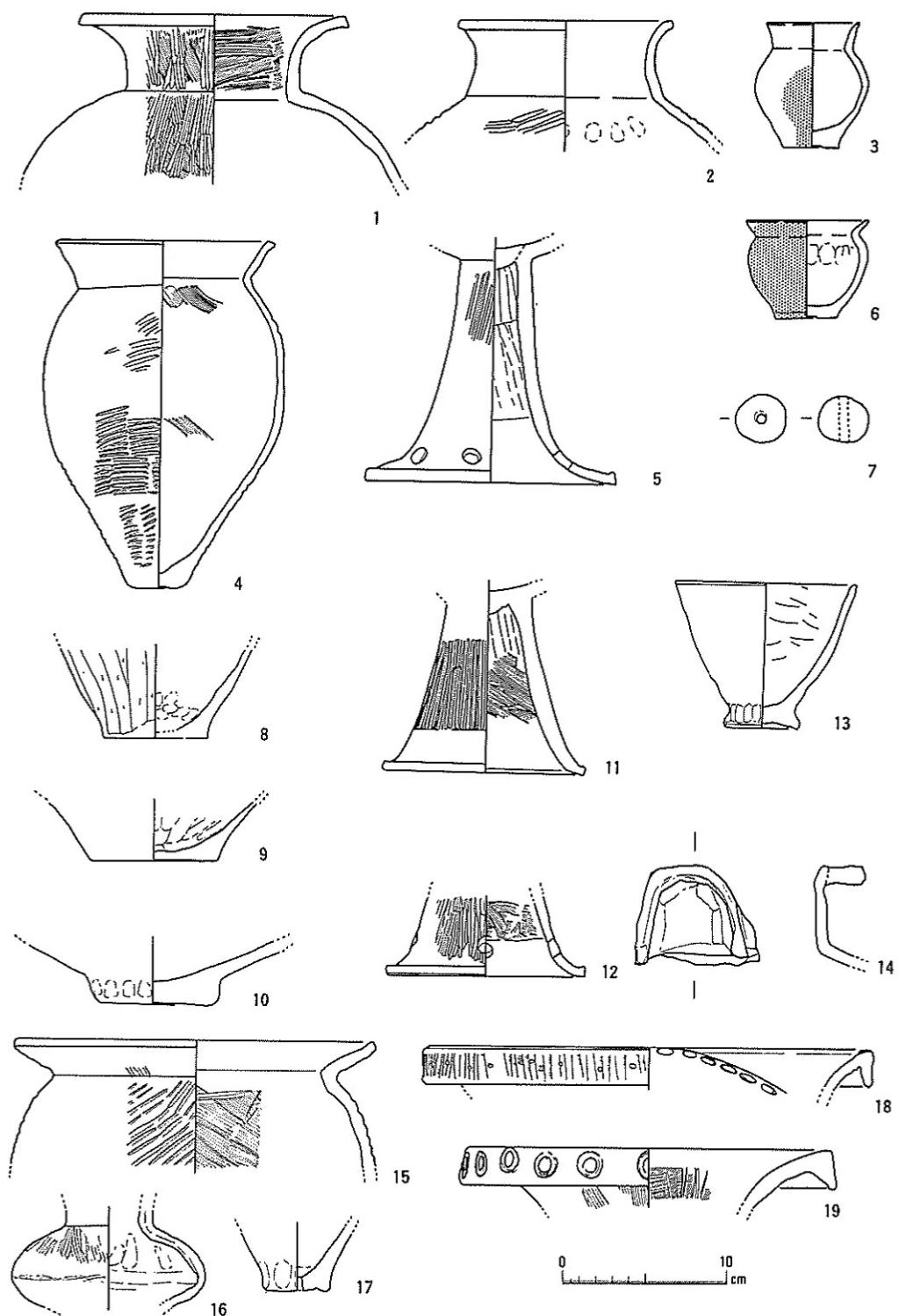


fig. 66 弥生後期遺構面II S B1004出土土器①



fig.67 弥生後期遺構面II S B1004土器・炭化材等出土状況平面図 (1/20)

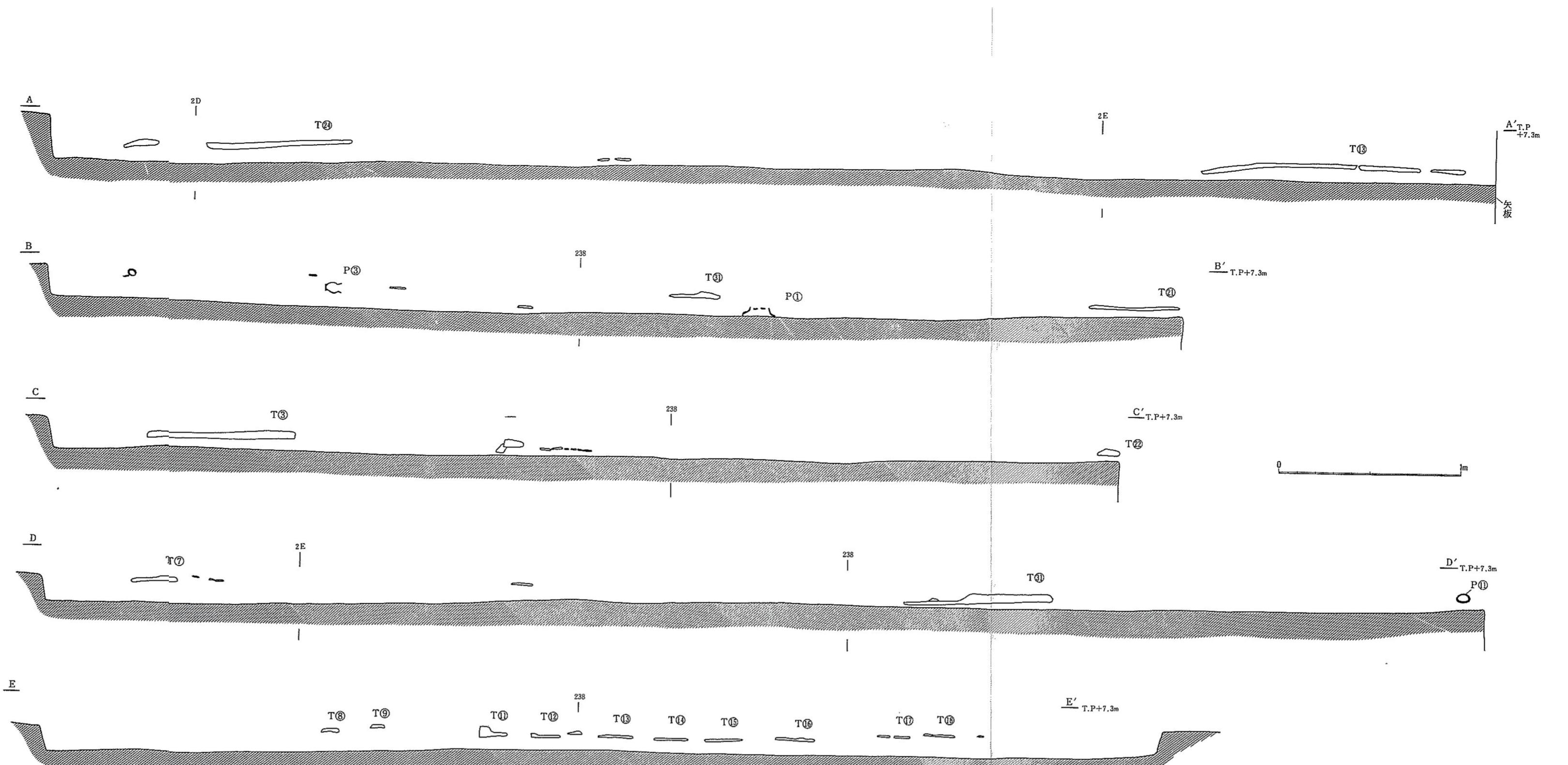


fig.68 弥生後期遺構面II S B 1004土器・炭化材等出土状況断面図 (1/20)

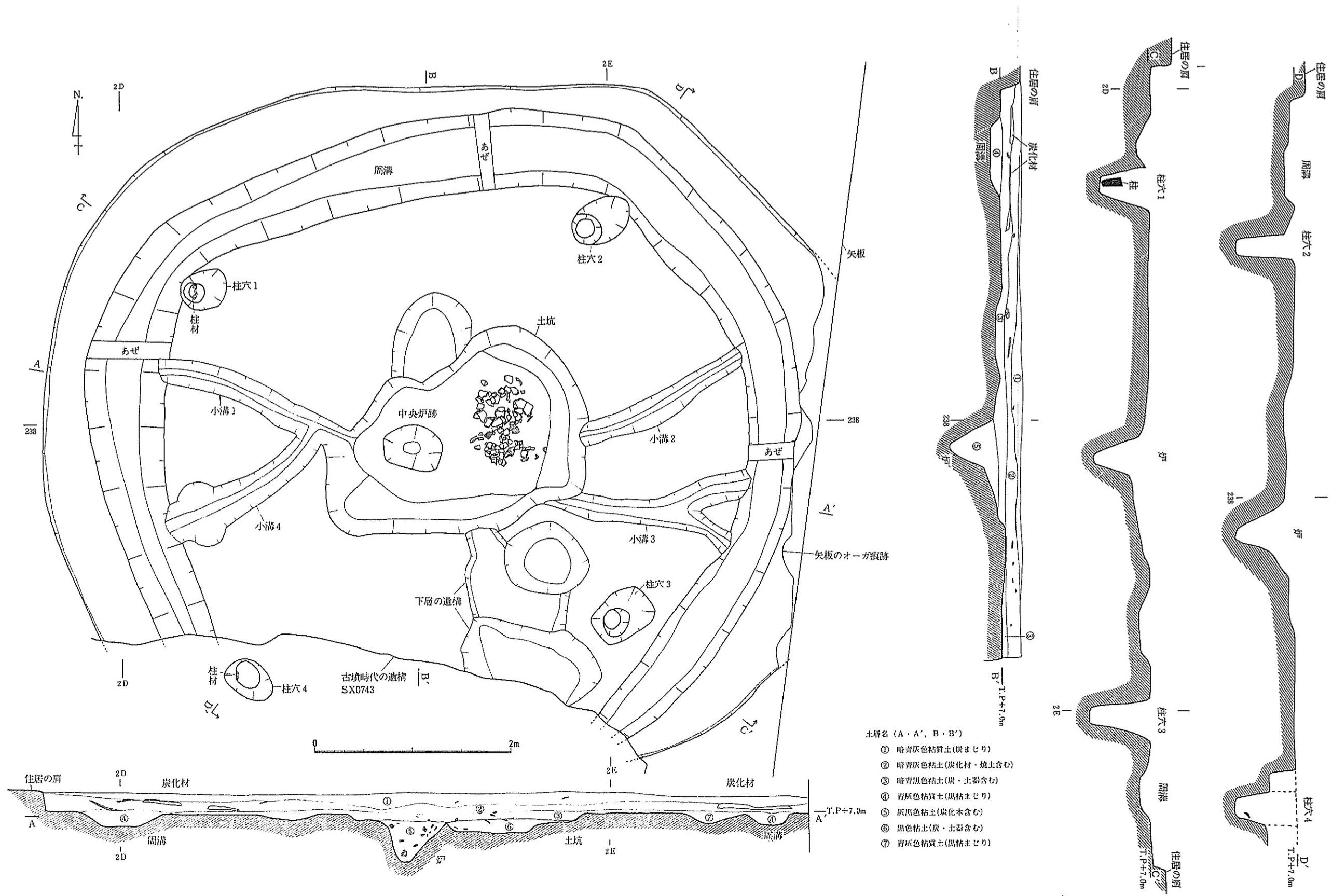


fig.69 弥生後期遺構面II S B 1004掘り上り平面図・断面図 (1/40)

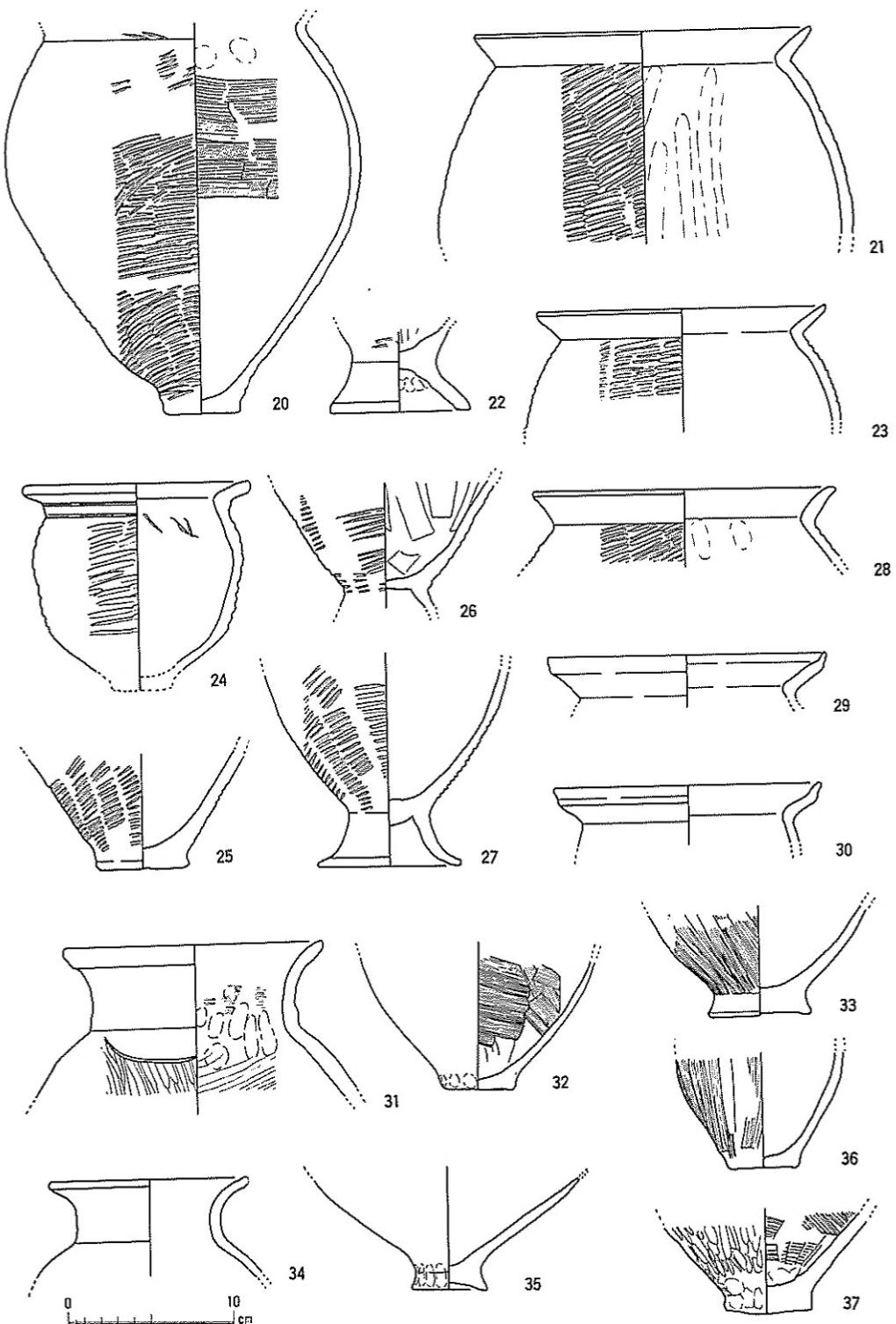


fig.70 弥生後期遺構面II S B 1004出土土器②

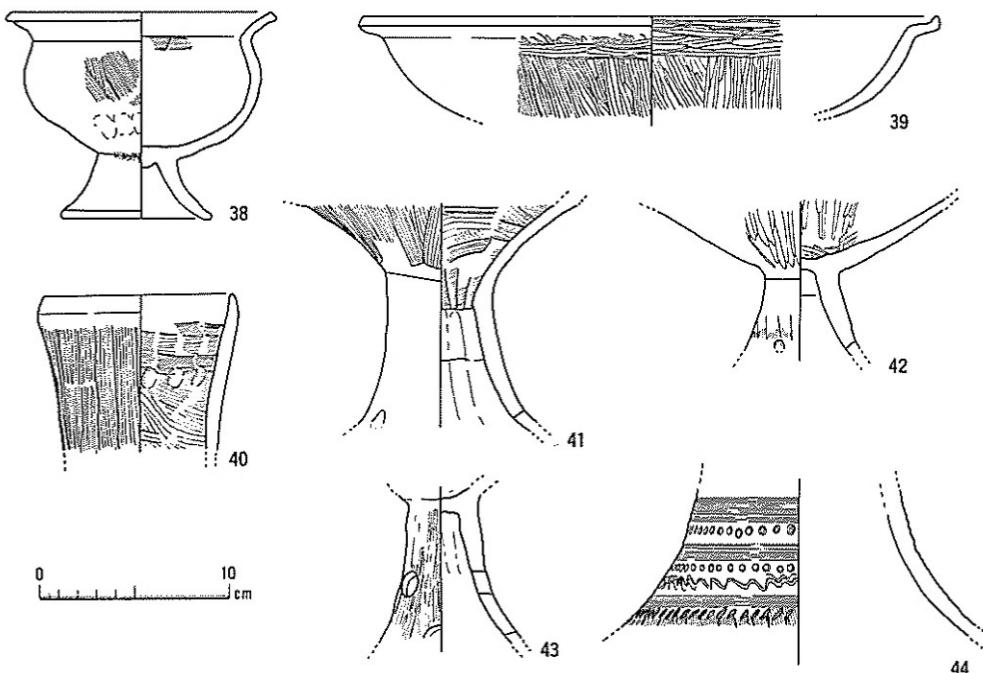


fig. 71 弥生後期遺構面 I S B1004出土土器③

質土、④青灰色粘質土（灰色微砂まじり）⑤暗灰色粘質土⑥緑灰色微砂⑦灰色粘土（微砂まじり）である。各層からはほとんど遺物は出土しなかった。S D1017の214付近より北への延長部は、2 H212付近では検出されていない。かなり西側に屈曲するのであろう。

S D1018はNo.218付近で東側に折れ曲がって伸びる溝S D1017を掘り直したものである。巾は上面で1.5～2.8m、長さ52m以上をはかる。各溝については8 m間隔で横断するあぜを設定して調査を進めた。南から北へ1～6区としてある。各区における土器の出土状況とあぜの断面と出土土器の図を載せているので参考されたい。1区については下層より土器が出土している。出土土器の器種は壺、甕、鉢、器台などである。2区は上面巾約2.8m、下面巾約1mであり、深さ0.7mをはかる。溝底面でT.P.+6.3mとなる。古い溝S D1017は深さ0.9mで、T.P.+6.1mをはかる。⑧の淡黒灰色土中に炭や弥生土器を多く含んでいる。(fig.75) 出土土器の器種は壺、甕、有孔甕、高杯、器台等である。27については中期に属するものであろう。(fig.76)

3区は上面巾約2.9m、下面巾約1.4mをはかり、深さ0.7mとなる。溝底面でT.P.+6.35mである。古い溝S D1017は深さ0.8mで、T.P.+6.3mとなる。⑫緑灰色シルト層上面で溝ざらえが行われている。⑧黒灰色粘質土より弥生土器が多く出土している。(fig.77)

4区は上面巾約2.8m、下面巾約1.45mをはかり、深さ0.7mである。溝底面の高さはT.P.+6.4mとなる。古い溝S D1017は深さ0.85mで、T.P.+6.15mをはかる。南壁の断面を観察すると掘

削が5回行われている。(I～V) ①暗青灰色粘質土中には須恵器片等が含まれていた。S D1018はIIIの段階で掘りこまれており、⑦淡黒灰色土より弥生土器がかなり出土している。(fig.78)

3, 4区出土土器の器種(fig.79)は壺、甕、高杯等である。

5区は上面巾3.0m、下面巾2.0mであり、深さ0.7mをはかる。溝底面の高さはT.P.+6.4mである。古い溝S D1017は深さ0.9mで、T.P.+6.2mをはかる。南壁の断面を観察すると、4区同様掘削が5回にわたっている。(I～V) S D1018はIIIの段階で掘りこまれている。⑦暗黒灰色土において炭や弥生土器が多く含まれている。5～6区出土土器の器種は壺・甕・有孔鉢・台付鉢・高杯等である。(fig.80,81)

S D1018についても前後5回の溝の掘削や躊躇感がおこなわれている。溝内の出土土器についてみれば、弥生後期の土器が大部分を占めるが、中には中期後葉のものも存在する。それらのことから最初の溝(S D1017)の掘削は、弥生中期後葉頃と考えたい。またS D1018については弥生後期前～中葉の掘削で、最終的に埋まるのは五世紀頃と考えられる。

C. 土坑 (fig.82～85)

S K1001 2 H238で検出された。北側は側溝によって切られているため規模は明確ではない。長1.7m以上、巾0.6m、深さ0.1mをはかる。形態は舟形を呈しており、ほぼ南北に伸びている。底面のレベルはT.P.+6.95mである。埋土は黒灰色土であり、層内より高杯・甕・把手付鉢が出土している。

S K1002 2 I 239で検出された。長径1.1m、短径0.65m、深さ0.15mをはかり、橢円形を呈している。断面はほぼU字形を呈し、埋土は黒灰色土で炭を含んでいる。甕2は横位の状態で口縁を下向き気味にして検出された。甕3は甕2に口縁を重ねる形ではほぼ水平で検出されている。土坑の底面の高さはT.P.+6.9mである。層内からはほぼ完形に近い甕2個体が出土しており、合せ口の甕棺墓の可能性がある。

S K1003 2 H240で検出された。西・南側は側溝及び調査区外なので規模は明確でない。残存長一辺約1.5mのもので正方形形状を呈する。深さは約0.2mで埋土は黒灰色土である。層内からは底面より浮いて鉢が一点出土している。底面の高さはT.P.+7.0m前後である。

S K1001～1003は約6m毎に間隔をおいて検出され、ほぼ一直線に並ぶものである。また埋土も黒灰色土であり、出土土器の時期も近い。これらの土器の詳細は観察表を参照されたい。出土土器の時期については、弥生中期後葉から後期前葉頃と思われる。

D. その他の遺構

S X1007 2 J 223付近で検出された。S D1018を一部切る形でS B1002に連結している。規模は明確ではないが一辺4m以上の土坑状のものである。埋土は暗灰色土であり、層内より完形に近い土器が出土している。S B1002と関連した遺構であろうか。

S X1007出土土器 (fig.86) の器種は、甕・器台であり、①と⑥、④と⑤がセットになるかもしれない。これらの土器の時期については、弥生後期前葉頃と考えられる。

S X1008 2 I 224付近で検出された。S D1018西辺で検出され、長6m、巾1.7m、深さ0.2mをはかる。形態は舟形を呈しており、断面はU字形を呈する。埋土は暗灰色土であり、層内より弥生土器が出土している。土器を廃棄した土坑であろうか。(fig.88)

出土土器の器種は壺・鉢・甕・高杯であり、これらの土器の時期については弥生後期前期頃と考えられる。(fig.87)

S X1011 2 E 238付近で検出された。規模や形態は明確ではないが、S B1004の北に接する形で検出された。出土土器の器種は甕3、壺2である。長頸壺⑤は北側の側溝内で横位の状態で出土した。甕①～③は横に並んで検出された。①と③は横位で、②は直立していた。①～③、⑤の土器はほぼ完形であり、意図的に置かれたものであろう。掘り込み面や範囲も明確ではないが、出土土器の時期は弥生後期初頭頃と考えられよう。甕③の底面のレベルはT.P.+7.05mである。(fig.89,90)

E. 小 結

本遺構面は、トレノチ全域にわたって遺構が検出された。

検出した遺構の中には、上面である弥生後期遺構面Iと、下面である弥生中期遺構面とが、部分的に重複しているところもみられる。

遺構の種類については、集落関係(住居・溝・大溝・土坑・ピット)のものが大部分を占めている。

竪穴住居は、4棟検出された。S B1001、S B1002、S B1004は火災にあった住居であり、住居の構造規模も類似しており、その構築時期は弥生後期前葉と考えられ、同時併存して、集落を形成していたものと思われる。ただ、S B1001、S B1002については、生活用具としての土器が、比較的まとまって出土しているのに対し、S B1004についてはほとんどみられないため、そのことについての何らかの理由づけが必要であろう。また、S B1003については、火災にあっておらず、出土した土器も中期後葉のものが多くみられ、柱穴も六本柱であり、六角形の平面プランをもつため、他の3棟と併存していたとは考えられない。むしろ中期に属する住居かもしれない。これらの竪穴住居は近接して営まれてはおらず、径7～8mの竪穴住居が、40～70mの間隔を有して点在するものである。

S B1001以北には、竪穴住居はみられず、12m北側に、堤を有する大溝S D1016があり、さらに北側に大溝S D1015が存在する。

大溝S D1015より北側は、集落の内部を示すような遺構はみられず、不定方向の溝群や、小規模な溝群が残存するのみで、黒色粘土層が薄くなり、出土土器も極端に少なくなる。遺構面自体は下降しており、粘土もベタベタしている。これらを考えあわせると、S D1015以北については、集落域ではなく、水田に伴う明確なあぜ等は検出されていないが、生産域と考えたい。特に、溝

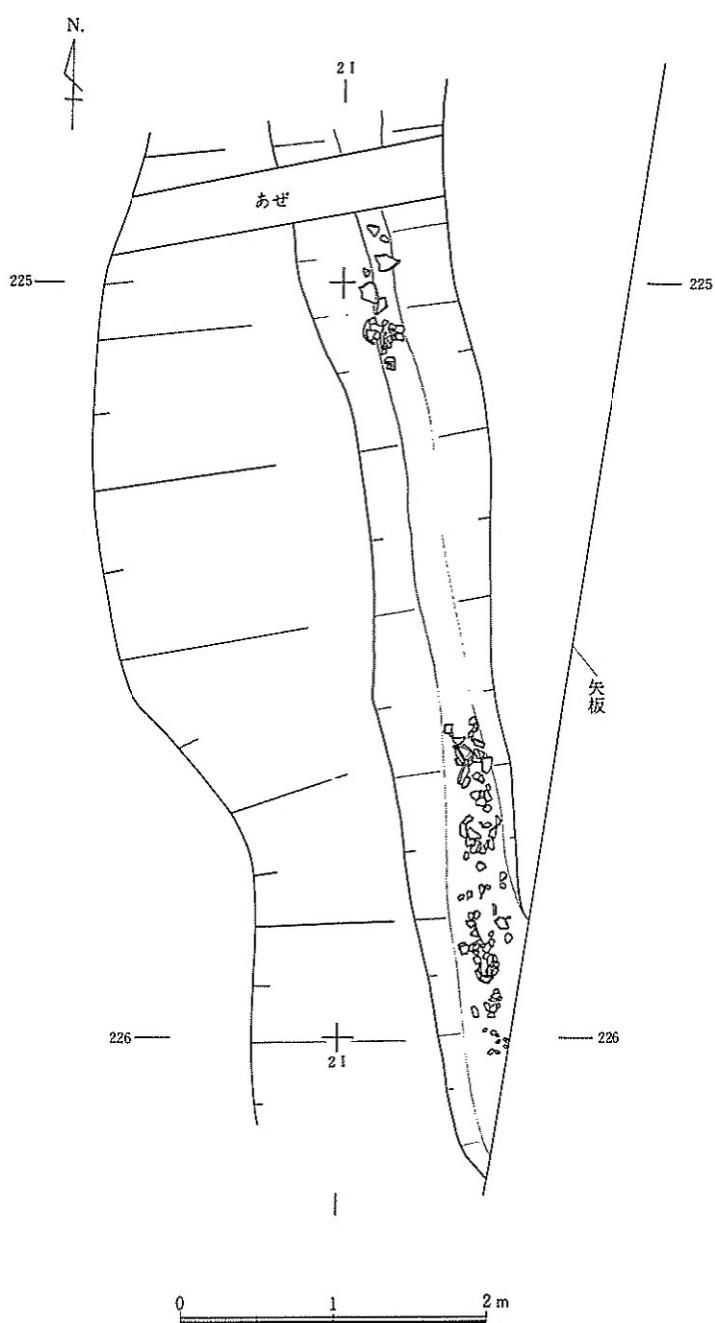


fig.73 弥生後期遺構面II S D1018 1区遺物出土状況平面図 S=1/50

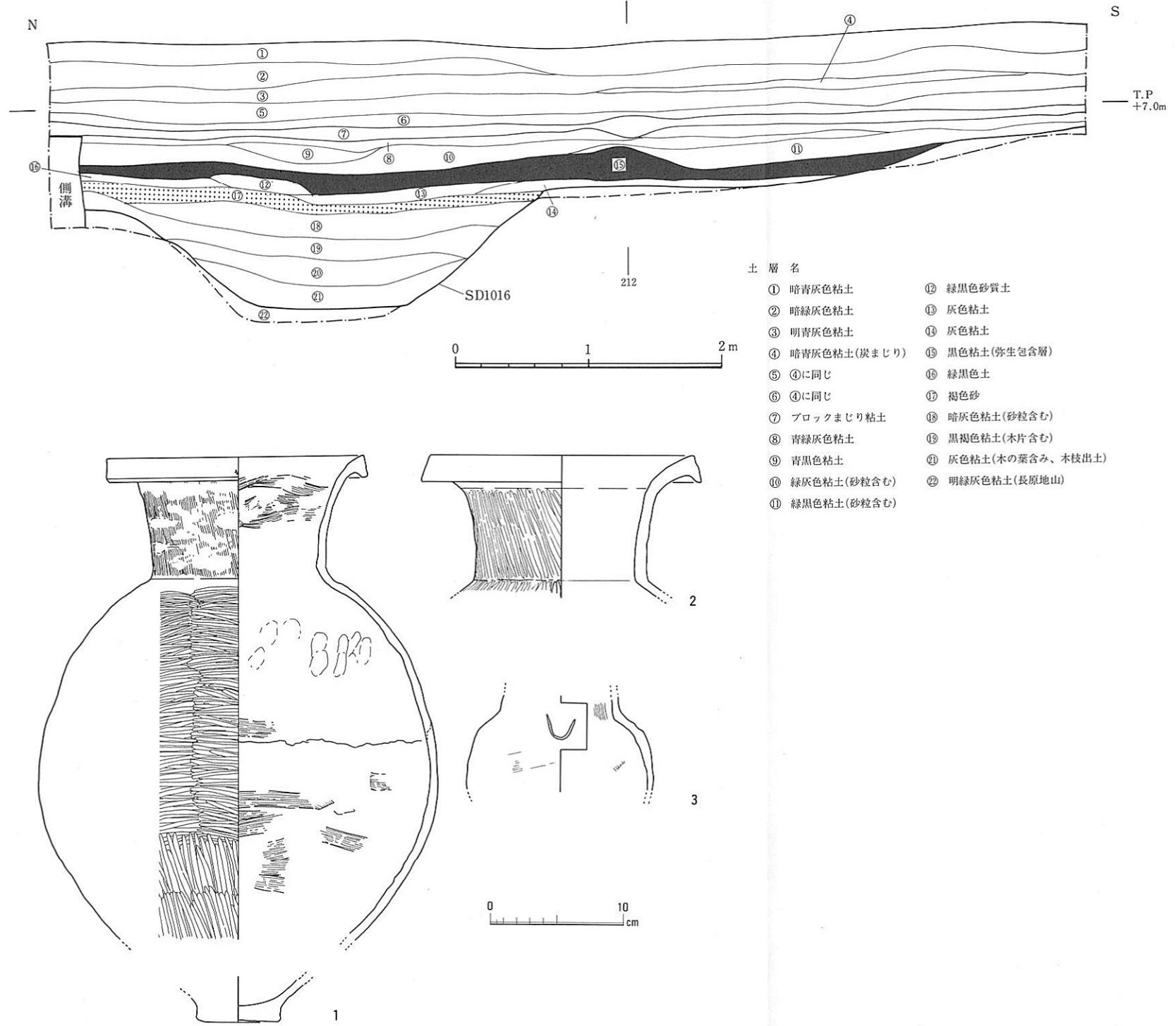


fig. 72 弥生後期遺構面II S D1016南北断面図 (1/40) 及び出土土器 (1/4)

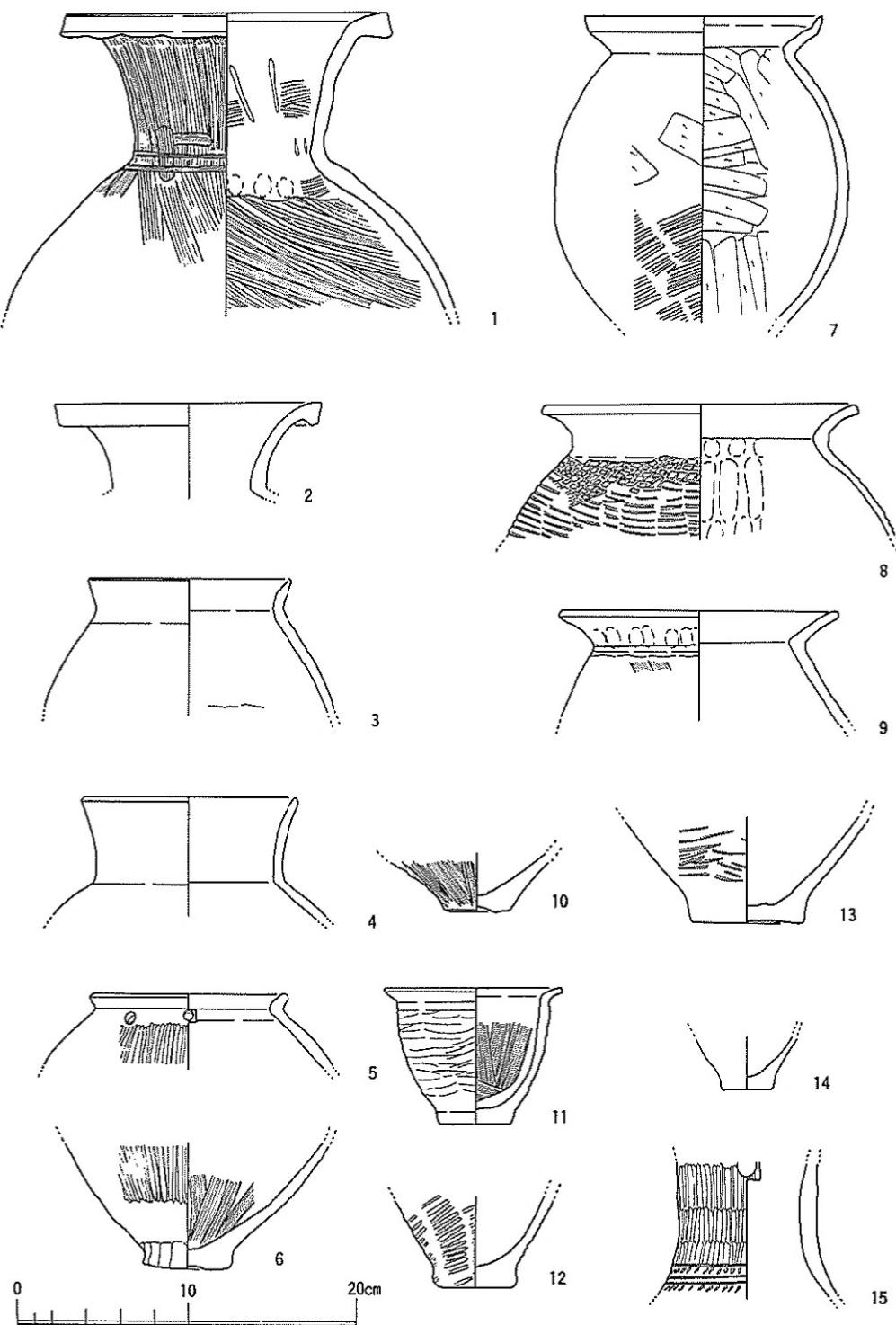


fig. 74 弥生後期遺構面II S D1018 1区出土遺物① S=1/4

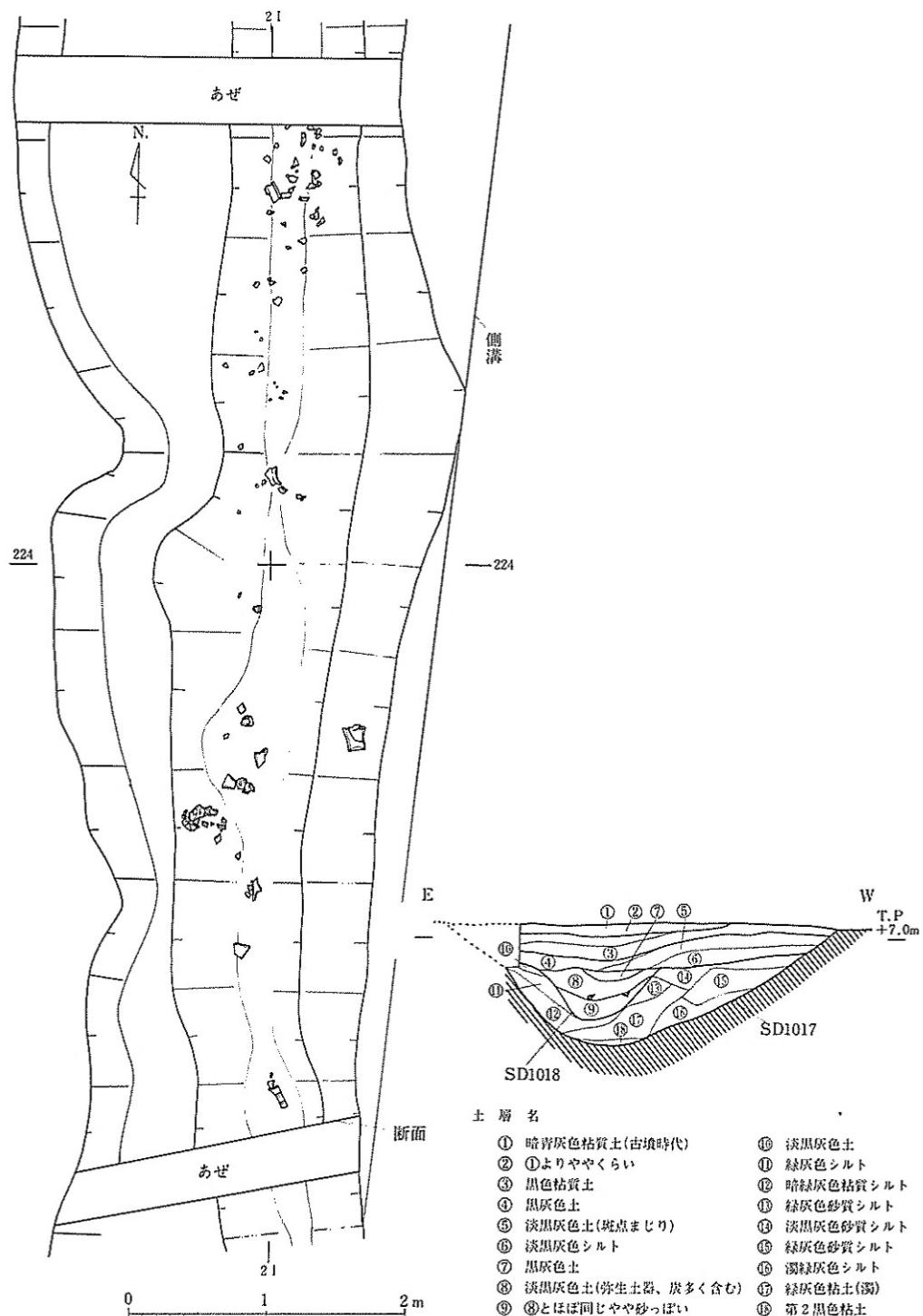


fig.75 弥生後期遺構面II S D1018 2区遺物出土状況平面図及び南壁断面図 S=1/50

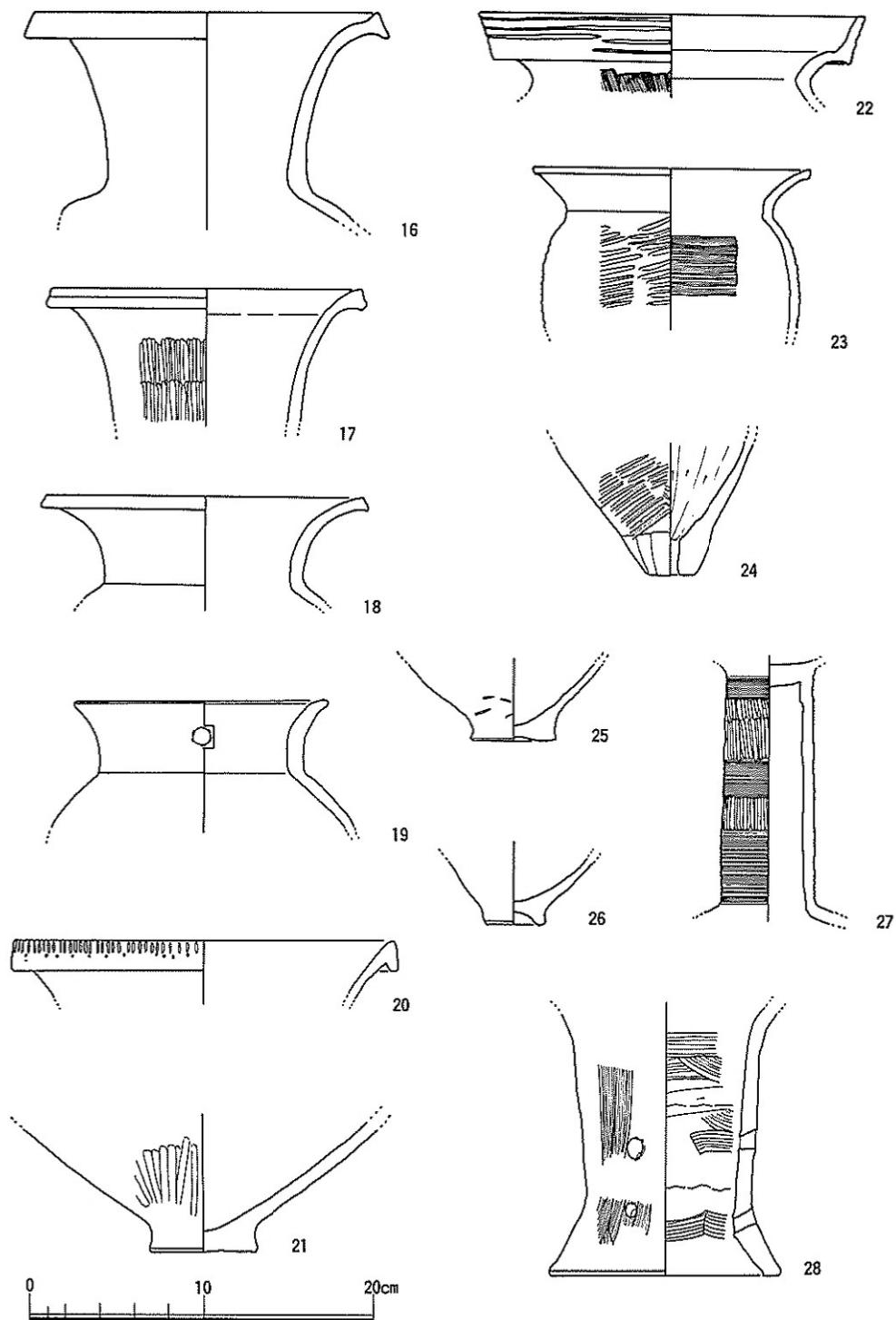


fig.76 弥生後期遺構面II S D1018 2区出土遺物② S=1/4

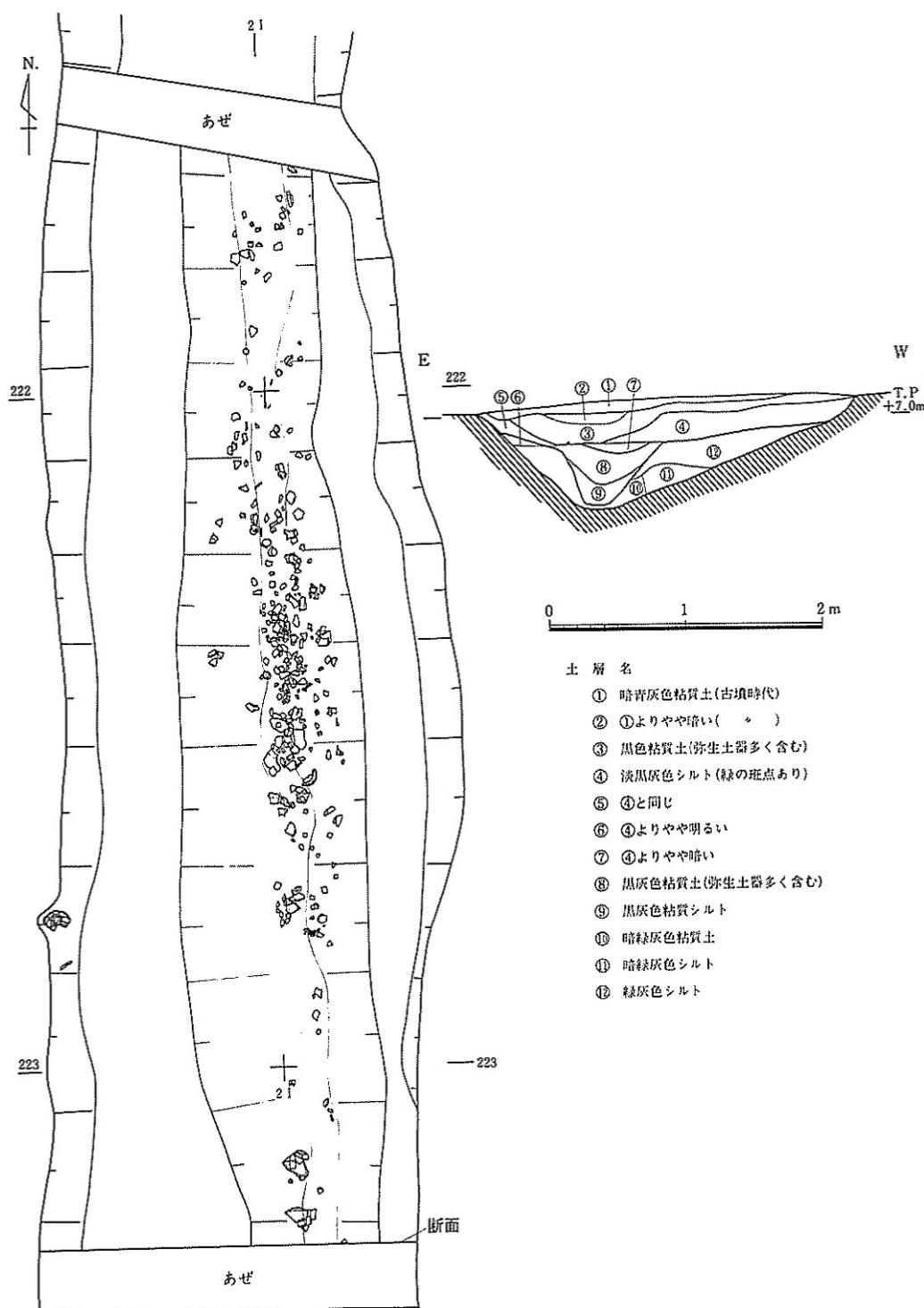


fig.77 弥生後期遺構面II S D1018 3区遺物出土状況平面図及び南壁断面図 S=1/50

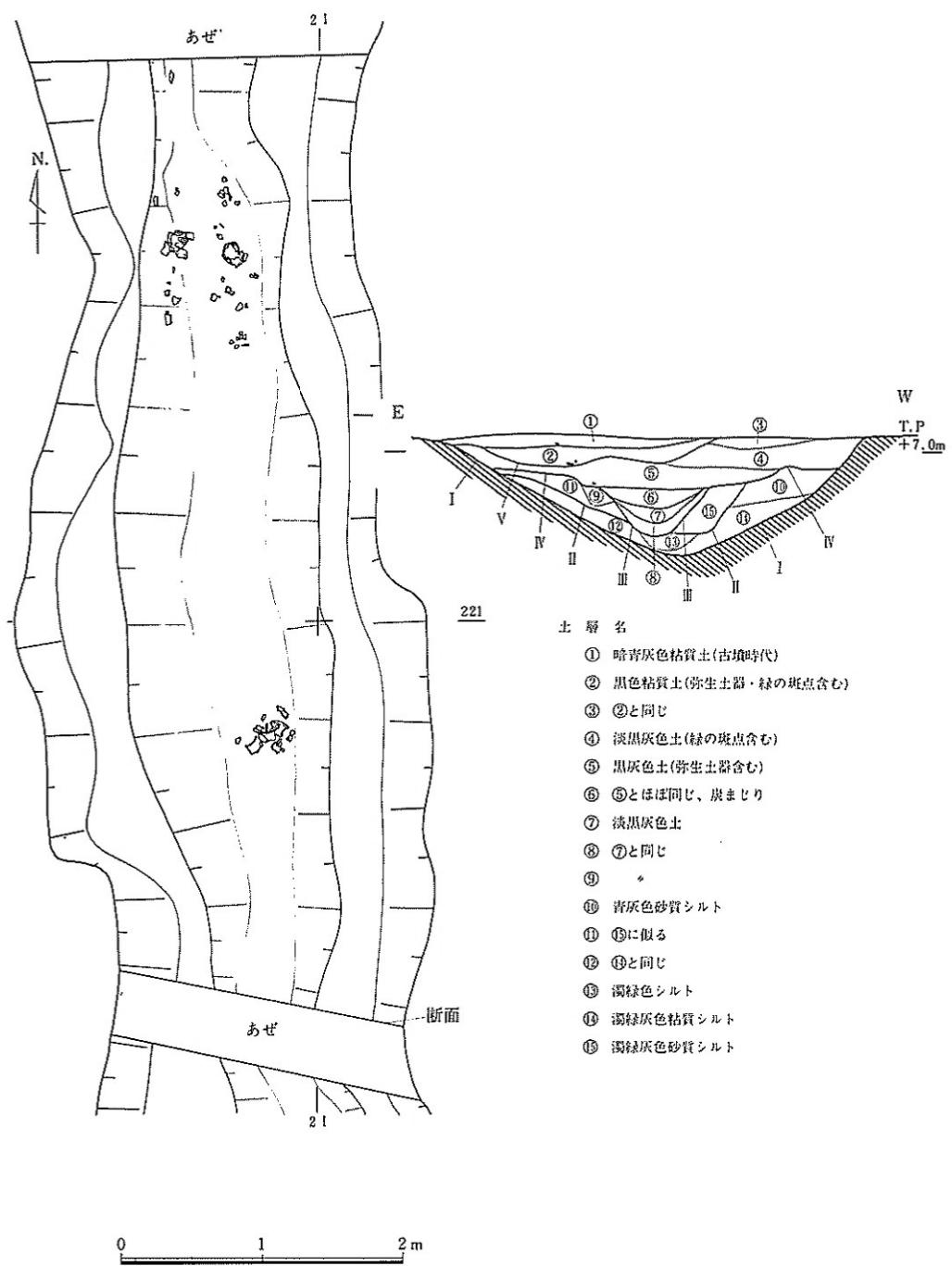


fig.78 弥生後期遺構面II S D1018 4区遺物出土状況平面図及び南壁断面図 S=1/50

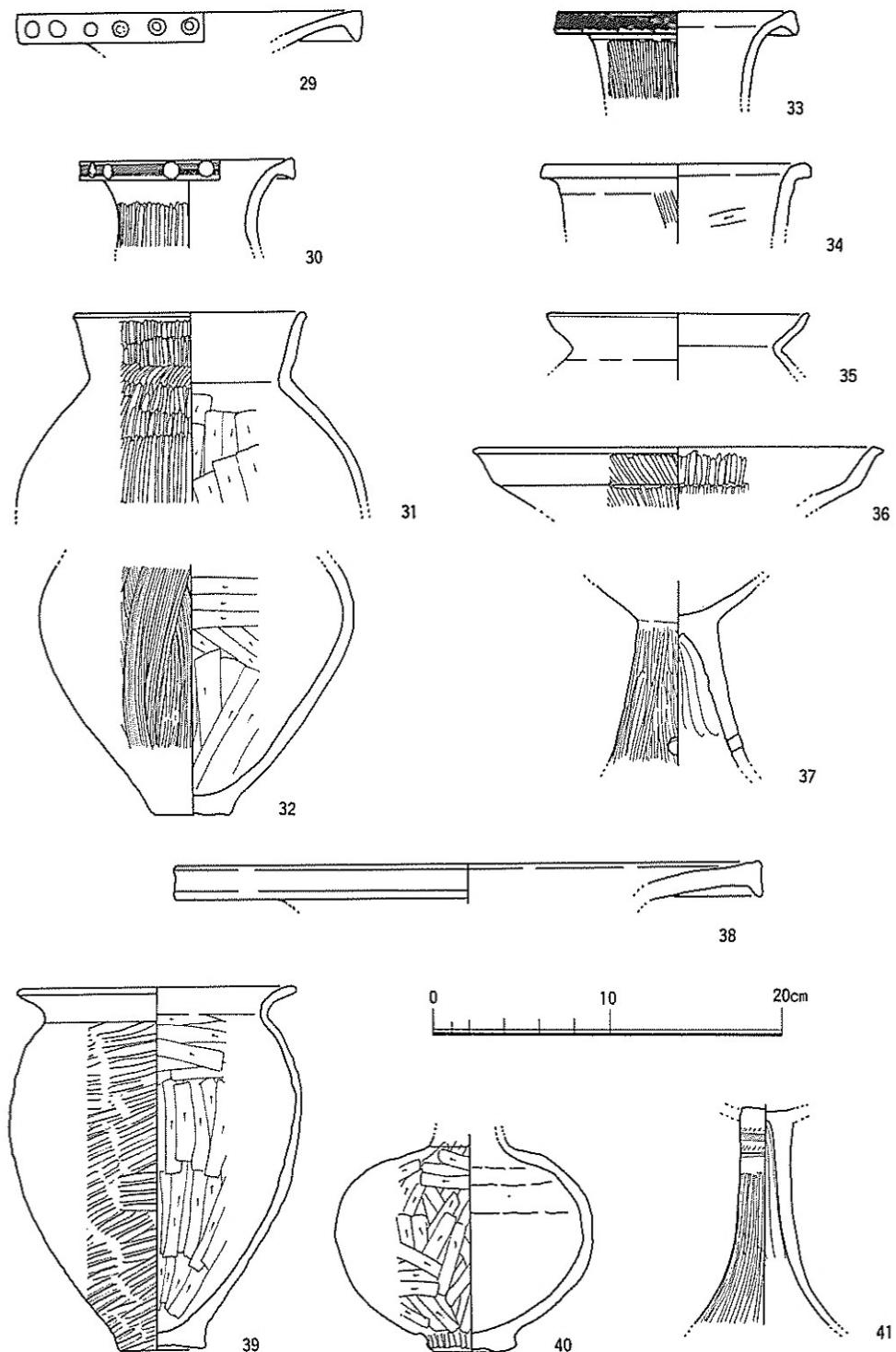


fig.79 弥生後期遺構面II S D1018 3・4区出土遺物③ 1/4

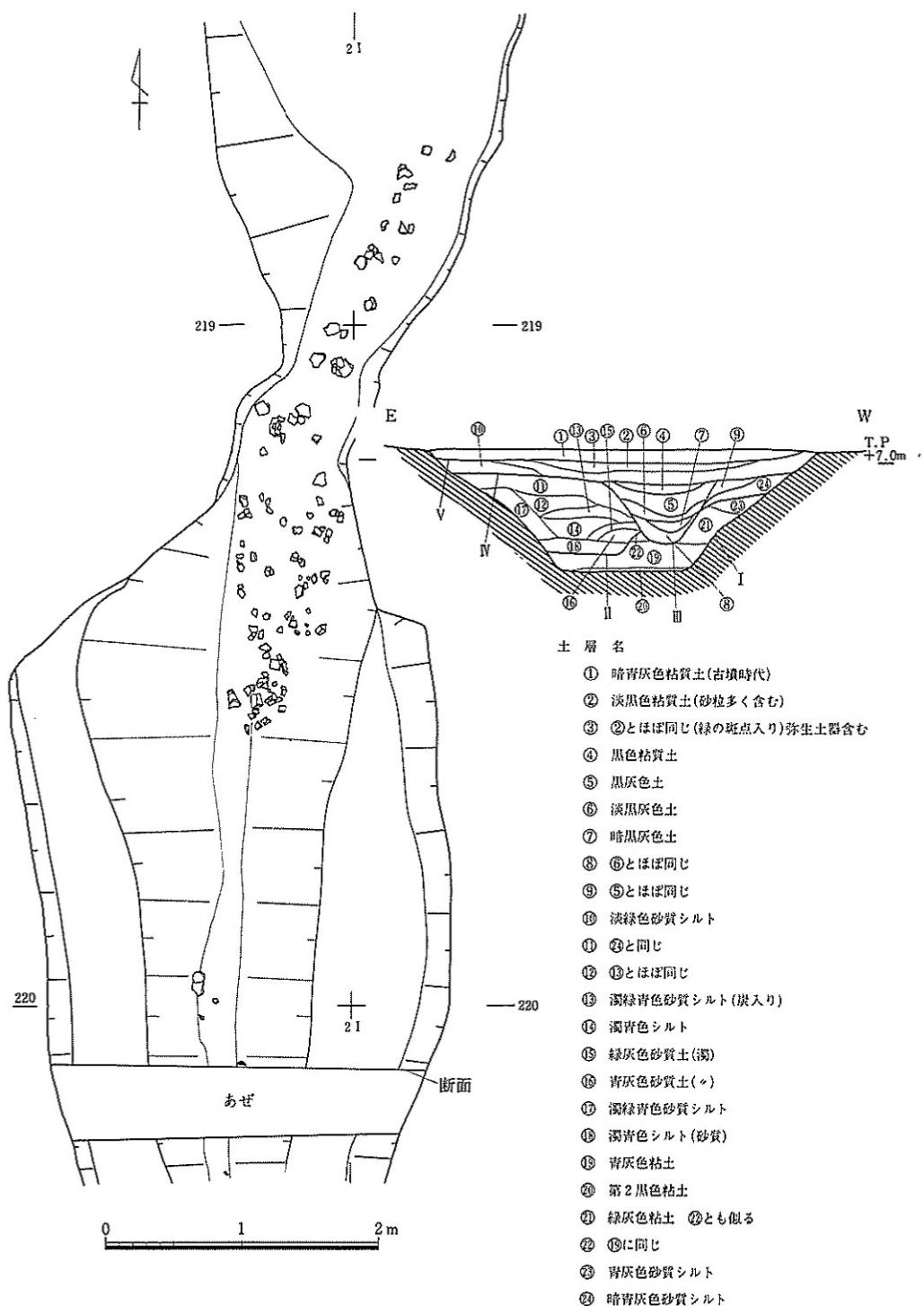


fig.80 弥生後期遺構面II S D1018 5区遺物出土状況平面図及び南壁断面図 S=1/50

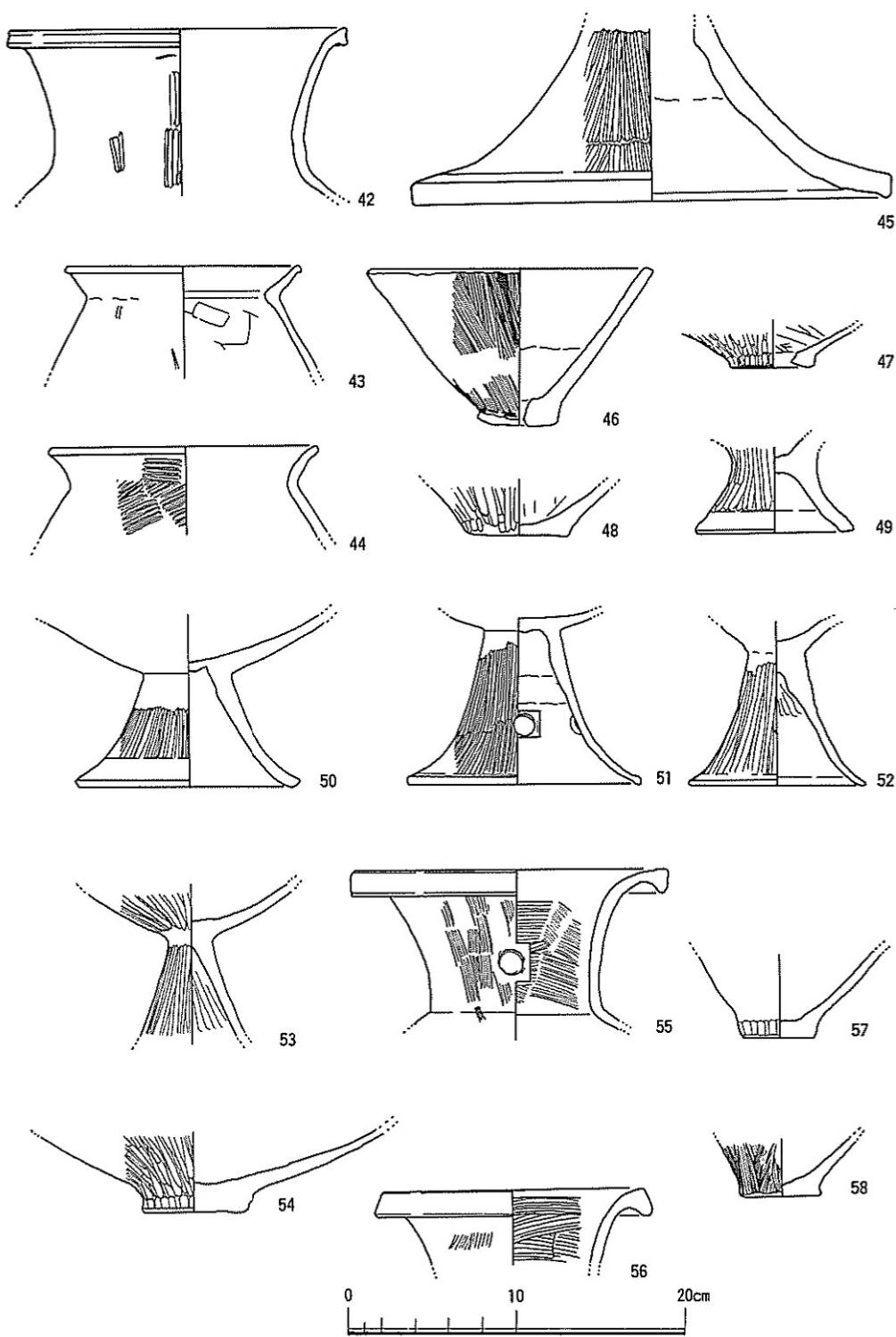


fig.81 弥生後期遺構面II S D1018 5・6区出土遺物④ 1/4

群は、東西方向と南北方向が直角気味に交差しており、水田等に伴う水路の痕跡と思われる。

事実、Dトレンチ北端、Cトレンチ南端では弥生後期の遺構は少なく、土器の出土も少量である。おそらく、SD1015より以北は、生産域と考えて大過ないであろう。

さて、大溝SD1015については、西側と東側で極端に南方向へ屈曲しており、深度も浅くなる。トレンチ部分が、SD1015の最深部と考えられる。

一方SD1016については、南側に若干カーブしながらほぼ東西に25m以上伸び、その規模についても一定である。また、SD1016内、両肩部に溝の掘削の排土を堤として盛りあげており、さらに溝内には、焼けた建築材が数本廃棄されていた。この大溝については、小範囲の検出ではあるが、集落の北限を画す機能と、排水等の機能を考えあわせ、いわゆる集落をめぐる環濠と考えたい。

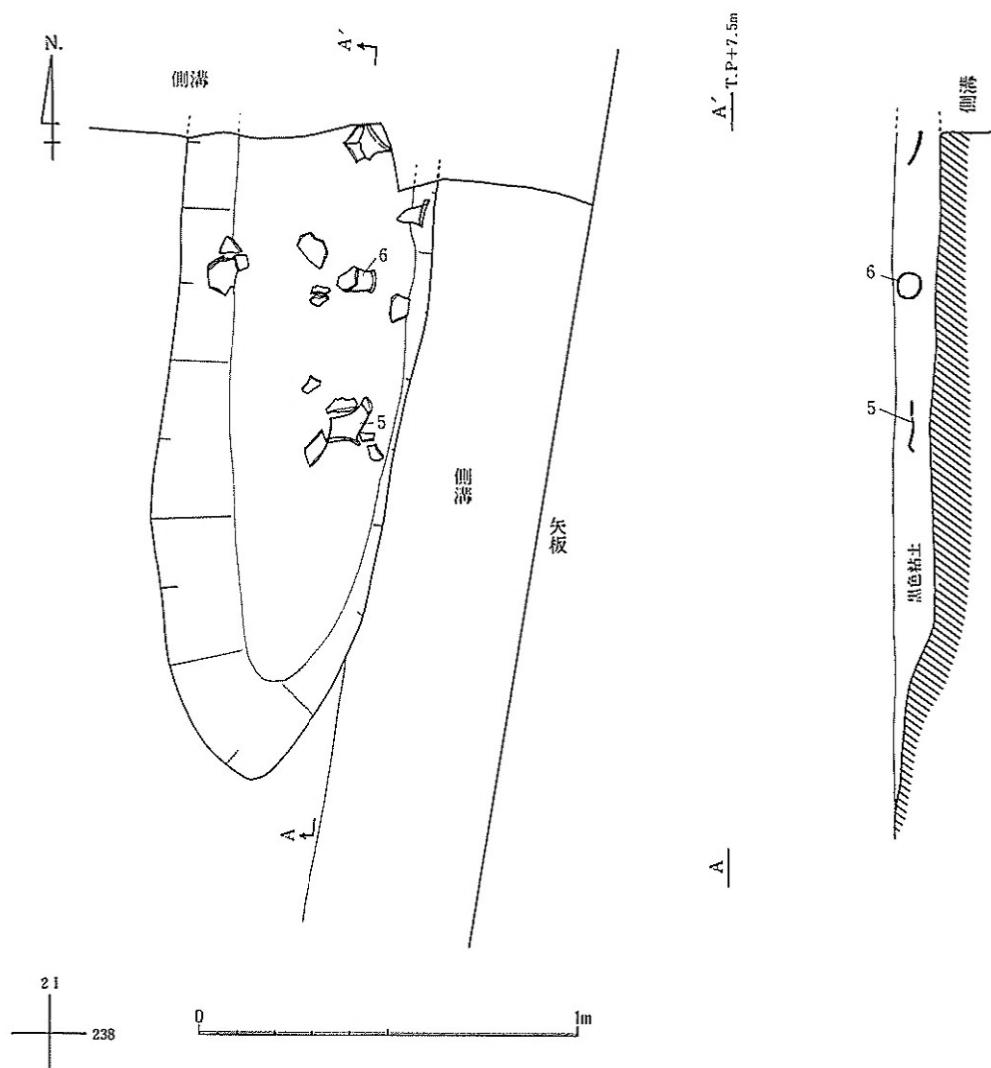


fig.82 弥生後期遺構面 I S K1001遺物出土平面図及び断面図 (1/20)

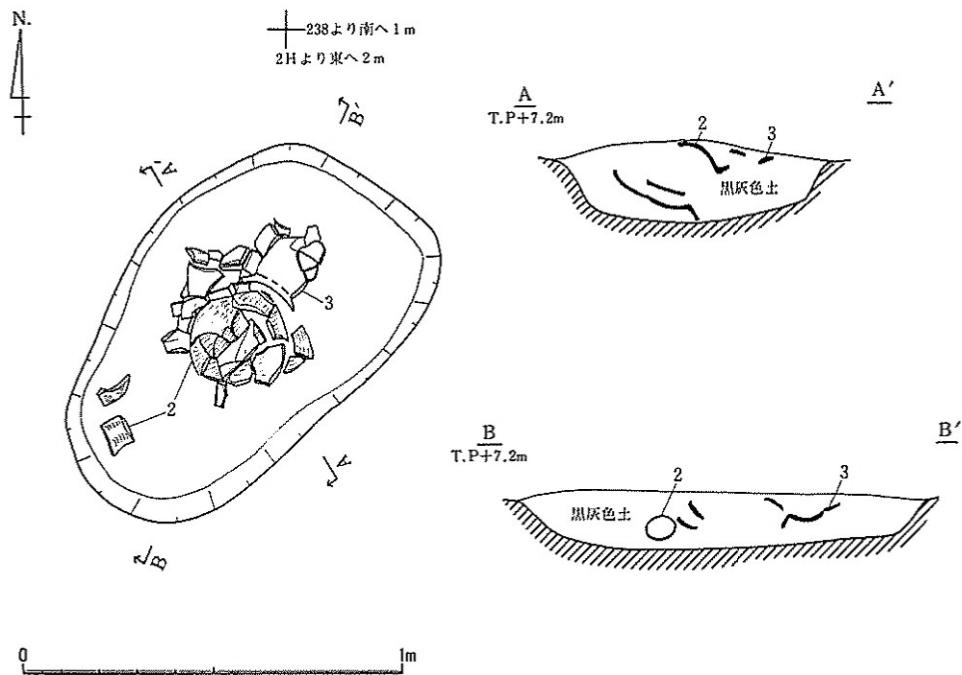


fig.83 弥生後期遺構面II S K1002 遺物出土状況平面図及び断面図 S=1/20

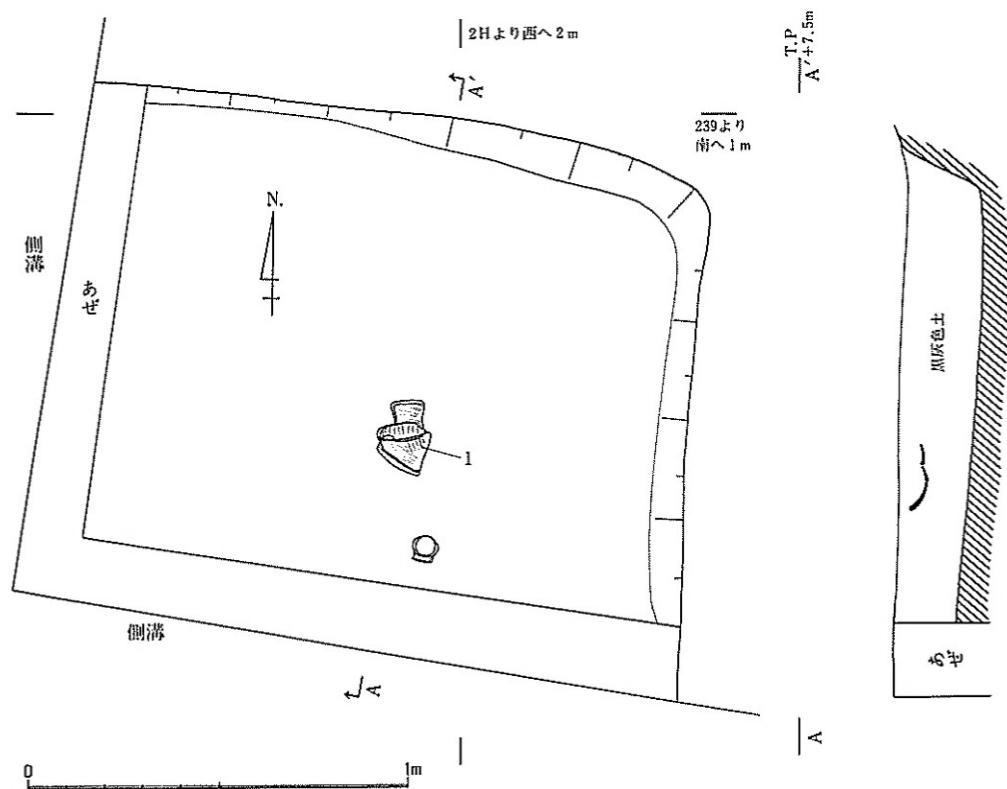


fig.84 弥生後期遺構面II S K1003 遺物出土状況平面図及び断面図 S=1/20

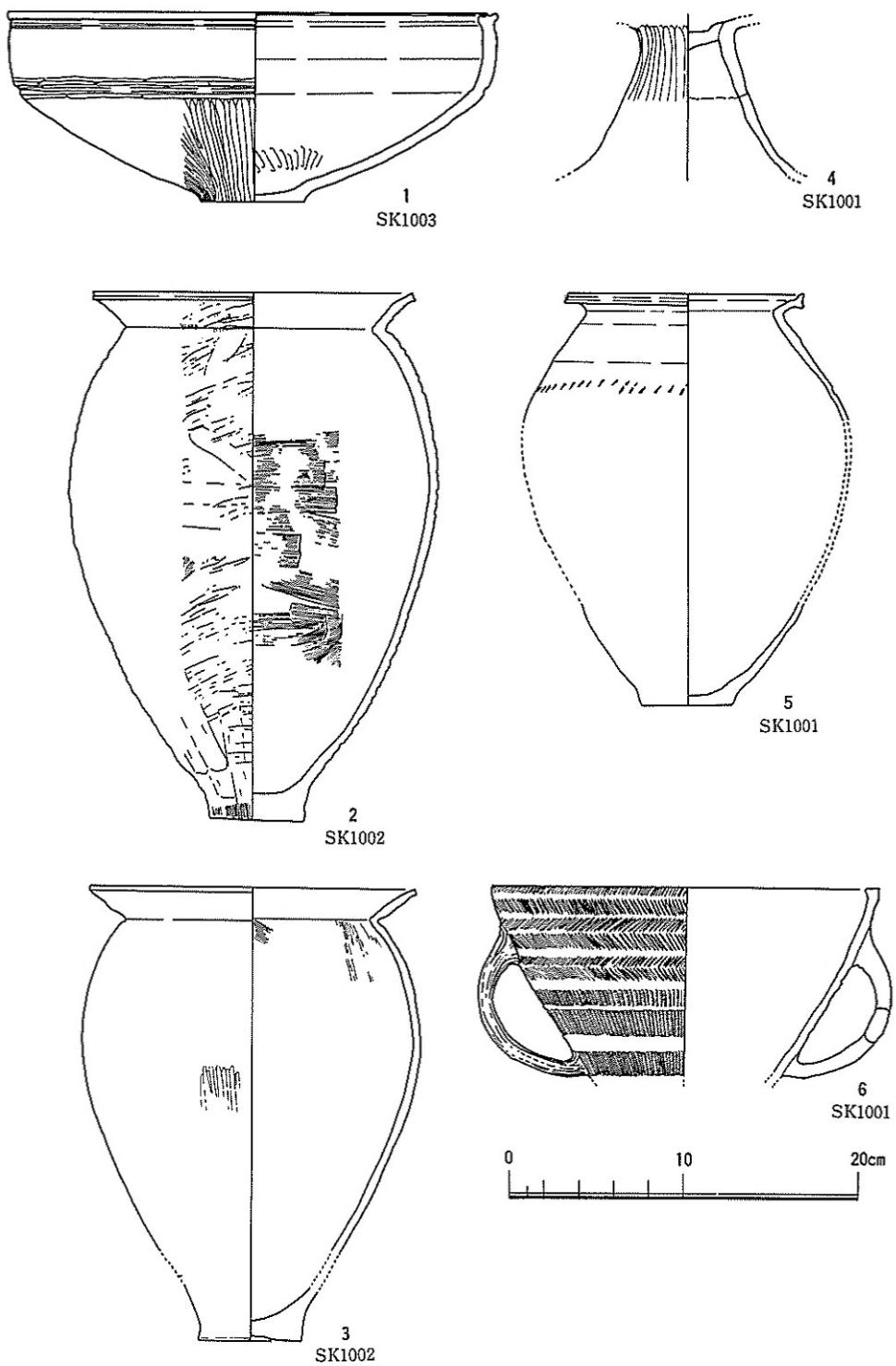


fig.85 弥生後期遺構面II S K1001~S K1003出土遺物 S=1/4

S D1017、S D1018の掘削時期は、中期後葉と考えられるが、S D1018として北東部に掘り変えられる時期は後期前葉頃と考えられよう。

S D1017については、S B1001が機能していた時には、ある程度埋まっていたと考えられる。というのは、S B1001には接するS D1017北部上層の溝内に、S B1001焼失時の灰がかき集められ、廃棄されているからである。

また、両溝とも北側の延長部は検出されておらず、南側の延長については、おそらくEトレンチE S D904に続いていくものと思われ、長200mの長大な溝と考えられる。これは、集落内部を

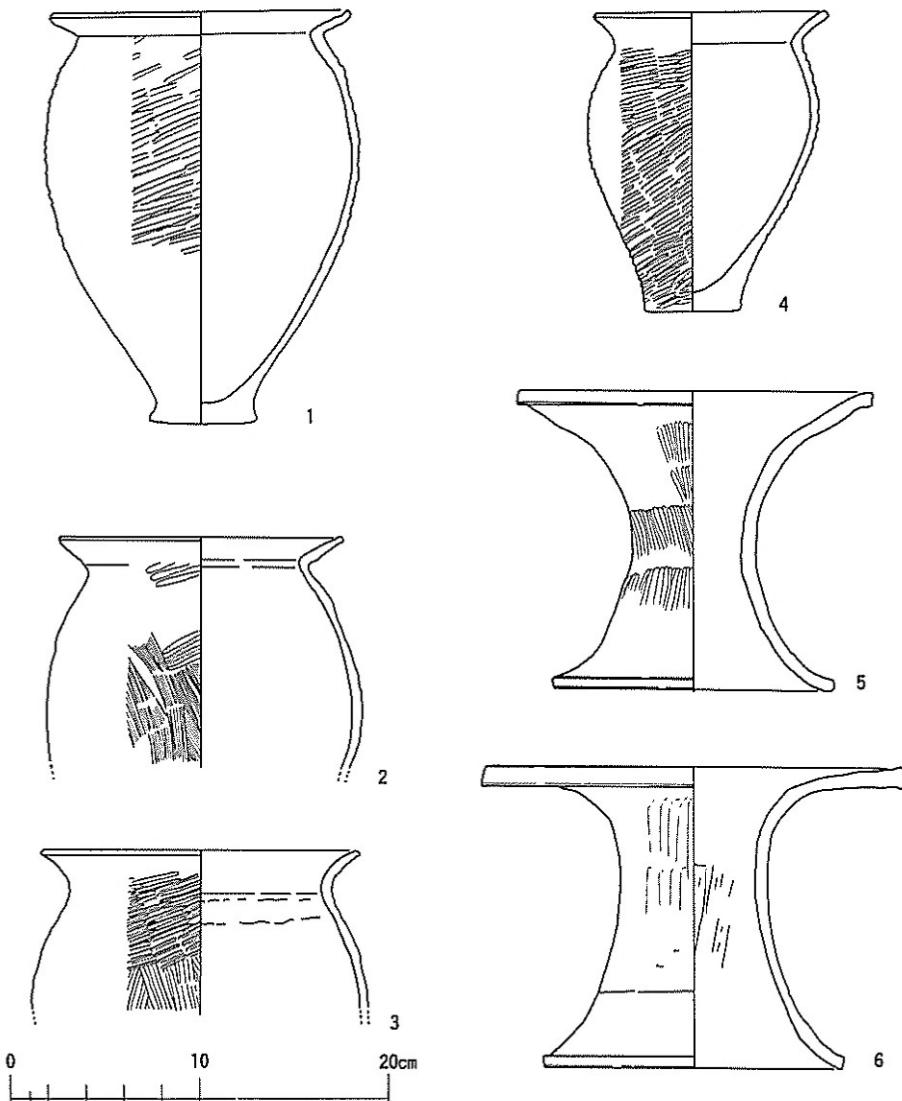


fig.86 弥生後期遺構面II S X1007出土遺物 S=1/4

縦貫する、排水・用水のための溝と推定され、流路方向についても、ほぼ南北で、地形にそったものと思われる。また、この溝に取りつく形で、小規模な溝が多数検出されている。

S B1001、S B1002、S B1004については、住居の構造・規模・形態・出土遺物等を考えあわせた場合、同時併存の可能性が高く、すべて火をうけており、同時に焼け落ちたものと思われる。ただ、S B1001、S B1002は、多量の遺物が遺存していたが、S B1004のように、まったく遺物がみられないものもある。

このことについては、単なる火災と考えるより、意図的なものとして、他に何らかの理由を考えるべきであろう。たとえば、伝染病のようなものが流行し、そのため生活用具を焼き払ったの

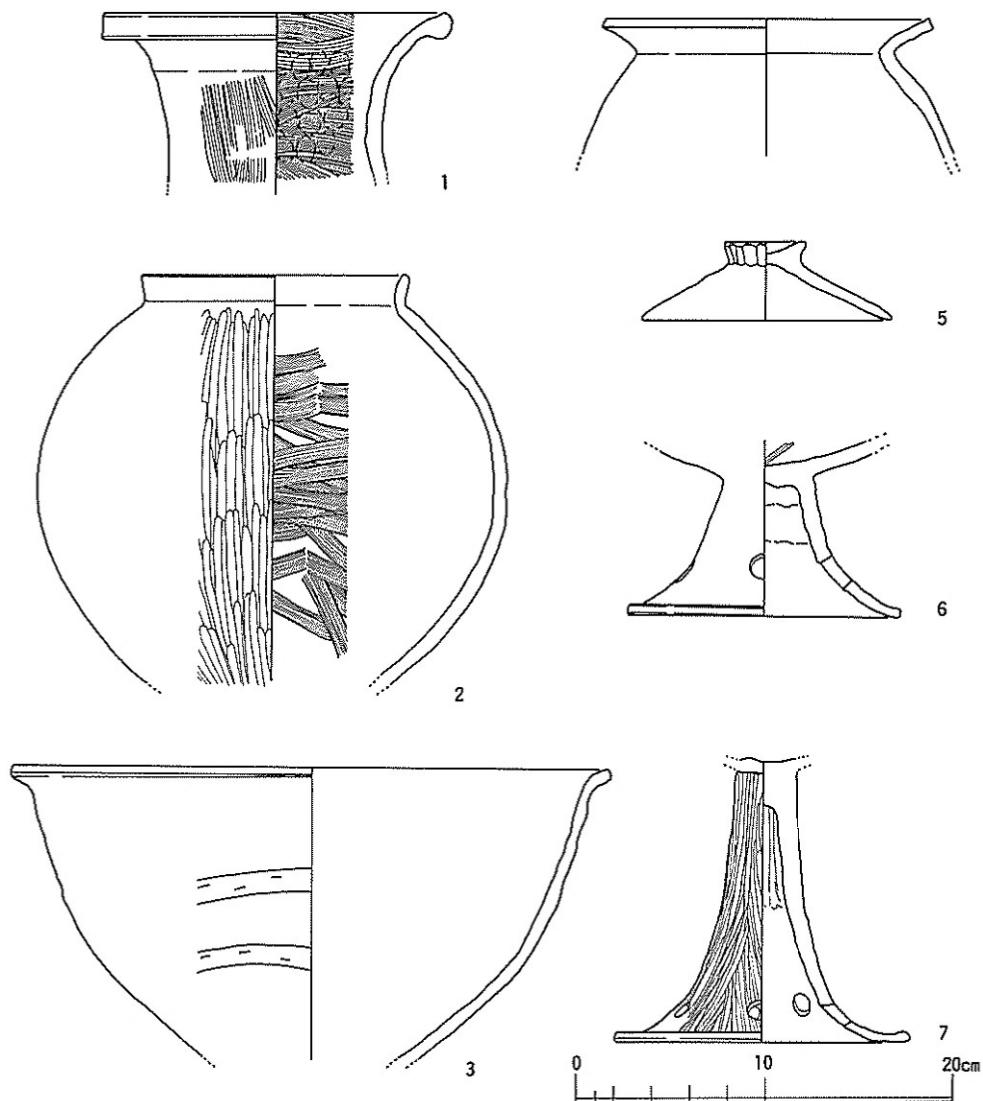


fig.87 弥生後期遺構面II S X 1008出土遺物 (1/4)



ではないか、などと推理することもできよう。

S K1001～1003は、ほぼ6m間隔で並列しており、S K1002からは、ほぼ完形に近い甕2個体が合せ口の状態で出土しており、乳幼児のための甕棺の可能性も考えられる。

本遺構面で検出された遺構は、S D1016を境にして、南北でかなり様相を異にする。つまり、S D1016より南側は集落域、北側は、生産域が広がっていたものと思われる。また、火災にあった住居S B1001は、多量の弥生土器が検出され、弥生後期前葉の一括遺物として、好資料を提供したといえよう。また、住居の上屋を構成したと思われる垂木が検出されたことも、特筆に値することであろう。

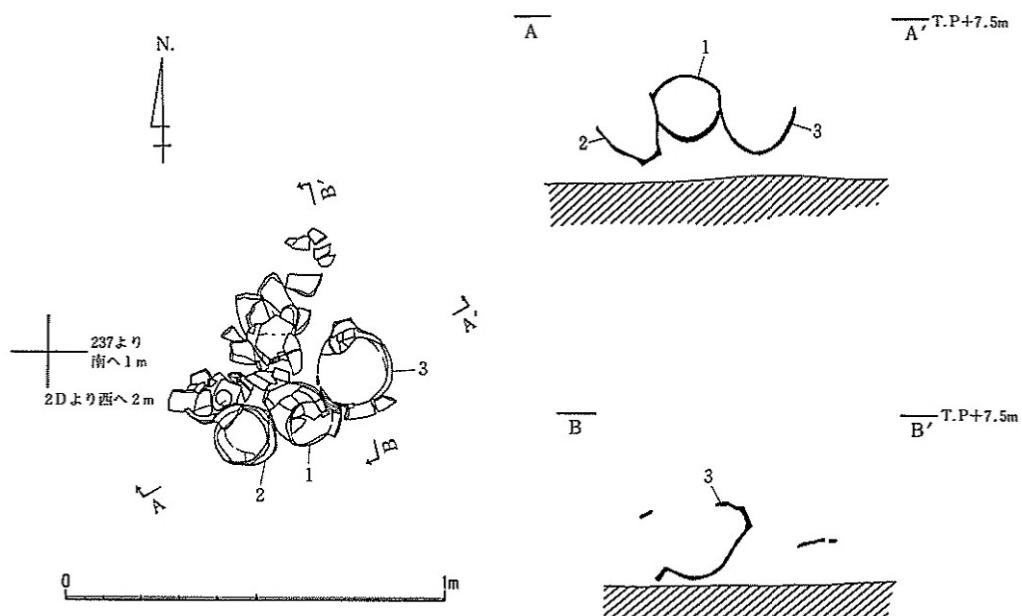


fig.89 弥生後期遺構面II S X1011遺物出土状況平面図及び断面図 (1/20)

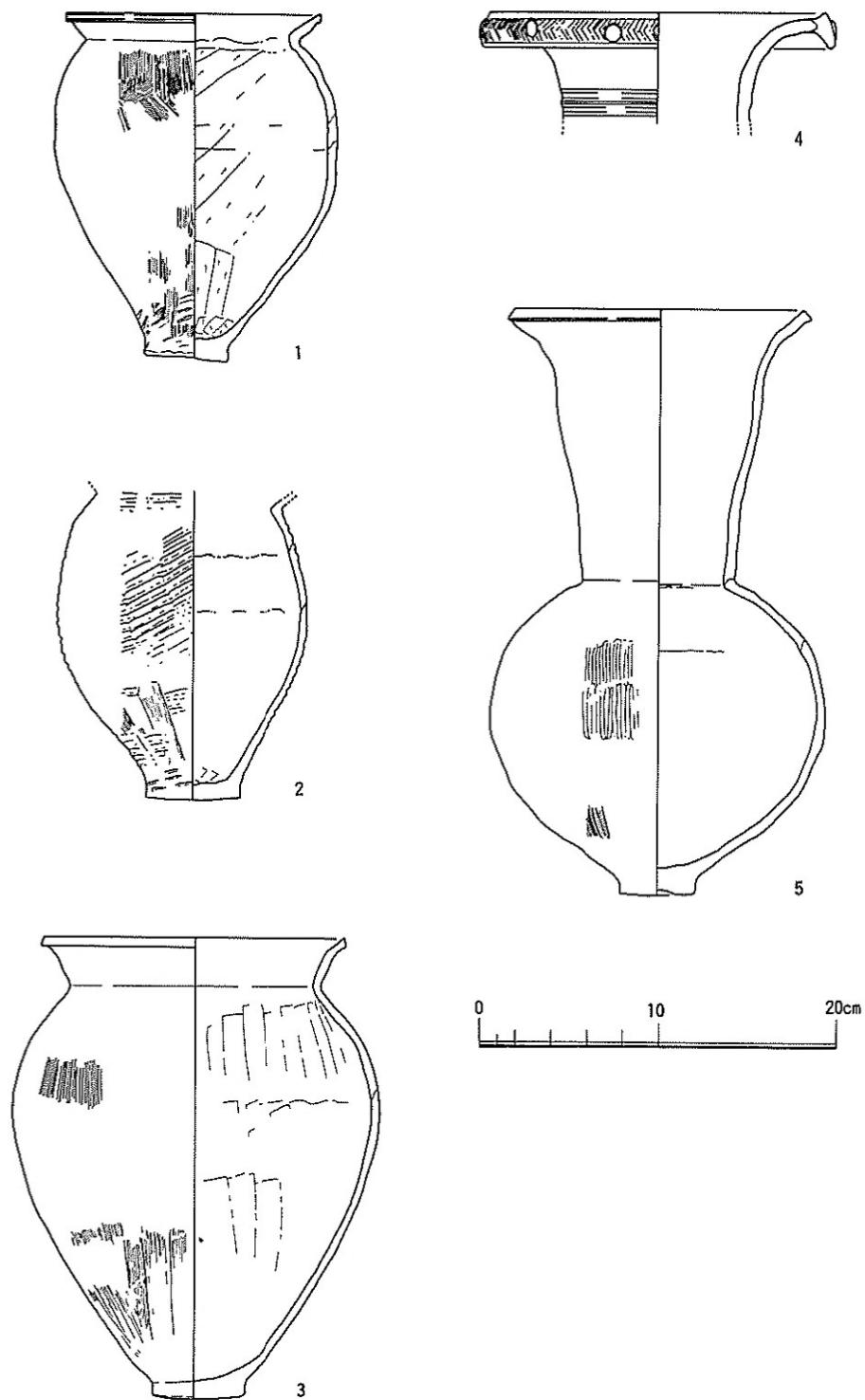


fig.90 弥生後期遺構面II S X1011 出土遺物 S=1/4